

# 京都府遺跡調査概報

## 第 67 冊

### 1. 京都縦貫自動車道関係遺跡

(1) 山尾古墳

(2) 地頭・大俣地区遺跡

### 2. 第二京阪自動車道関係遺跡

(1) 内里八丁遺跡

(2) 上津屋遺跡

1 9 9 5

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。発掘調査については、『京都府遺跡調査報告書』・『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』などの各種刊行物によってその成果を公表するとともに、毎年、展覧会や埋蔵文化財セミナーを開催し、各遺跡の調査内容や出土遺物などを広く府民に紹介し、普及・啓発活動にも意を注いでいるところがあります。

本書は、平成6年度に実施した発掘調査のうち、京都府道路公社、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて行った、京都府縦貫自動車道関係遺跡、第二京阪自動車道関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・綾部市教育委員会・舞鶴市教育委員会・八幡市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成7年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理 事 長 樋 口 隆 康

# 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 京都縦貫自動車道関係遺跡      2. 第二京阪自動車道関係遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 京都縦貫自動車道関係遺跡 (1)山尾古墳	綾部市坊口町山尾	平6.4.18～ 9.13	京都府道路公 社	引原 茂治 野々口陽子 野島 永
(2)地頭・大俣地区遺跡	舞鶴市大字地頭小字中迫、 大字大俣小字別庄、矢削	平6.4.18～ 平7.1.27		尾崎 昌之 黒坪 一樹 大岩 洋一
2. 第二京阪自動車道関係遺跡 (1)内里八丁遺跡	八幡市内里八丁、内里日向 堂ほか	平6.4.13～ 平7.3.3	日本道路公団 大阪建設局	竹原 一彦
(2)上津屋遺跡	八幡市上津屋	平6.5.13～ 5.24		岸岡 貴英

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

# 目 次

1. 京都縦貫自動車道関係遺跡平成6年度発掘調査概要-----	1
(1) 山尾古墳-----	3
(2) 地頭・大俣地区遺跡-----	25
2. 第二京阪自動車道関係遺跡平成6年度発掘調査概要-----	39
(1) 内里八丁遺跡-----	44
(2) 上津屋遺跡-----	68

# 挿 図 目 次

1. 京都縦貫自動車道関係遺跡	
第1図	調査地位置図-----2
(1) 山尾古墳	
第2図	トレンチ配置図-----4
第3図	地形測量図-----5
第4図	墳丘平面図-----7
第5図	墳丘立面・側面図-----9
第6図	墳丘断面図-----11
第7図	墳丘列石断面図-----12
第8図	石室実測図-----14
第9図	地形測量図-----15
第10図	中世土壙平面図・断面図-----16
第11図	出土遺物実測図-----17
第12図	テラスを有する7世紀の古墳-----18
第13図	築造規格(1)-----19
第14図	築造規格(2)-----20
第15図	羨門部の形態-----22
第16図	終末期方墳墳丘形態模式図-----23
第17図	山尾古墳復原想定図-----24
(2) 地頭・大俣地区遺跡	
第18図	調査地位置図-----25
第19図	投影横断面図-----26
第20図	調査トレンチ配置図-----27
第21図	西飼神社遺跡トレンチ図-----28
第22図	龍尾寺跡トレンチ平・断面図-----29
第23図	洞中古墳平面図-----30
第24図	洞中近世墓平面図-----31
第25図	墓壙実測図-----32
第26図	洞中近世墓出土遺物実測図・拓影-----33
第27図	大俣城跡B地区遺構配置図-----34

第28図	大俣城跡B地区墓壙実測図	35
第29図	大俣城跡B地区遺物実測図	36
第30図	S K07出土古銭拓影	36
第31図	大俣城跡C地区土層断面図	36
第32図	大俣城跡D地区トレンチ平面図	37
<b>2. 第二京阪自動車道関係遺跡</b>		
第33図	調査地周辺遺跡分布図	41
第34図	調査地位置図	42
<b>(1) 内里八丁遺跡</b>		
第35図	第4遺構面平面図	45
第36図	第4遺構面・竪穴式住居跡・掘立柱建物跡実測図	46
第37図	第4遺構面竪穴式住居跡群出土遺物実測図	47
第38図	第3遺構面平面図	49
第39図	S H04実測図	50
第40図	S H05・06実測図	51
第41図	S H04出土遺物実測図	52
第42図	S H05・06出土遺物実測図	54
第43図	第2遺構面平面図	55
第44図	S X11・13実測図	56
第45図	S D86出土遺物実測図	58
第46図	S X11出土遺物実測図	59
第47図	S X11出土銅銭拓影・銅製袴帯	60
第48図	第1遺構面b平面図	61
第49図	S E09・10出土遺物実測図	62
第50図	第1遺構面a平面図	63
第51図	試掘トレンチ土層断面図	64
<b>(2) 上津屋遺跡</b>		
第52図	トレンチ配置図	68
第53図	土層柱状図(第1～3トレンチ)	69
第54図	第3トレンチD地点土層断面図	69

# 付 表 目 次

## 1. 京都縦貫自動車道関係遺跡

### (2) 地頭・大俣地区遺跡

付表 1	洞中近世墓一覧表-----	32
付表 2	城跡B地区墓壙一覧表-----	35

# 図 版 目 次

## 1. 京都縦貫自動車道関係遺跡

### (1) 山尾古墳

図版第 1	調査地全景(南東から)	
図版第 2	(1) 調査地遠景(南から)	(2) 調査地近景(北から)
図版第 3	(1) 墳丘全景(南から)	(2) 石室開口部検出状況(南西から)
図版第 4	(1) 墳丘全景(南西から)	(2) 墳丘全景(南東から)
図版第 5	(1) 墳丘北東隅排水溝検出状況	(2) テラス状遺構列石検出状況(南西から)
	(3) 第一列石南西コーナー(南西から)	
	(4) 第二列石南西コーナー(南東から)	(5) 墳丘西側断ち割り(西から)
	(6) テラス状遺構下段中央断ち割り(南東から)	
図版第 6	(1) 天井石検出状況(北から)	(2) 礫床検出状況(南から)
図版第 7	(1) 遺物出土状況(南から)	(2) 遺物出土状況(石材除去後)
図版第 8	(1) 山尾古墳完掘状況(南から)	(2) 完掘後調査地全景(真上から)
図版第 9	(1) 中世土壙検出状況	(2) 銭貨出土状況
図版第 10	出土遺物(須恵器・瓦質土器・銭貨)	
	(2) 地頭・大俣地区遺跡	
図版第 11	(1) 龍尾寺跡調査前風景(西から)	
	(2) 龍尾寺跡トレンチ南壁土層断面(北から)	
図版第 12	(1) 西飼神社遺跡調査前風景(北から)	
	(2) 西飼神社遺跡トレンチ全景(南から)	

- 図版第13 (1)洞中古墳調査前風景(北から) (2)洞中古墳全景(西から)
- 図版第14 (1)洞中近世墓調査前風景(北から) (2)洞中近世墓全景(東から)
- 図版第15 (1)洞中近世墓近景(東から)  
(2)洞中近世墓 S K05遺物出土状況(西から)
- 図版第16 (1)洞中近世墓 S K03遺物出土状況(西から)  
(2)洞中近世墓 S K05遺物出土状況
- 図版第17 洞中近世墓出土遺物
- 図版第18 (1)大俣城跡B地区調査前風景 (2)大俣城跡B地区全景
- 図版第19 (1)大俣城跡B地区 S K09完掘状況  
(2)大俣城跡B地区 S K12完掘状況
- 図版第20 (1)大俣城跡B地区 S K14遺物出土状況  
(2)大俣城跡B地区出土遺物
- 図版第21 (1)大俣城跡C地区調査前風景(北から)  
(2)大俣城跡C地区完掘状況(北から)
- 図版第22 (1)大俣城跡D地区重機掘削状況(南から)  
(2)大俣城跡D地区西壁土層断面(東から)

## 2. 第二京阪自動車道関係遺跡

### (1) 内里八丁遺跡

- 図版第23 (1)内里八丁遺跡全景(北から) (2)D地区調査前全景(南東から)  
(3)第1遺構面全景(南から) (4)S E10遺物出土状況
- 図版第24 (1)第2遺構面全景(南から) (2)S D85上層遺物出土状況(東から)  
(3)調査風景(南から) (4)S D85セクション(南から)
- 図版第25 (1)S D86下層遺物出土状況(南から)  
(2)S D86溝底遺物出土状況(東から) (3)S X12検出状況  
(4)S D86溝底の牛足跡群(南から)
- 図版第26 (1)木製暗渠全景(西から) (2)木製暗渠・池状遺構セクション(南から)  
(3)木製暗渠東小口(東から) (4)木製暗渠結合部(北から)
- 図版第27 (1)池状遺構セクション(南から) (2)金属器出土状況(西から)  
(3)銅銭・丸靱出土状況(東から) (4)和同開珎・丸靱出土状況(東から)
- 図版第28 第3遺構面全景(空撮・下方が北)
- 図版第29 (1)第3遺構面全景(北から) (2)S H06・05・04全景(手前・西から)  
(3)S H06竈セクション(南東から) (4)S H06竈支脚(手前・西から)
- 図版第30 (1)S H04全景(南西から)  
(2)S H04埋土中間層遺物出土状況(南西から)  
(3)S H04竈セクション(南東から)



- (4) S H04床面勾玉出土状況(北東から)
- 図版第31 (1) S H05全景(南西から) (2) S H05貯蔵穴(北西から)  
 (3) S H05竈セクション(南東から) (4) S H05竈支脚(南西から)
- 図版第32 (1) 第4遺構面全景(南から) (2) 第4遺構面全景(東から)  
 (3) S H07全景(北西から) (4) S H07貯蔵穴(北西から)
- 図版第33 (1) S H08全景(南西から) (2) S H08貯蔵穴(南西から)  
 (3) S H09全景(南から) (4) S H08床面上の粘土塊(南東から)
- 図版第34 (1) S H10全景(南東から) (2) S H11全景(手前・西から)  
 (3) S B22全景(南から) (4) S B22柱穴内器台出土状況(東から)
- 図版第35 (1) S D90中層遺物出土状況1(南から)  
 (2) S D90中層遺物出土状況2(東から)  
 (3) S D90中層遺物出土状況3(南から)  
 (4) S D90中層遺物出土状況4(南から)
- 図版第36 (1) S D90中層遺物出土状況5(北から)  
 (2) S D90中層遺物出土状況6(北から)  
 (3) S D90下層遺物出土状況(北から)  
 (4) S D90セクション(北東から)
- 図版第37 (1) 第5遺構面全景(南から) (2) D1地区北壁セクション(南から)  
 (3) 微高地東斜面断ち割り(西から) (4) 東斜面断ち割りセクション(南から)
- 図版第38 (1) 第15トレンチ全景(東から) (2) 第15トレンチ壁面の水田畦畔  
 (3) 現在の島畑(第14トレンチの東) (4) 第19トレンチ全景(南から)
- 図版第39 内里八丁遺跡出土遺物  
 (2) 上津屋遺跡
- 図版第40 (1) 第2トレンチ全景(南から) (2) 第3トレンチ全景(北東から)

# 1. 京都縦貫自動車道関係遺跡 平成6年度発掘調査概要

## はじめに

この調査は、京都縦貫自動車道建設に伴うもので、平成4年度から実施している。対象地域は、京都府綾部市・舞鶴市・宮津市に及ぶ。綾部市域から調査を行い、これまでに、綾部市域の調査対象地は1遺跡を残してほぼ終了し、舞鶴市域の遺跡も2遺跡を調査している。平成6年度の調査地は、綾部市坊口町の山尾古墳と舞鶴市地頭・大俣の西飼神社遺跡・洞中古墳群・龍尾寺跡・大俣城跡である。

山尾古墳は、無袖の横穴式石室を主体部とする方墳で、四段の列石をめぐらす。上二段は方墳部分を形成し、下二段は鋭角的に「コ」字状に屈曲し、テラスを形成する。築造年代は、7世紀後半頃と考えられる。西飼神社遺跡・龍尾寺跡では、顕著な遺構・遺物を検出しなかった。洞中古墳群は、周知の遺跡である洞中古墳及びその付近の古墳状隆起部分の2か所からなる。調査の結果、洞中古墳は古墳ではないことが判明し、古墳状隆起部分では近世墓群を検出した。このような結果から、古墳状隆起部分は洞中近世墓と仮称する。

大俣城跡は、南西から北東方向に張り出す尾根先端の隆起部分に築かれた山城である(A地区)。今回は、この山城部分のほかに、谷を隔てた南東側の尾根上の段々状地形部分(B地区)と堀切状地形部分(C地区)、及びその南東側の谷の平坦地部分(D地区)についても、大俣城跡関連遺構の可能性があるので調査を実施した。A地区については、残存状況が良好な山城跡であり、平成7年度も継続して調査を行うため、調査内容は終了後にまとめて報告する。B地区では近世墓群を検出した。C地区では堀切状地形に伴う出土遺物がないため、城跡に関連するものかどうかは不明である。D地区では明確な遺構はなく、水田拡張による平坦地であることが判明した。

平成6年度の調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同主任調査員引原茂治、同調査員黒坪一樹・尾崎昌之・野島 永・大岩洋一・野々口陽子が担当した。調査経費は、京都府道路公社に全額負担していただいた。

調査を行うにあたり、京都府教育委員会・綾部市教育委員会・舞鶴市教育委員会・地元各自治会に協力していただいた。また、現地調査においては、猛暑・酷寒の季節を通じて、地元有志の方々及び各大学の学生の方々に参加・協力していただいた<sup>(注1)</sup>。謝意を表したい。なお、山尾古墳の調査では大阪府立女子大学学長上田正昭氏、同志社大学教授森 浩一氏、大阪大学教授都出比呂志氏、立命館大学教授和田晴吾氏、岡山大学助教授新納 泉氏から、大俣城跡の調査では大山崎町歴史資料館学芸員福島克彦氏から現地において格別のご教示をいただいた。記して感謝したい。

この調査概要の執筆にあたっては、各遺跡の調査担当者がそれぞれ分担した。執筆者名は文末に記す。なお、山尾古墳以外は、地頭・大俣地区遺跡としてまとめて報告する。(引原茂治)



第1図 調査地位置図(1/50,000)

- |           |           |            |             |            |
|-----------|-----------|------------|-------------|------------|
| 1. 山尾古墳   | 2. 山尾北古墳  | 3. 山尾東古墳群  | 4. 八幡古墳     | 5. ジンド古墳   |
| 6. 金鶏塚古墳  | 7. 神宮谷古墳群 | 8. 稲荷山古墳   | 9. 山田山古墳群   | 10. 栗ヶ丘古墳群 |
| 11. 菖蒲塚古墳 | 12. 聖塚古墳  | 13. 久田山古墳群 | 14. 青野西遺跡   | 15. 青野南遺跡  |
| 16. 綾中廃寺  | 17. 高谷古墳群 | 18. 三宅古墳群  | 19. 以久田野古墳群 | 20. 私市円山古墳 |

## (1) 山尾古墳

### 1. 周辺の遺跡

山尾古墳は、京都府綾部市坊口町山尾に所在する。山尾古墳は、岳山(標高368m)の山塊から南に派生する尾根の南斜面上に築かれている。古墳の左右、背後は山々に囲まれ、眼下には犀川を見下ろす。標高は約125m、平地との比高差は約35mを測る。

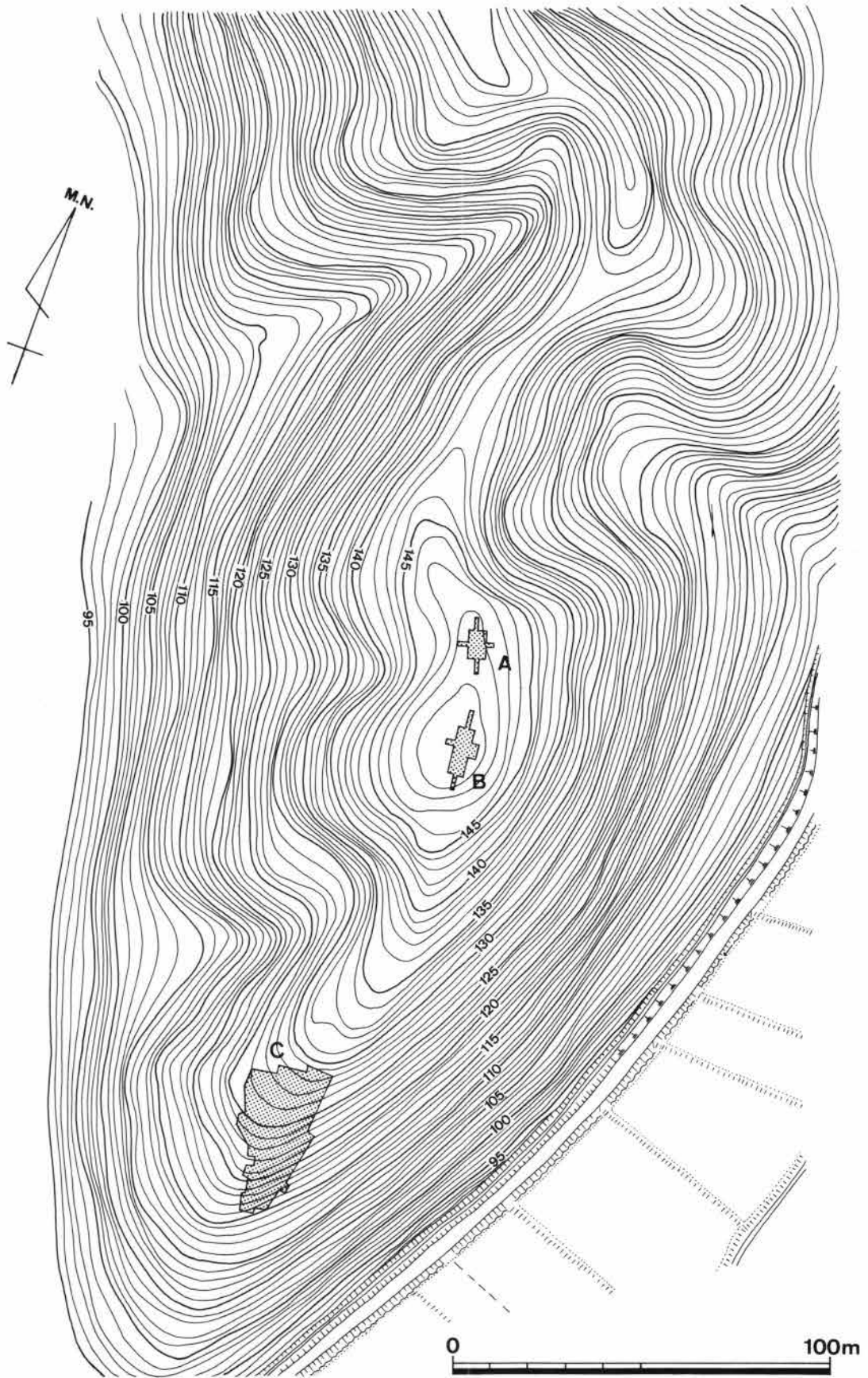
坊口町は、綾部市南部を東流する由良川に対して北方から合流する犀川の上流にあり、綾部市街の平野部から約10kmほど北上した山間部に位置する。周辺では、前・中期古墳や集落遺跡などは確認されていないが、近年、京都縦貫道の建設に伴う発掘調査でいくつかの後期古墳の実態が明らかになっている。

このうち、ジンド古墳は、山尾古墳の南東約1kmのところに位置している。この古墳は、6世紀後半から7世紀初頭頃の横穴式石室をもつ小規模な円墳で、素環鏡板付轡や壺鍔などの馬具や鉄鎌、多量の須恵器などが出土している<sup>(注2)</sup>。山尾古墳の背後の丘陵の裾部には、山尾北古墳があり、6世紀末葉頃の須恵器を伴う半壊した横穴式石室墳が検出されている<sup>(注3)</sup>。また、山尾古墳に隣接する尾根には、4基の円墳からなる山尾東古墳群や、八幡古墳が分布し、いずれも半壊した横穴式石室墳がみられる。綾部市全域を通してみると、方墳の聖塚古墳(一辺54m)、円墳の私市円山古墳(径71m)などが中期の大形古墳としてよく知られている。後期古墳では、金銅装の馬具が出土した6世紀前半頃の三宅1号墳(荒神塚古墳)<sup>(注6)</sup>などが有力古墳として知られるにすぎない。7世紀に築造された古墳の調査例としては、北丹波全域を通じて、列石を伴う方墳が調査された福知山市の下山古墳群<sup>(注7)</sup>などがあげられる。

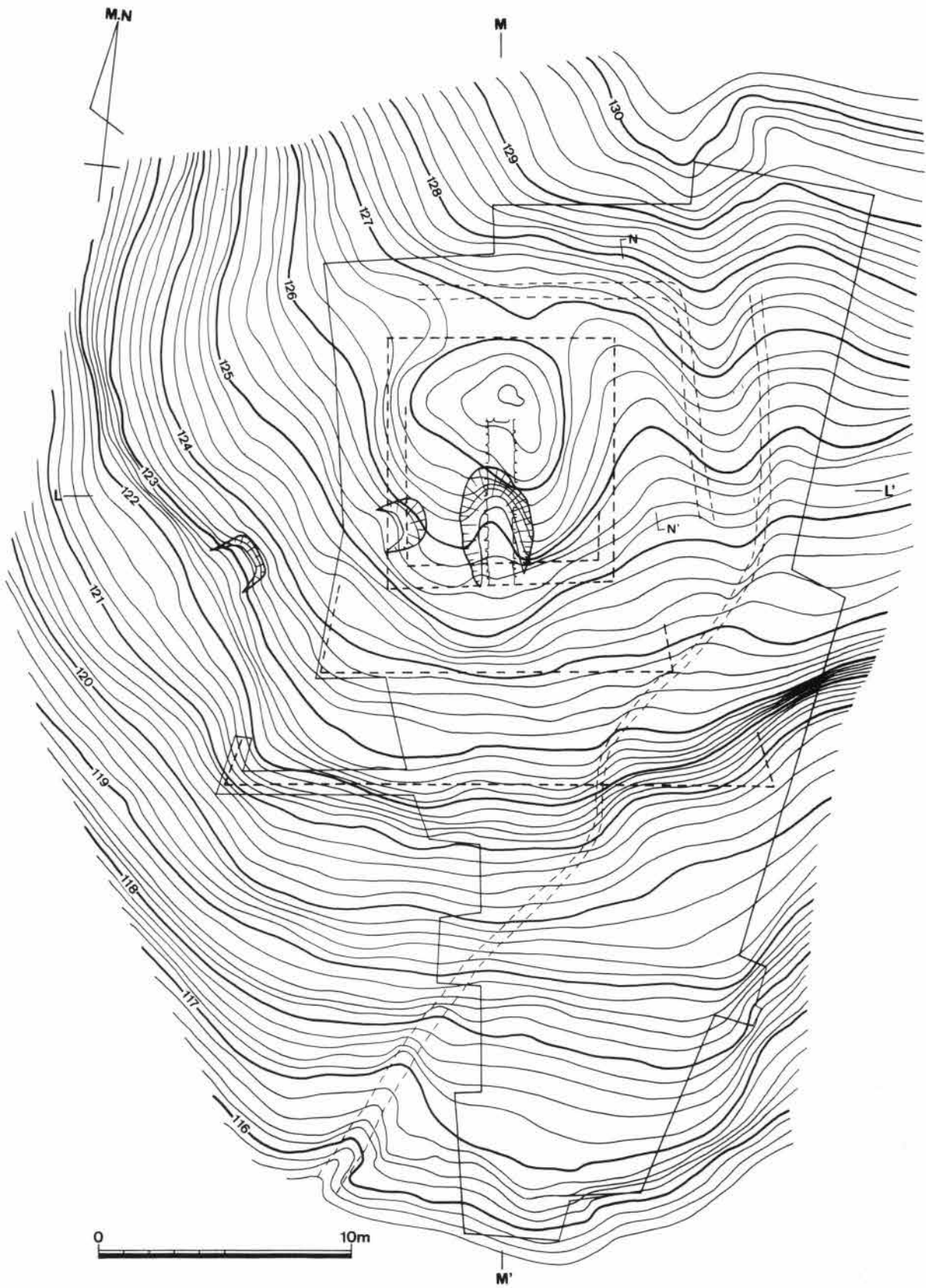
飛鳥時代以降は、現在の市街地周辺にみられる綾中廃寺が建立される。これは、京都府北部では最も早い時期の白鳳寺院である<sup>(注8)</sup>。また、山尾古墳の東1kmのところに延喜式内社阿須々岐神社が所在し、周辺に、「物部」、「志賀」などの古代氏族名に由来する地名が残っていることは注目される。山尾古墳の丘陵に隣接する山添いの道は、江戸時代には、綾部から舞鶴方面へ物資を運搬する一般的なルートの一つであった。由良川流域から大きく離れた内陸部ではあるが、日本海側へ抜ける道の中継点として古くから開発された地域であったとみられる。

### 2. 調査概要

墳丘の残存状況は比較的良好であったが、墳頂部には、調査当初から既掘坑が存在した。墳丘の西裾には石室の天井石を転用したとみられる石材が据え置かれ、その後方に稲荷社がまつられていた。掘削以前の墳丘の外観から、方墳を想定することは困難であったが、後背地では尾根稜線を断面「L」字形に掘削していることが推定された。稲荷社と石材を隣接地に移転後、周辺部の調査を進めた結果、横穴式石室の存在を確認した。



第2図 トレンチ配置図



第3図 地形測量図

山尾古墳は、石室を内包する二段築成の墳丘部分と、その前庭部に広がる「コ」の字状の二段にわたるテラス状遺構によって構成される(第5図)。墳丘には石室開口部から続く外護列石が二段にめぐり、二段のテラス状遺構にも、各段に石垣状の列石が認められた。いずれも、ほぼ垂直に二～六段に積みあげられており、南側前面からみると、階段状に石列を四段に積みあげる特異な形態であることが判明した。

以下、テラス状遺構を画する二段の列石を下段から第一列石、第二列石とし、墳丘外護列石を下段から第三列石(墳丘一段目外護列石)、第四列石(墳丘二段目外護列石)と呼ぶ。

#### (1)外部構造(第4図)

a. テラス状遺構下段 南側から各遺構について概観する。第一列石の東西幅は、復原推定約21.4m(一部削平、現存長14.7m)を測る。南北長は、主軸部分で、長さ4.5mを測る。テラス状遺構平坦面は、地山を削り出した後、約0.7～1.0mの盛り土をすることによって築いている。テラス状遺構の西側部分の原地形は、丘陵斜面で低く傾斜しており、列石基底面における東西の高低差は約1.5mに及ぶ。そのため、石積みは東側では二～三段を基本としているが、西側では五～六段を積み、上面のレベルを補正している。列石の東側辺は、すでに流失しているが、西側辺は71°の角度で「コ」の字状に山側へ屈曲する。西側辺は、一部調査範囲外のため完掘できていないが、地形の現状から推定すると、約3m程度の長さがあるとみられる。列石の南西コーナーは、平面が鋭角をなすように大形の石を据え、その隅角を鋭角に調整する。石積みは、全体にはほぼ垂直に積み上げており、石材の平面を立てて積まれている。石材の大きさは、西側辺のコーナー付近では特に大きなものを用いている。

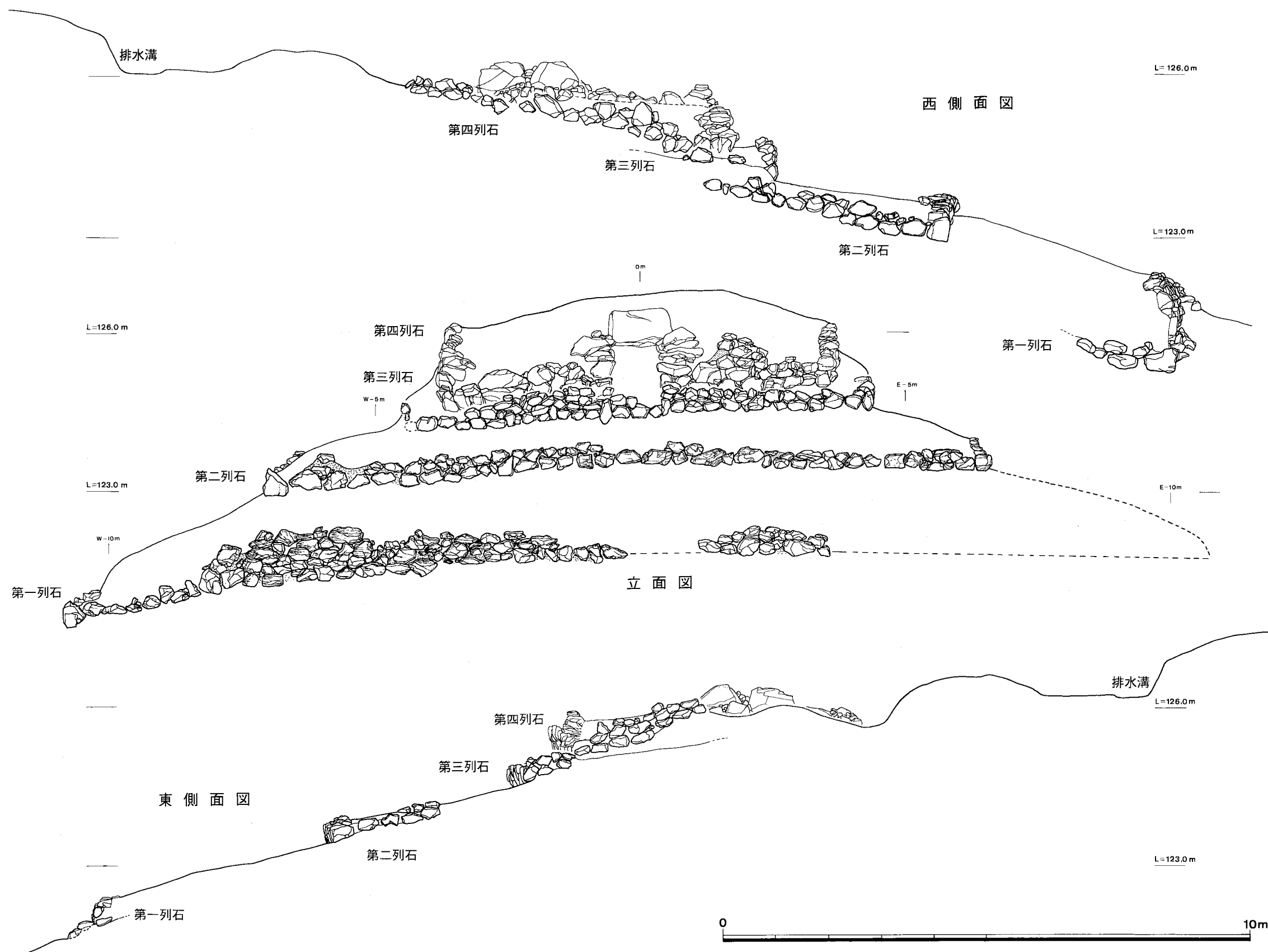
b. テラス状遺構上段 第二列石は、東西幅13.8m、南北長は、主軸ラインで3.5mを測る。上段の東側辺の現存長は約2.0m、同じく西側辺は4.7mを測る。西側辺の列石については、ほぼ築造当初の形態を保っているとみられる。東側辺の列石の北端は、やや流失している可能性があるものの、当初のものと大きくは変わらないであろう。築造当初から、両側辺の長さは均等なものではなく、西側辺を長く敷設している。石積みはほぼ垂直に、側面積みで二～三段積まれている。列石基底部での東西の高低差は、下段に比べると小さく、約0.5mにとどまる。第二列石の各コーナーは、東側で78°、西側で84°の角度をもって、「コ」の字状に山側へ屈曲する。石材は、西側辺に使用されているものの方が大きく、南西のコーナーには上段と同様、鋭角に交わる二面をもつ割石を隅角に用いている。先に述べたように、両側辺の長さは西側が当初から長く敷設されていることからみて、テラス状遺構は、南西から西にかけて、下方から見上げた視界を意識して築造されていることがわかる。第一列石の前面は、急斜面となっており、墓道は検出していない。おそらく、墓道は南西あるいは西の斜面に敷設されていたと推定される。二段のテラス状遺構は、方墳部分の完成後、上段から下段へと順に築成される。列石の石材は、石室前庭部斜面の地山面を一段削り込み、盛り土を行っている。

c. 墳丘(方墳部分) 墳丘は、二段築成の方墳で、各段には石垣状の列石がめぐり。墳丘の規

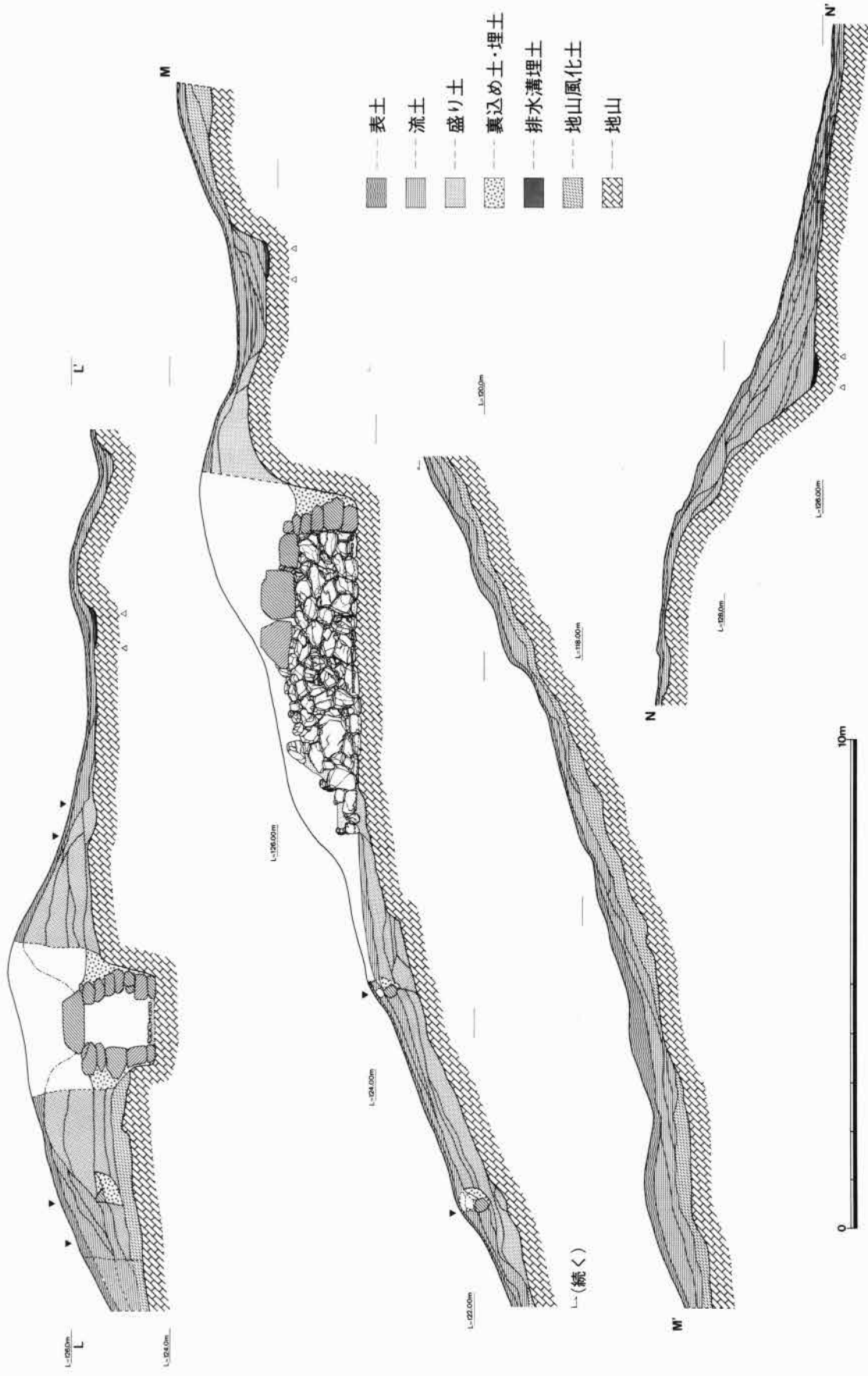


第4図 墳丘平面図 S=1/80





第5図 墳丘立面・側面図



第6図 墳丘断面図

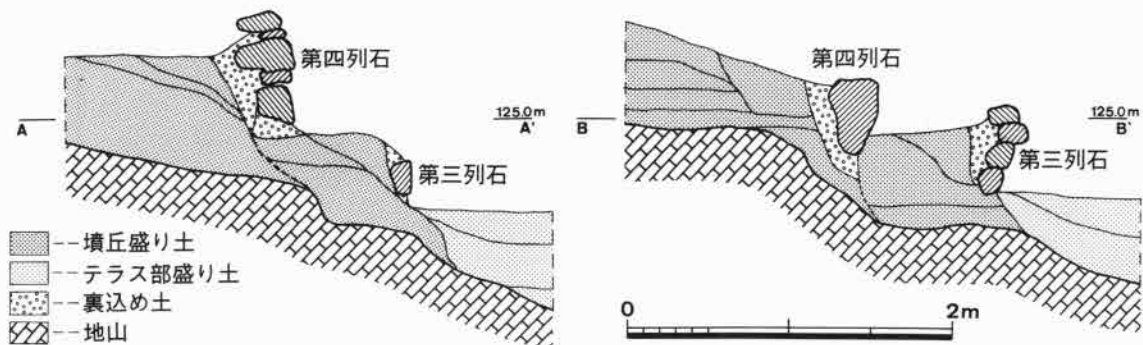
模は、一段目が東西幅約9.0m・南北長約9.7~9.9m、二段目が東西幅7.6mを測る。一段目の東西幅は、南西角の石材が欠落しているため、復原長を示すにとどめる。また、南北長は石室主軸延長上で計測し、北側の測点は墳丘築成時に地山を削り出した際の傾斜変換点で計測している。西辺は第三列石の残存長約1.7m、第四列石の残存長約6.3m、東辺は第三列石の残存長約0.9m、第四列石の残存長約2.7mを測る。以下、一段目の外護列石を第三列石、二段目の外護列石を第四列石とする。

墳丘一段目にあたる第三列石の石積みは、全体に約二~三段積み、高さ約40cmを測る。次に、墳丘二段目の第四列石の石積みは、最もよく残存しているところで五~六段積み、高さ約1.1mを測る。この高さで全体を復原すると、石材はほぼ天井石の架構されるレベルまで積み重ねられていたことになり、第三列石の積み石の高さよりも高くなる。一方、墳丘の北辺には、列石の石材に該当するような石材は認められず、掘形も検出されなかったため、列石は当初からめぐっていなかったとみられる。東辺及び西辺の列石も一部流失しているものの、当初から全面には及ばず、墳丘前方からの視界に入る部分のみ、石材を配していたようである。

墳丘の高さは、石室主軸中央付近において、第一列石基底から残存する盛り土の上面まで約6.0mを測る。築造当初は、7m以上の高さがあったと推定される。盛り土は、全体的に比較的均質な土層であり、地山を削り出した後、短期間のうちに築かれたとみられる。版築などの作業工程は認められない。

列石の構築は、石室に取り付く第四列石の並びがまず築かれ、続いて墳丘基底にあたる第三列石が築かれている。第四列石と第三列石の基底ラインは、階段状に削り出された地山面に沿って、約30~40cmの高低差がある。周辺の地形は、東から西にかけての傾斜が強く、列石南辺の基底部は原地形の傾斜に沿って東側が高く、西側に向かって低く据えられている。

また、墳丘の背後は、墳形にあわせて丘陵を大きく「L」字状にカットしており、高さは最大約3.0mを測る。このカット面の最下部に、全長約20m・幅約60cm・深さ約10cmの排水溝が設けられている。墳丘の東側のカット面は、地山が外堤状に削り出されている。テラス状遺構下段の第一列石の基底から墳丘背後の排水溝までの主軸ラインでの南北長19.6m、第一列石の復原東西幅約21.4mを測るため、墓域は少なくとも約400㎡を有することになる。



第7図 墳丘列石断面図

## (2)石室構造(第8図)

石室は、南に開口する無袖式の横穴式石室である。石室全長6.23m・玄室長5.43m(奥壁から第四列石基底部まで)・羨道長0.8m・奥壁部幅0.93m・高さ約1.2m(石室最奥部)を測る。主軸は磁北を基軸として、7°西に振る。

石室の残存状況は良好であり、3石の天井石が架けられたまま検出された。天井石は、本来、第四列石が石室に取り付くラインまで合計6石程度架けられていたとみられる。このライン上に両側壁とも高さ1m足らずの立石を配置しているので、玄門としての意識があったと考えられる。したがって、第四列石と第三列石の間の側壁の石積みは、羨道部の退化したものと考えらるべきであろう。

石室は、まず北から南へと傾斜する地山を幅約3m・深さ約2m掘り込んで墓壙を造り、その最奥部に奥壁基底石を据える。玄室は、玄門部の立石の上面レベルにほぼ目地が通る。石材は、このレベルまで、長さ40~60cm大のものを二~三段に側面積みし、拳大の石材で高さを調節しながら目地を通す。この段階で、玄室に取り付く第四列石の南辺を、立石の上面レベルまで築いたのち、さらに玄室上部の石材を二~三段に側面積みしている。こうした構築過程は、左側壁開口部で側壁の立石とそれに取り付く第四列石の石材の双方に、上段の側壁の石材が架構していることから復原できる。

石室床面には、奥壁から手前3.4mの範囲に直径10~20cm程度の石材を用いた礫床が認められる。礫床の南端から約30cm奥には、いくつかの人頭大の石材が礫床直上に検出されており、閉塞石の可能性を示す。また、石室の基底部は、第三列石正面の基底部のレベルと一致し、石室開口部には第三列石の並びに続く列石を検出した。この部分の石材と、隣接する第三列石の西側の並びはやや積み方を異にしており、閉塞段階で構築されたとみられる。

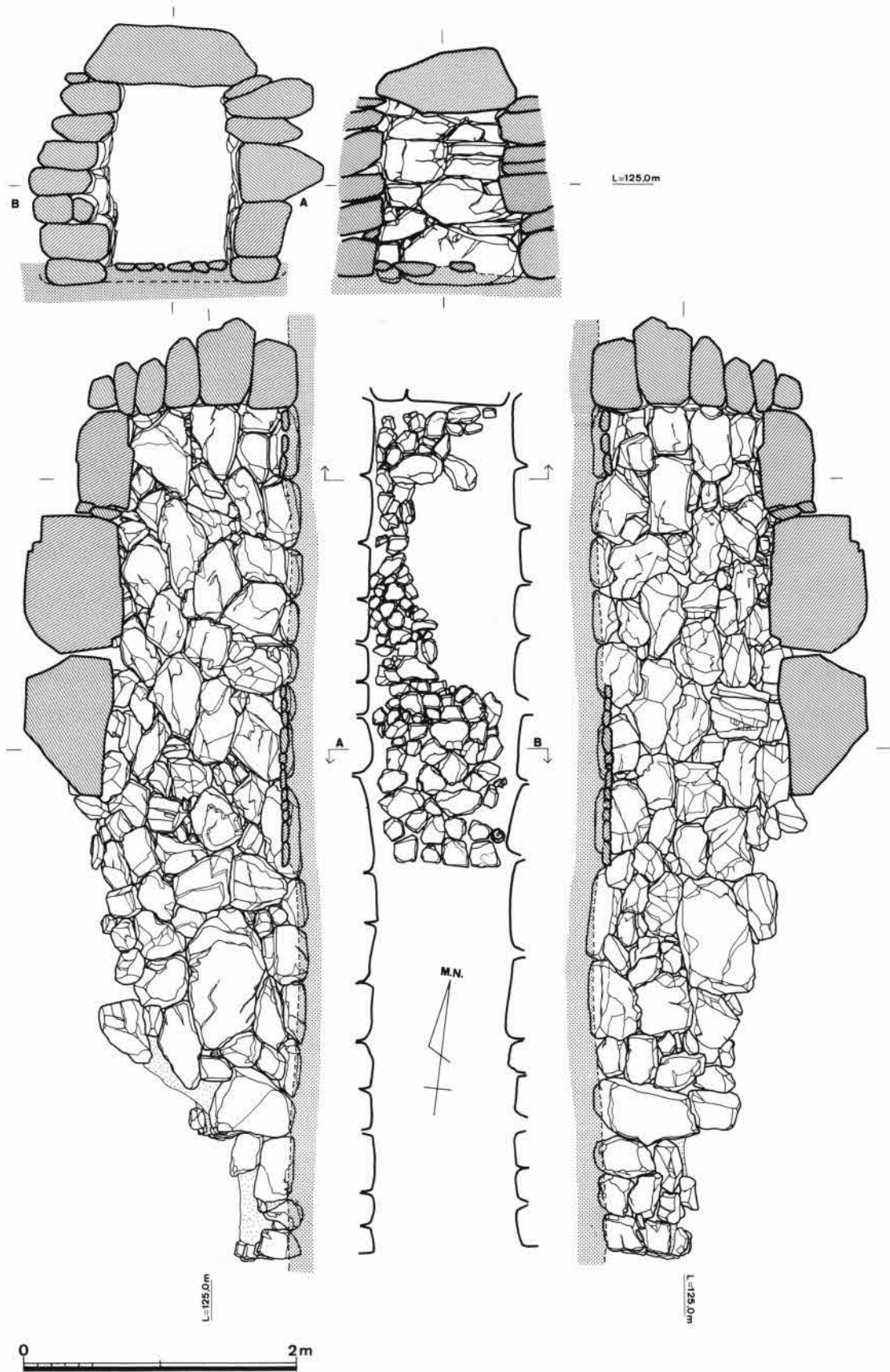
床面は、一部を残して後世の攪乱を受けており、石室内の出土遺物は、礫床直上の南東隅から須恵器の小形高杯1点(第11図1)と、礫床上面約50cmの攪乱土の中から須恵器甕の破片(第11図4)が出土したにとどまる。そのうち、小形高杯の型式は、ほぼ飛鳥Ⅲ型式、陶邑Ⅲ型式2段階に比定できる<sup>(注9)</sup>。

石室の石材は、列石の石材と同じで、砂岩、礫岩などの堆積岩類を用いている。これらは、古墳周辺の山塊に露出している石材と同じ組成で、周辺地域から運ばれたとみられる。礫床の石材は、石室とは異なる緑色系の蛇文岩が用いられている<sup>(注10)</sup>。

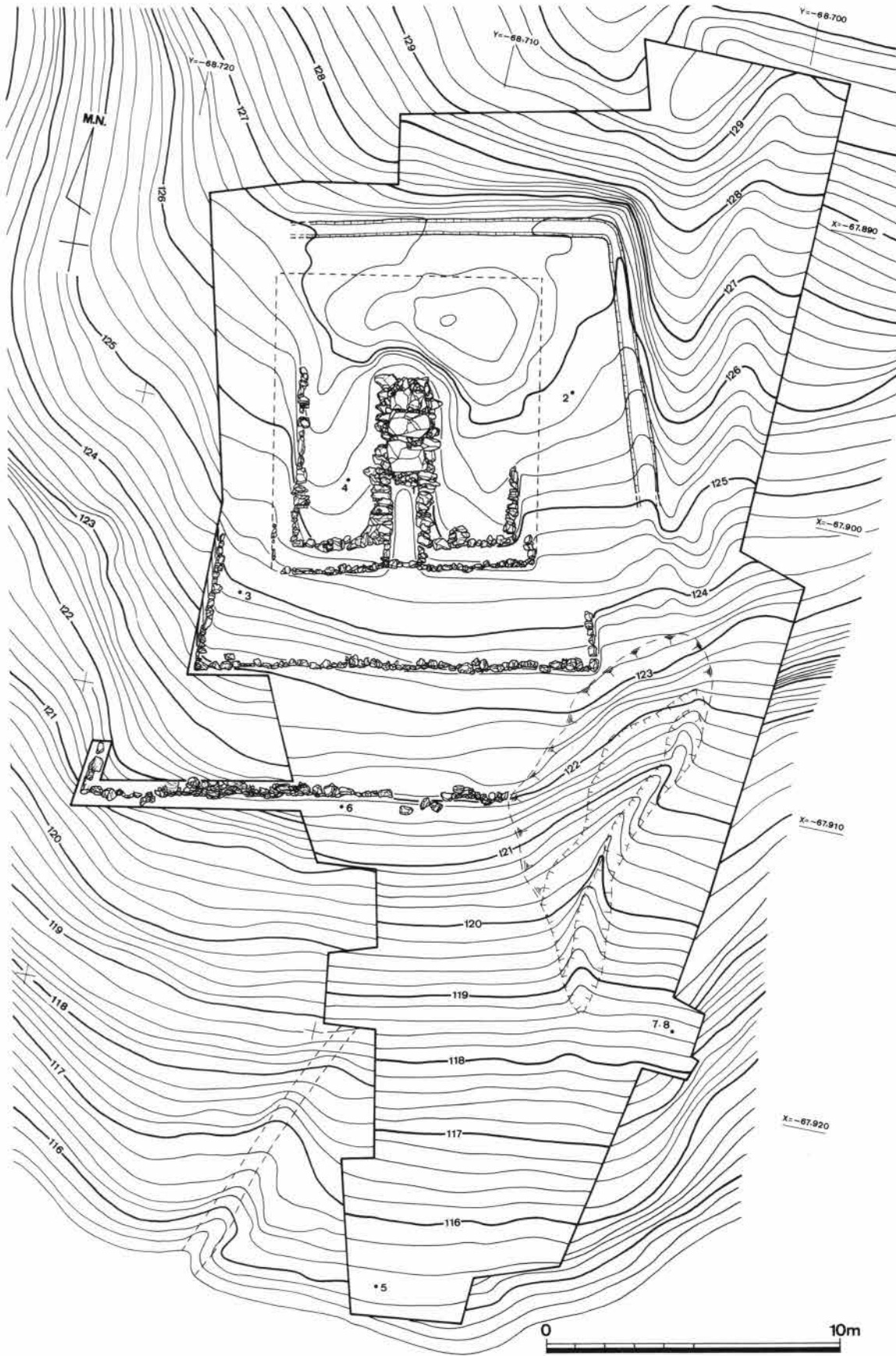
また、墳丘周辺部では、方墳部分の東側平坦面で小形高杯の脚部破片(第11図2)、テラス状遺構上段の南西角で須恵器大甕の破片(第11図3)、テラス状遺構の下方で須恵器甕破片(第11図5・6)が出土している。墳丘の流土及び攪乱土の中からは、「寛永通宝」などの銭貨が出土しているが、稲荷社に伴うものであろう。

## (3)中世墓(蔵骨器)(第10図)

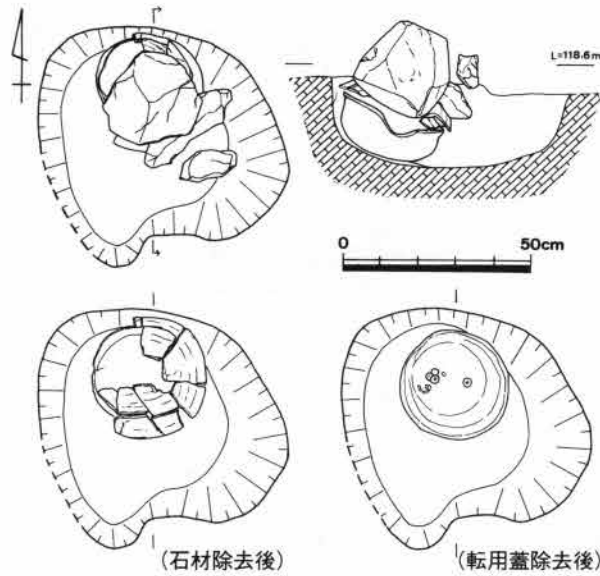
トレンチの南東の丘陵斜面で、蔵骨器とみられる土器を埋納した土壙を検出した。土壙の規模は、検出面で直径60cm・深さ20cmを測る。蔵骨器とみられる容器は、土師器鍋を外容器としてお



第8図 石室実測図



第9図 地形測量図



第10図 中世土壇平面図・断面図

り、東播系の鉢を蓋として使用している。土師器鍋の中からは、北宋銭などの銭貨5枚が出土した。埋土中には若干の炭化物が含まれるが、骨片などは検出されていない。形態からみて、13世紀中頃の墓と推定される。

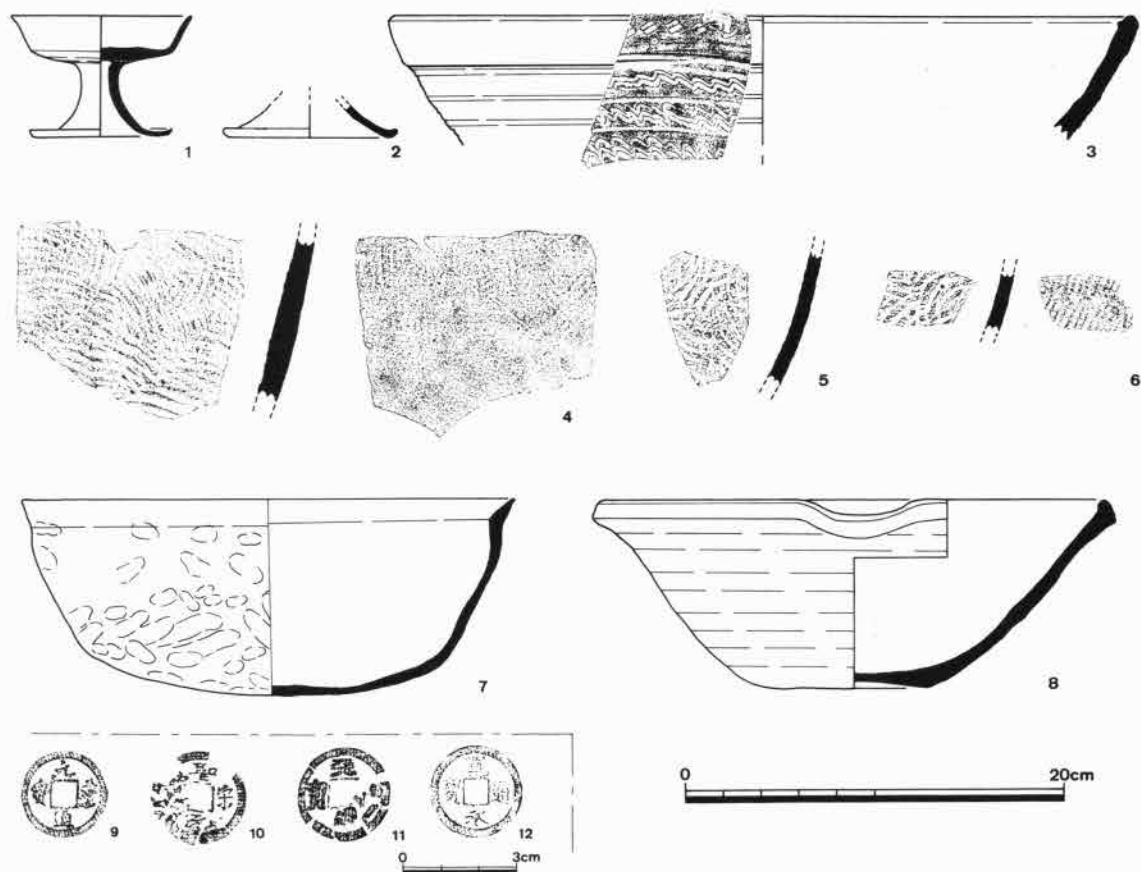
#### (4)北丘陵トレンチ

山尾古墳の北側尾根頂部は、古墳の可能性のある微隆起地形があったため、2か所のトレンチを設定した。数か所のピットと、南側トレンチでは直径40cmの焼土坑が検出されたが、時期

を確定しうる出土遺物は認められなかった(第2図A・B)。

### 3. 出土遺物(第11図・図版第10)

1は、石室玄門部付近床面から出土した高杯である。口径9.6cm・器高6.4cmを測る。杯部は浅く、やや広がる口縁にわずかに外湾する端部を持つ。底部外面はヘラ削りを施す。ラッパ状に広がる脚部にはすでに透かしがなく、端部を跳ねあげる。2は、墳丘東側流土から出土した高杯脚部細片である。1と同様の形態を持つ。3は墳丘南西側、第二列石と第三列石の間の平坦面の盛り土から出土した須恵器大甕の口縁部である。口径はおよそ40cmに復原できる。口縁端部外側に粘土をやや肥厚させて文様帯を作り出し、木口状の工具によって列点文を施す。その下にも二条の凸線に画された波状文が三条めぐる。4は、石室天井石の西側、第四列石との間の墳丘盛り土から出土した大甕胴部片である。外面に格子目叩き、内面に同心円文を施す。5・6も須恵器甕胴部の細片である。5は、トレンチ拡張区最南端の流土内から出土した。また、6は第一列石中央、やや西よりの地点から出土した。7・8は、北宋銭などの銭貨5枚を埋納していた蔵骨器の外容器として土壇1から出土した。7は、蓋として使用された東播系の須恵器片口鉢である。内面に挿り鉢としての使用痕が残る。口径26.8cm・器高9.8cmを測る。8は、土師器鍋である。口径25.8cm・器高10.3cmを測る。口縁部は外側に強く屈曲する。外面には指頭圧痕が顕著で、下半部を中心に炭化物が付着している。9～12は、蔵骨器から出土した5枚の北宋銭うちの3枚である。9は「元豊通宝」(初鑄1078年)、10は「聖宋元宝」(1101年)、11は「元□通宝」と判読できる。残る2枚は残存状況が悪いが、一枚は「熙寧元宝」(1068年)の可能性が高く、もう一枚は「□□元宝」と判読できる。12は、石室内流土中から出土した「寛永通宝」である。また、墳丘上から鉄銭一枚が出土している(図版第10-(13))。



第11図 出土遺物実測図

#### 4. まとめ

先に述べたように、山尾古墳は、二段築成の方墳部分に、二段にわたるテラス状遺構を敷設した四段の列石を配する方墳であることが判明した。石室内から出土した高杯の型式から、7世紀後半の一時期に葬送が行われたことは明らかである。しかし、古墳の床面は後世の攪乱を受けており、副葬遺物に乏しく、追葬の有無が不明であるため、築造が7世紀後半であるかどうかは、なお慎重に検討する必要がある。石室の構造は、在地的なものであるが、墳丘後背部を「L」字に掘削した墓域の造成、墳丘前面に広がる「コ」字状テラスの存在は、周辺に分布する古墳とは異質である。以下、墳丘構造を中心に若干の検討を加え、山尾古墳の性格について考えてみたい。

①墳丘形態 7世紀の方墳は、全国的にみると約170例確認されているが、このうち墳丘周辺に列石をめぐる方墳は、主に近畿地方と岡山県に集中しており、7世紀の方墳が集中的に分布する千葉県などではほとんど確認されていない。<sup>(注11)</sup>

(a)列石を伴う方墳は、築成の方法によっていくつかの形態に分類されているが、その立面形態に注目すると、大きく二つのタイプに分けることができる。<sup>(注12)</sup>一つは、奈良県石舞台古墳や同西宮古墳にみられるように、列石の築成面にやや傾斜をもち、全体として貼石状を呈するものともう一つは、山尾古墳や岡山県定北古墳のようにほぼ垂直の立面をもつ積み石を基本とし、階段状を呈するものである。<sup>(注13)</sup>前者は、系譜的に葺石につながる伝統的な構築技法とみられるが、後者は

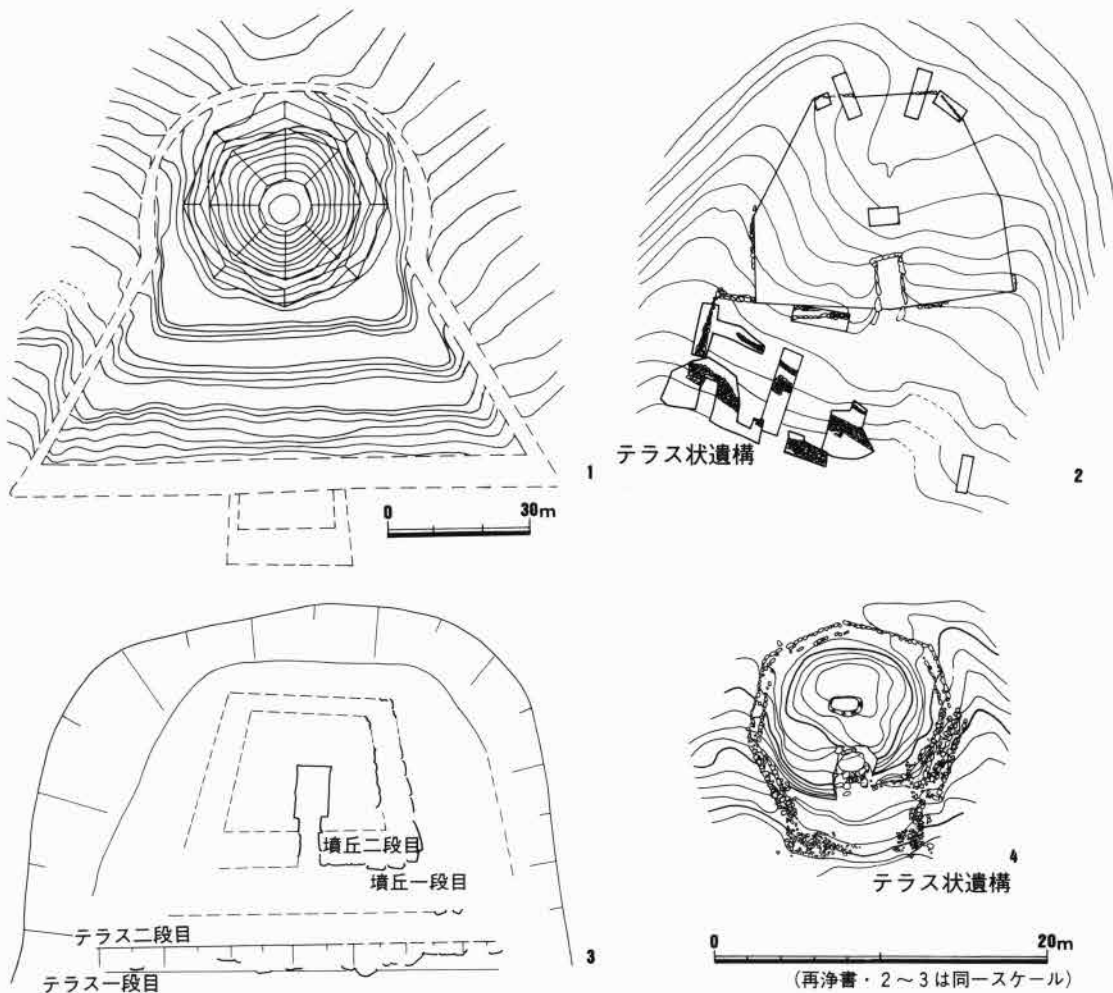


7世紀の方墳に新たに採用される技法で、寺院建築の基壇築成にも通じる。これまでのところ、貼石状の列石は奈良県を中心に分布し、階段状の列石は主に岡山県を中心としている。

(b)近畿地方北部では、列石をめぐらせる古墳は、兵庫県北部の6世紀末～7世紀中頃までの古墳に多くみられる。兵庫県八日町箕谷3号墳<sup>(注16)</sup>、夕垣8・9号墳<sup>(注17)</sup>、養父町三月野9号墳<sup>(注18)</sup>などは、二重、三重に列石をめぐらせているが、いずれも円墳であり、現状ではこれらとの直接的な系譜関係を考えることは困難である。

(c)京都府北部では、列石を伴う7世紀の方墳は、竹野郡丹後町上野2号墳<sup>(注19)</sup>、福知山市下山1号墳<sup>(注20)</sup>、与謝郡岩滝町千原古墳<sup>(注21)</sup>に類例がある。このうち、築造時期の明確な上野2号墳は、出土土器から7世紀前半と考えられており、終末期の墓制として位置づけられる。墳丘の特徴は、山尾古墳と同様、二段築成の方墳に復原されており、列石は積み石を基本とする基壇状の形態をなす。こうした墳墓が、山尾古墳に先行して丹後地域に導入されている点は注目される。

山尾古墳の墳丘形態の最も大きな特徴は、前庭部の二段にわたるテラス状遺構であろう。近似するものは、岡山県大谷1号墳<sup>(注22)</sup>、奈良県段ノ塚古墳(舒明天皇陵)<sup>(注23)</sup>、鳥取県梶山古墳<sup>(注24)</sup>、兵庫県中山荘園古墳<sup>(注25)</sup>、群馬県三津屋古墳<sup>(注26)</sup>の例をあげることができる。方墳の大谷1号墳は、テラス部の側辺



第12図 テラスを有する7世紀の古墳  
 1.段ノ塚古墳(舒明陵) 2.梶山古墳 3.大谷1号墳 4.中山荘園古墳

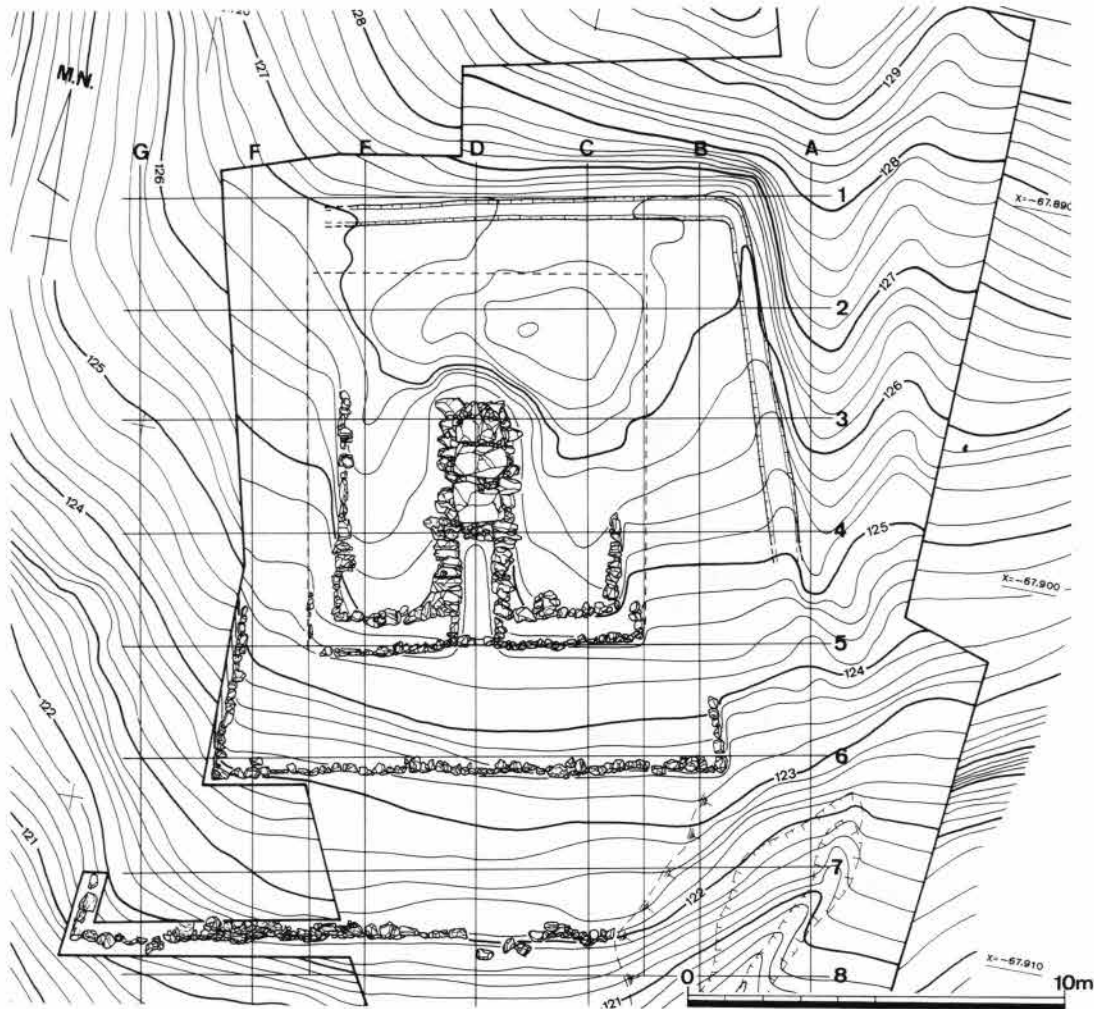
が「コ」の字状を呈する点でも類似している。また、八角形墳の他の4例は、いずれも墳丘前庭部を張り出す形で「コ」の字状のテラスを敷設している。墳形は異なるが、ほぼ同時期のものであり、テラス部の存在は終末期古墳に特有の墳丘形態の一つとして機能を考えていく必要がある。こうした類例をみれば、山尾古墳の墳丘形態は、在地的な築造規格の枠組みを越えて展開していることは明らかで、被葬者の性格を考えるうえで重要である。

(野島 永・野々口陽子)

②築造規格 山尾古墳の築造規格については、二とおりの考え方を以下に示すことにする。

(a)山尾古墳は、ある一定の尺を用いて設計され、築造されたことは図面を見ても明らかである(第13図)。この項では方墳の段築や、前面にある二重の列石、及び古墳後方と東斜面をカットした状況などをもとに、築造規格について考える。

今回は、1尺単位では考えず、大きな単位で考えたい。それは、急斜面に施工された古墳であるため、設計値とはやや相違している可能性があることによる。さて、古墳築造規格を復原する際に注目したのは以下のラインである。①墳丘の第一段(下段)の南辺は約9m(南西隅の石なし)、②同第二段(古墳中軸線)から第一列石(テラス下段)から8.8mである。すなわち、およそ8.8m～9mが基準であったことがわかる。今、仮に2分した4.5mで方眼を作り、古墳の平面図に当て



第13図 築造規格(1) S=1/200

てみると第13図のようになる。南北軸をアルファベット、東西軸を数字で表示する。これによると、墳丘の第二段はほぼ第4ラインに、第二列石(テラス上段)は第5ライン、第一列石(テラス下段)は第6ラインに合致する。また、墳丘第一段の西端はEライン、同東端はCラインに合致する。Dラインは石室の中軸線とほぼ合致する。以上の説明で、山尾古墳の築造規格は4.5m、もしくはこれを倍数とする数値で施工された可能性が高いことが理解できよう。

今一度、4.5m方眼と古墳との関係を説明する。墳丘の第一段(下段)は、東西2方眼、南北2.2m方眼(断面図による)、第二段(上段)は東西1.69m方眼である。第一段の両端から石室奥壁の中央まで線を引くと、第二段の両端はそれぞれこの線上にのる。墳丘の前面に施された二重の列石は、第一列石は第6ライン、第二列石は第5ラインに合う。また、長さは第一列石は推定5方眼である。墳丘の東方に斜面を削った場所があり、そこには溝が作られている。この溝は、推定5ラインとBラインの交点から1~2ラインの中央まで斜めに設定されている。さらに、墳丘の後方に溝は続くが、これは2ラインから北3分の1方眼のところ設定されている。また、さらに後方には斜面を意図的に削ったところがあるが、これはほぼ1ラインに合致する。すなわち、山尾古墳の墓域は東西、南北とも5方眼(22.5m)を念頭において設定されたことが指摘できる。

(伊野近富)



第14図 築造規格(2) S=1/200

(b)ここに示す築造規格は、唐大尺(約29.7cm)の10尺を1方眼(約2.97m)として墳丘を割り付けたものである(第14図)。奥壁基底石の中心点にあたる縦軸Dと横軸2との交点が築造規格の中心となっている。

まず、南北の規格については、方墳部分の基底にあたる第三列石から墳丘背後の排水溝までの距離は約12mを測り、唐大尺の約40尺(≒40.4尺)となる。奥壁基底石は、そのほぼ中央にあり、第三列石から北に約6m、唐大尺約20尺の横軸3のライン上に位置する。方墳部分の南北長については、地山の傾斜変換点での暫定的計測値として約9.7~9.9mの数値を示しており、約33尺前後となり、唐大尺の10尺方眼上には合致しない。北辺は石列がめぐらず、ラインは不明瞭であることから、築造規格上、重視されていなかったとみられる。こうした点から考えると、南北の規格では、石室奥壁の立面のラインが設計上の中心となっており、南側は方墳部分一段目(第三列石)のラインまで、北側は墓域北側を決定する基準となる排水溝のラインまで、南北それぞれほぼ20尺を測るところに規格上の基準点があったと考えられる。

次に、東西方向の規格は、石室中軸のDラインからそれぞれ15尺(約4.5m)のところ、方墳部分一段目の両側辺のラインがほぼ一致している。方墳部分の東西幅約9.0mは、唐大尺の約30尺に相当する。

テラス状遺構については、その主軸は方墳部分の主軸とはほぼ一致する。両者は同じ中央基準線を用いているが、テラス状遺構は、(1)案と同様、石室玄門部にあたる墳丘二段目(第四列石)の東西ラインを基準としている。ここからテラス上段(第三列石)まで4.5m、さらにテラス下段(第四列石)まで4.5mとして設計したとし、それぞれ唐大尺の15尺となっている。

以上のように、山尾古墳の築造規格は、方墳部分については奥壁基底石を中心とし、テラス部は第三列石の玄門部ラインを起点として、唐大尺で割り付けられたと考えられる。

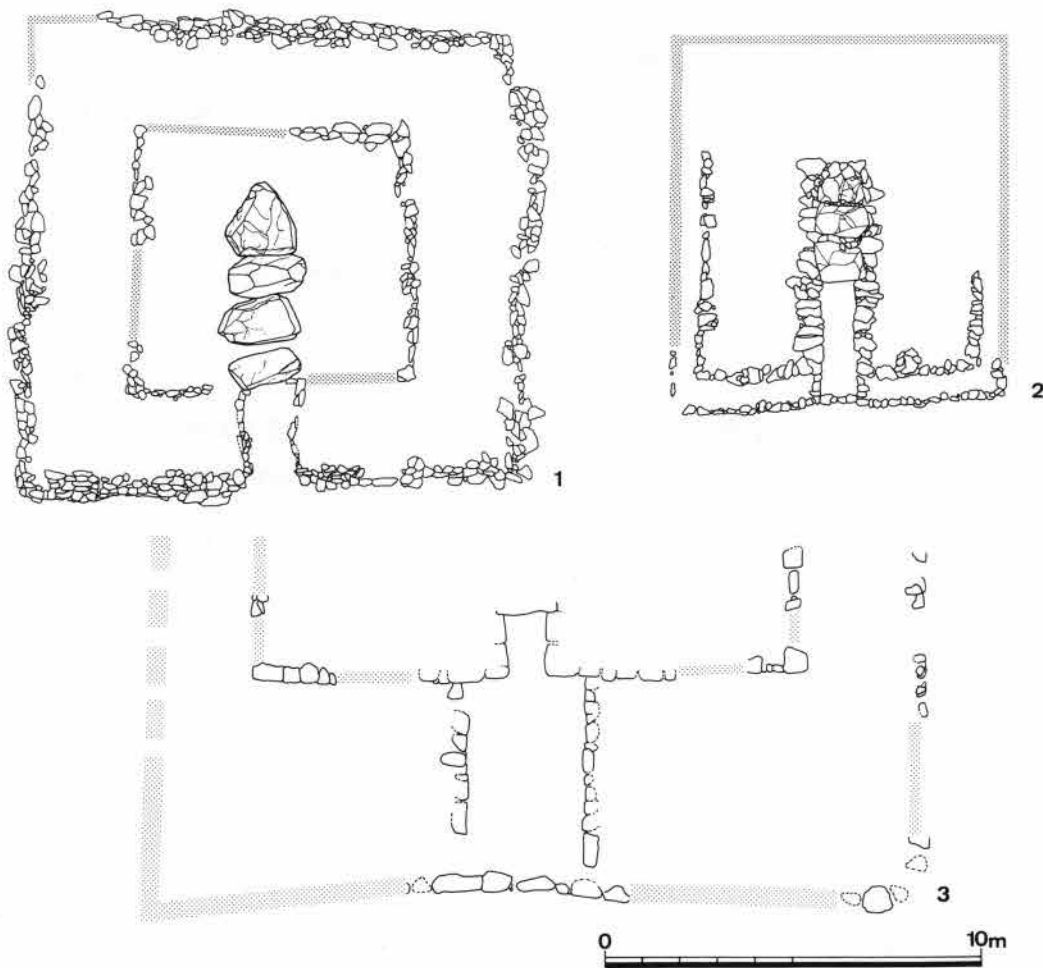
(野々口陽子)

③前庭部及び外護列石の変遷 近年、岡山県上房郡北房町定北古墳や大谷1号墳など、墳丘を二段以上に段築し、外護列石を多重にめぐらせる終末期方墳の類例が岡山県下で増加している<sup>(注27)</sup>。山尾古墳の形態的な特徴を把握するために、岡山県倉敷市二子14号墳と定北古墳について、その前庭部の形態を比較してみたい。

二子14号墳は岡山県倉敷市、足守川右岸の日差山塊の南端丘陵斜面に位置する。墳丘は二段築成で、各段に外護列石がめぐる。石室は無袖で、大型の石材で構成される。前庭部は、羨道部の終わる開口部分基底面から一段目の外護列石が前面に立て並べられる。また、玄門部の天井石前面を起点に二段目の外護列石が方形にめぐる。このため、羨道部には天井石を架けず、羨道部壁体は外部に露出したままとなる(第15図1)。この石室と列石の接続関係は、基本的には山尾古墳と類似するが、山尾古墳では羨道部が非常に短く、形骸化している。このため、羨道部の終わる開口部分に取り付く墳丘一段目の外護列石と玄門部(天井石は遺存せず)に取り付く二段目の外護列石の間隔が非常に狭くなっている。また、一段目列石が羨道部前面を画するように立て並べられ、本来、羨道部として機能した部分がすでに前庭部に変化している点が異なる<sup>(注29)</sup>(第15図2)。

定北古墳の場合、玄室と羨道部はともに天井石を架けており、かつ石室内出土土器が二子14号墳や山尾古墳のものより古い様相を示していることから、前二者よりも古い時期に築造された可能性がある。一段目の外護列石は前面で前庭部南辺を画している。盛り土をして成形した本来の墳丘裾には、二段目の列石を立て並べ、羨道の終わる開口部分に接続する。このため、前庭部には、新たに側辺に列石を設置しており、これを天井石を架けない羨道部壁体が形骸化した最終段階のものとも見ることもできる。

以上の比較から、6世紀後葉から出現する外護列石を有する中小規模の方墳の変遷を考えると、二子14号墳のように天井石が架構されない羨道部の出現が新しい要素として指摘できる。この点は、尾上元規氏が指摘した終末期方墳の階段状段築構造への変化にも対応している<sup>(注30)</sup>。また、斜面地を利用して本来の墳丘よりも広い方形区画を列石によって造り出す指向がある。定北古墳のように、羨道開口部から続く石列の下段に、一周より大きく列石によって方形に区画されるものや、山尾古墳のようにテラス状遺構を設け、墳丘前面に「コ」字状列石を配するものが出現する。現状の類例からは、前者が7世紀前半に見られるのに対して、後者はそれより後出すると思える。これらの点から、外護列石を持った終末期方墳の類例を模式化すれば、第16図のようになろう。



第15図 羨門部の形態  
1. 二子14号墳 2. 山尾古墳 3. 定北古墳

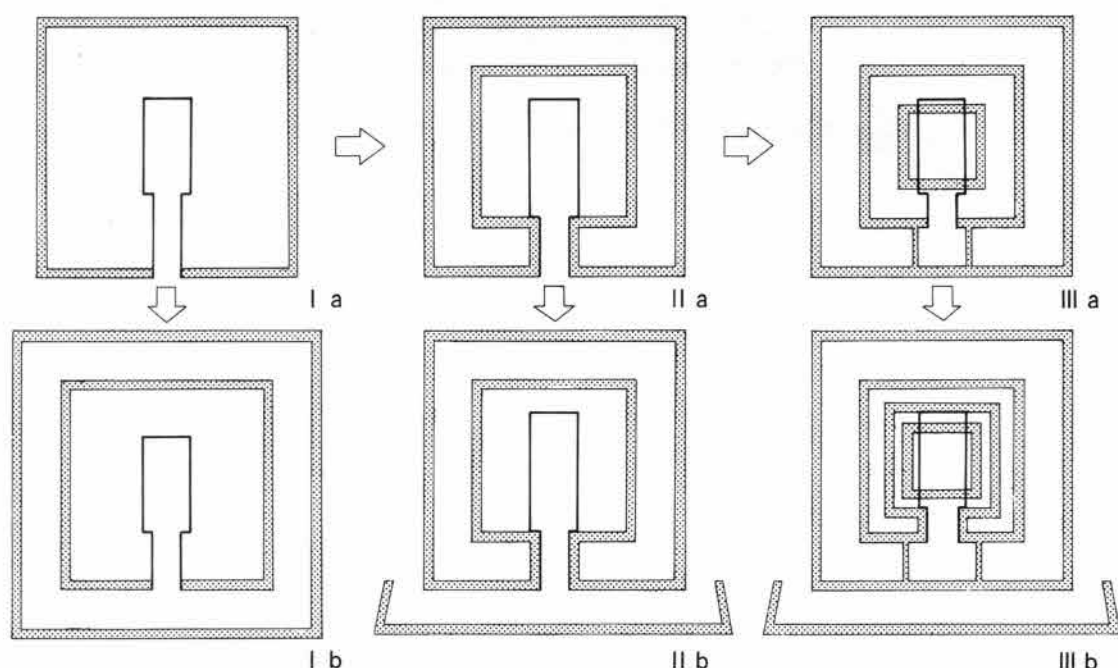
I類は、羨道部の開口部分から外護列石がめぐるものである。それより上には列石は認められず、階段状の段築構造は明瞭ではない。玄室、羨道部<sup>(注31)</sup>ともに天井石が架構される。I a類には、京都府福知山市下山1号墳<sup>(注32)</sup>(7世紀前半か?)や、同丹後町上野2号墳<sup>(注33)</sup>(7世紀前半)がその候補となる。周囲をさらに列石で囲うI b類には、明確な類例は見られないが、奈良県御所市南郷ハカナベ古墳<sup>(注34)</sup>(7世紀前半)や、羨道部の遺存状態が悪く、特定は困難であるが、大阪府南河内郡神山丑神5号墳<sup>(注35)</sup>(6世紀末葉)がその候補としてあげられよう。

II類は、羨道部の開口部分と、天井石前面の玄門部付近から、それぞれ外護列石が接続するものである。羨道部分には天井石が架けられず、階段状の段築構造が認められる。

前面に「コ」字状の列石を配するものを分離してII b類とする。II a類には先述した岡山県倉敷市二子14号墳(7世紀中葉)があり、II b類には、京都府綾部市の山尾古墳があげられる。

最後にIII類であるが、羨道部の開口部分に接続する列石の上下にも列石がめぐり、外護列石が多重化するものである。階段状段築構造も明確に認められるようになる。II類同様、前面に「コ」字状の列石を配するものをIII b類とする。III a類に岡山県北房町定北古墳(7世紀中葉)、III b類に同大谷1号墳<sup>(注36)</sup>(7世紀後葉)があげられる。

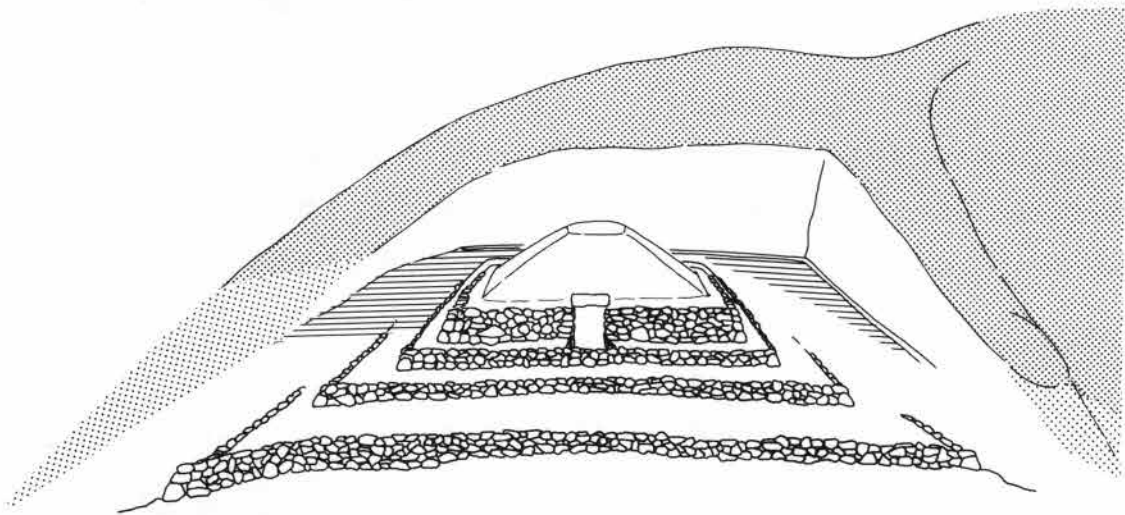
これらの点から、山尾古墳の墳丘形態の特徴として、天井部がなく、露出する羨道部が形骸化している点で、二子14号墳よりも後出し、墳丘平坦面に礫敷を施さない点から、大谷1号墳や奈良市石のカタ古墳<sup>(注37)</sup>より古い様相を示すといつてよいであろう。また、第三列石(墳丘第一外護列石)の前面幅がほぼ9mに復原され、唐大尺30尺に相当すると思われることや、第二列石の前面幅が13.8mになり、7世紀中葉の二子14号墳や愛媛県塩塚古墳<sup>(注38)</sup>、7世紀末葉の石のカタ古墳<sup>(注39)</sup>の墳丘前面幅に近い値であることも、7世紀後半の築造を推定することと矛盾しない。



6. おわりに

今回の調査では、山尾古墳は、都合、四段にもなる列石をめぐる終末期方墳の類例として確認された。その結果、墳丘前面にめぐらされた二段の外護列石をもち、墳丘前面にも石垣状の二段の列石で区画されたテラス状遺構を伴う特異な構造を知ることができた。また、築造時期は7世紀後葉を前後する頃と推定した。山尾古墳の所在する京都府綾部市とは、地域的に隔絶した岡山県上房郡の終末期方墳などに類する形態であることも判明し、在地的な範疇に入る墳墓形態とは思われないことから、被葬者として中央氏族との関連を持つ人物を考えたい。岡山県北房町では7世紀に建立された英賀<sup>(註40)</sup>廢寺が定北古墳や大谷1号墳などごく近くにあることも見過ごすことはできない。7世紀後半には、綾部市域でも、綾中<sup>(註41)</sup>廢寺が建立されはじめ、この古墳の被葬者像としては寺院の建立に関わった渡来系の人々を統括する官人層と推測している。しかし、在地的な石室構造など、検討すべき点があり、今後、評価の変更が行われることもあろうが、本概報をもって調査の一報としたい。

(野島 永・野々口陽子)



第17図 山尾古墳復原想定図

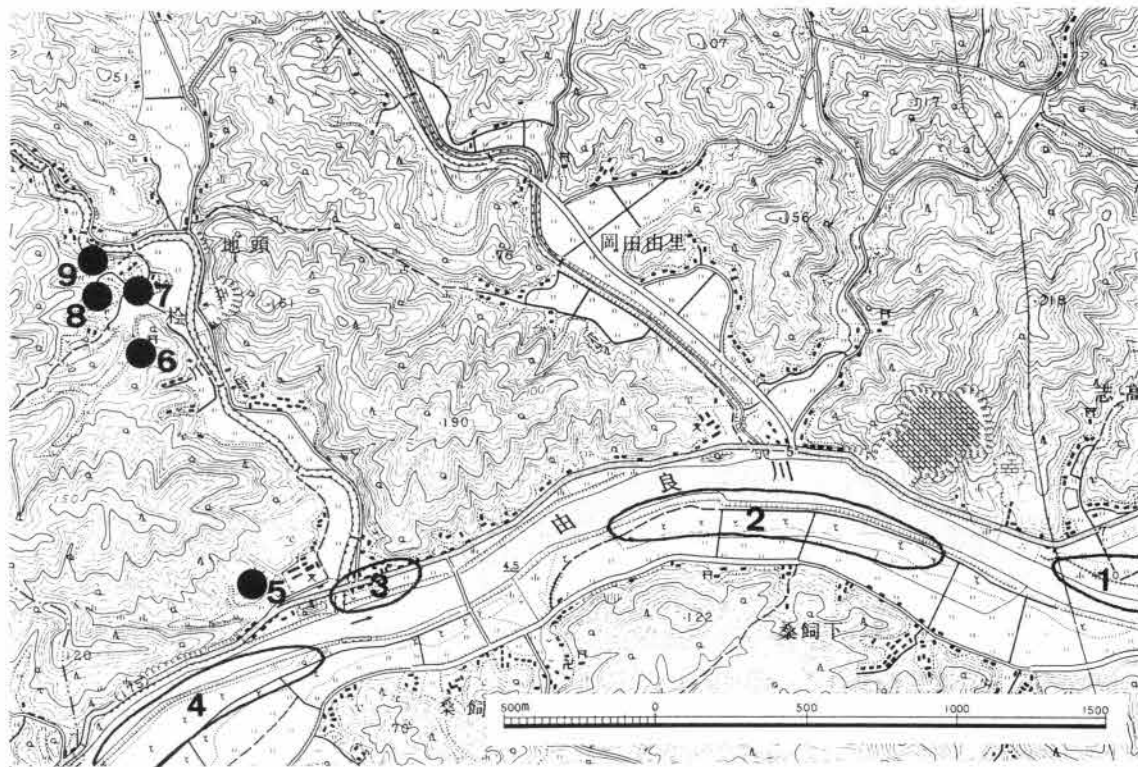
## (2) 地頭・大俣地区遺跡

### 1. 位置と環境

舞鶴市は、京都府北部にあって、若狭湾から湾入する舞鶴湾に面する都市である。近年、大陸との貿易拡大の商港・貿易港として発展している。大俣城跡やその他の遺跡が所在する地頭・大俣地区は、舞鶴市の西端に位置し、大江町に近接する。

舞鶴市の西側には、日本海に注ぐ由良川が北流する。由良川は、谷底平野が狭く、下流部は穿入蛇行する。また、緩勾配のため水位の上昇による洪水を招く。自然堤防も発達し、古代から居住地として利用されてきた。この由良川の支流の一つである桧川が調査地の東側を流れる。調査地近辺で大きく蛇行し、由良川と合流する。全長約10kmを測る。谷の傾斜もゆるやかで古くからの集落が点在する。

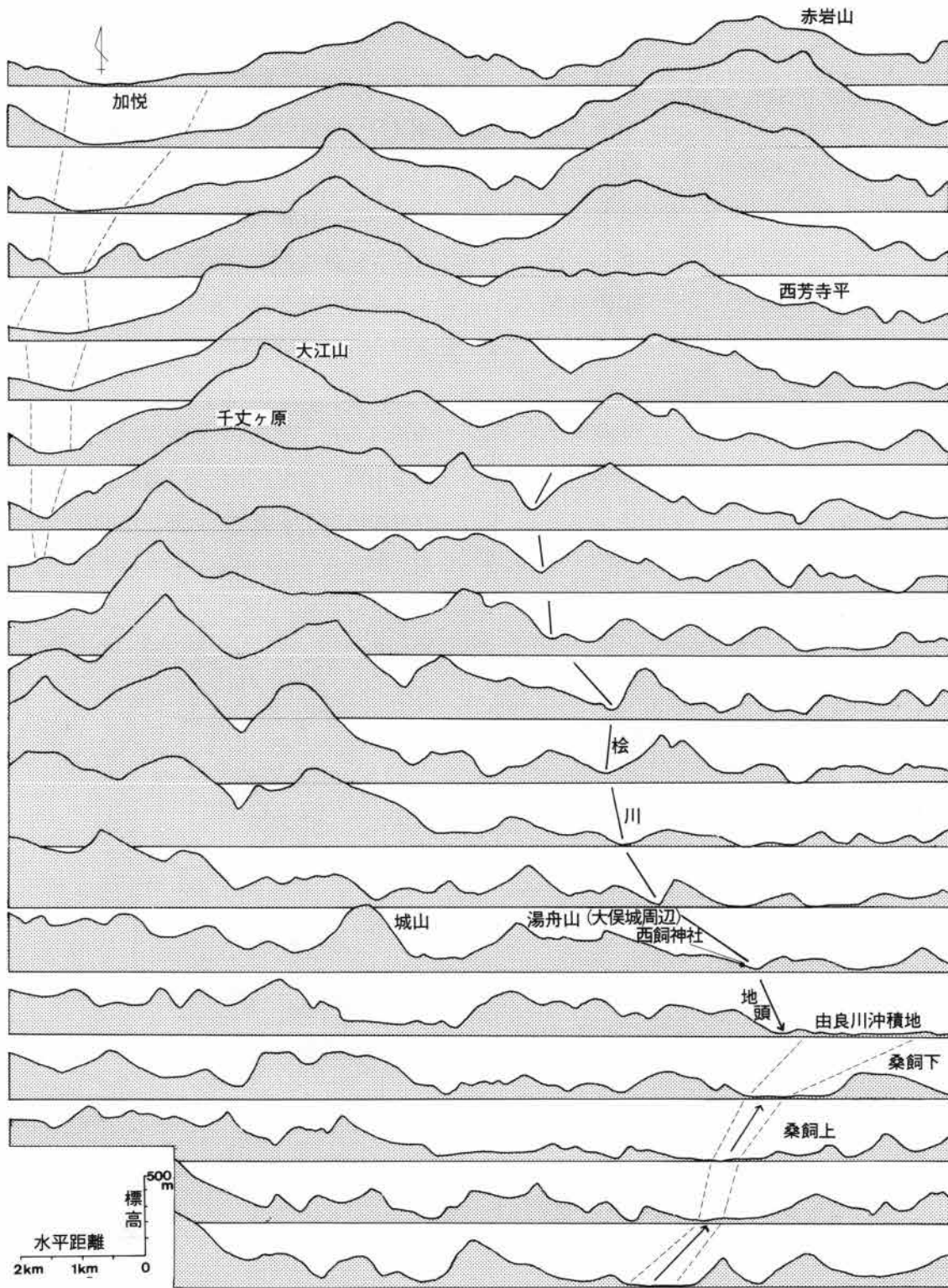
調査地周辺を鳥瞰するために、投影横断面図(第19図)を作成した。北方から南西にかけて大江山連峰が走る。その南方に丘陵性山地が由良川兩岸に広がる。特に、由良川左岸は幅約5kmの規模で、丹波層群が福知山市まで広がる。さらに、大江山連峰の西側と東側では対照的な山容である。前者が比較的なだらかに傾斜するのに対し、後者は起伏が大きくいくつかの谷を形成し、全



第18図 調査地位置図

- |           |          |         |                |         |
|-----------|----------|---------|----------------|---------|
| 1. 志高遺跡   | 2. 桑飼下遺跡 | 3. 地頭遺跡 | 4. 桑飼上遺跡       | 5. 山根古墳 |
| 6. 西飼神社遺跡 | 7. 龍尾寺跡  | 8. 洞中古墳 | 9. 大俣城跡B・C・D地区 |         |





第19図 投影横断面図

体的に由良川に向かって傾斜をゆるやかにする。調査地は、湯舟山の東側の100m未満の丘陵性山地の腹部・先端部に位置する。

(尾崎昌之)

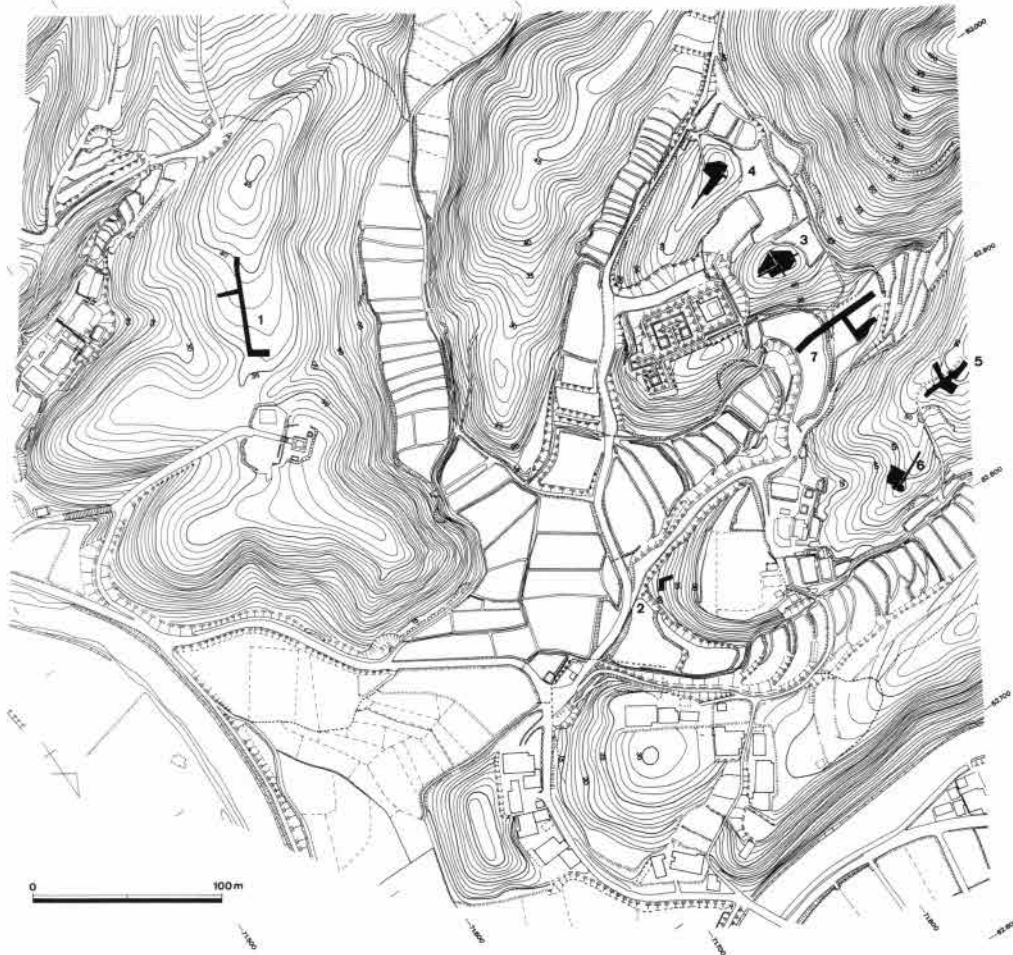
## 2. 調査経過

西飼神社遺跡は、舞鶴市大字地頭小字中迫に所在する。調査は、平成6年4月18日から開始した。顕著な遺構・遺物はなく、5月27日に終了した。調査面積は約170m<sup>2</sup>である。

龍尾寺跡は、舞鶴市大字大俣小字別庄に所在する。調査は5月9日から開始した。顕著な遺構・遺物はなく、5月12日に終了した。調査面積は約30m<sup>2</sup>である。

洞中古墳群は、舞鶴市大字大俣小字矢削に所在する。調査開始は4月20日である。その結果、古墳と想定されていた部分は古墳ではないことが判明した。古墳状隆起部分からは近世墓群を検出した。6月16日に調査を終了した。調査面積は約293m<sup>2</sup>である。

大俣城跡は、舞鶴市大字大俣に所在する。調査開始は4月18日である。調査は、まずB・C・



第20図 調査トレンチ配置図

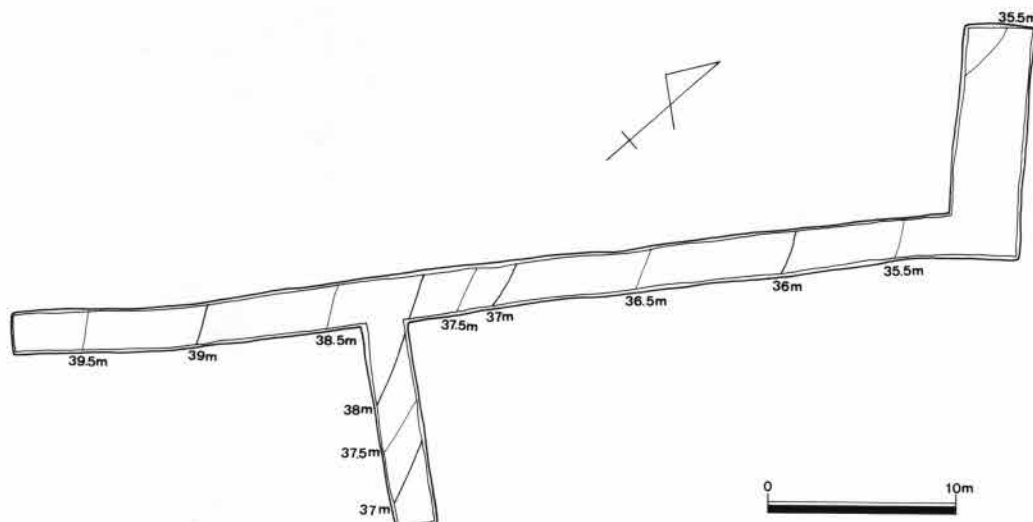
- |            |            |            |          |
|------------|------------|------------|----------|
| 1. 西飼神社遺跡  | 2. 龍尾寺跡    | 3. 洞中古墳    | 4. 洞中近世墓 |
| 5. 大俣城跡B地区 | 6. 大俣城跡C地区 | 7. 大俣城跡D地区 |          |

D地区から実施した。堀切状遺構や近世墓群を検出したが、大俣城跡に確実に関連する遺構・遺物は確認できなかった。これらの地区の調査を7月上旬までに終え、以後A地区の調査に着手した。A地区は、残存状況が良好な山城跡である。平成6年度の調査は平成7年1月27日に終了した。調査面積は約2,600㎡である。なお、A地区の調査は、次年度にも継続して実施する予定であり、その調査内容は、終了後にまとめて報告する。(引原茂治)

### 3. 西飼神社遺跡

西飼神社遺跡は、谷部に向かって張り出した丘陵尾根筋に当たっている。この丘陵先端部に西飼神社及び御壺神社と称される小祠堂がある。西飼(旧称二ノ宮)神社は、二ノ宮経塚の発見という歴史的経過をもつ神社である。一説によると、江戸時代中期の明和3(1766)年に、その社殿裏の崖面から経塚が偶然発見され、北西方向に谷を一つ隔てた龍尾寺にしばらく納められた後、再び当神社に小祠堂(御壺神社)を建てて埋納したという。二ノ宮経塚の地点は現在まで不明であるが、御壺神社(小祠堂)に納められている埋納物については、昭和52年5月19日に京都府立丹後郷土資料館が調査を実施し、瓦製・土師製の外容器(鎌倉時代)と中の銅鑄製筒(破片)と蓋及び若干の経巻の存在を明らかにしている。<sup>(註42)</sup>

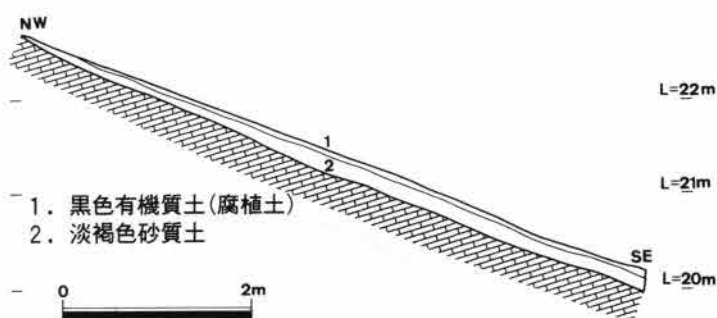
今回の調査では、西飼神社の背後にのびる広い尾根筋に並行して、幅2m・長さ約50mのトレンチを入れた。さらに、中間部で比較的なだらかなところには、尾根に直交するトレンチ(幅2m)を南方向にのぼした。西飼神社に近いトレンチ東端部では幅5mにまで広げ、全体に鍵形の調査トレンチとなった。掘削は重機を用いたが、基本的に表土(黒色有機質土)のみを除去していった。厚さ約10cmの表土直下は黄褐色粘質砂土の地山面となった。人力による精査に入ったが、遺構はもとより1点の遺物も検出することができなかった。この尾根筋上に古墳・古墓などの遺構があるとすれば、さらに北西山側の尾根平坦部(調査地外)に求められよう。また、経塚については、過去の記録にあるように、社殿のごく近い地点にあったと思われる。(黒坪一樹)



第21図 西飼神社遺跡トレンチ図

#### 4. 龍尾寺跡

調査地は、丘陵先端部北西側の緩斜面地に位置している。標高30～40mを測る丘陵上は平坦面で、民家と畑地に利用されている。この地は龍尾寺という寺院が存在したという伝承があり、丘陵平坦面の縁辺部にはわずかながら土塁のような高まり



第22図 龍尾寺跡トレンチ平・断面図

が観察される。しかし、その詳細については不明である。今回の調査は、龍尾寺跡に関する遺構・遺物の検出を目的として実施した。

先述したように、調査地は丘陵斜面で、裾部からは高さが4～5mの急崖を形成している。緩斜面地で、まとまった平坦面はない。このわずかな緩斜面地に「L」字形のトレンチを設定した。面積は約30m<sup>2</sup>である。掘削の結果、表土を約5～20cm除去すると、赤褐色の岩盤が露出し、遺構・遺物は検出されなかった。

調査の結果、龍尾寺跡に関する資料は得られなかった。龍尾寺跡に関する遺構が存在するとなれば、調査地背後の現在畑地となっている平坦面に想定すべきであろう。

(尾崎昌之)

#### 5. 洞中古墳群

##### ①洞中古墳

この古墳は、『舞鶴市遺跡地図』に径約25m・高さ3mの円墳と記載されている。丘陵性山地先端部の前後をカットした小高い丘上に位置する。

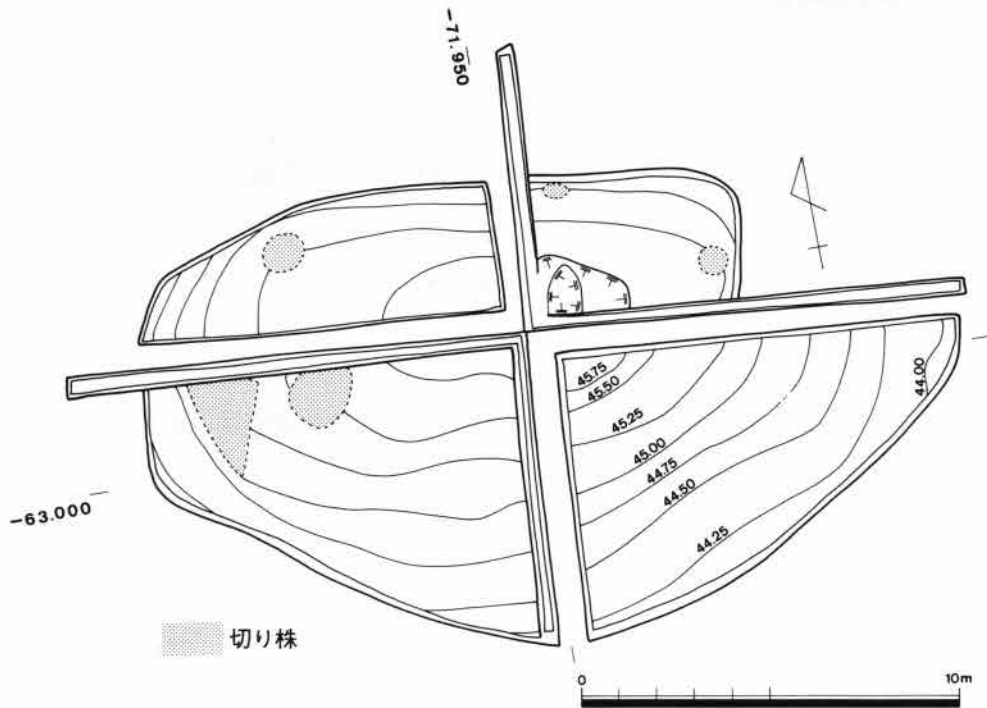
表土掘削を行ったところ、地表下約20cmで地山(赤褐色礫混じり粘質土)を検出した。精査をした結果、主体部や周溝などの痕跡は確認できなかった。出土遺物もなく、古墳ではないものと考えられる。

##### ②洞中近世墓

はじめに 丘陵性山地の先端部付近をカットした台地上に位置する。調査前に宝暦・寛政銘の墓石が放置されていたため、近世墓の可能性が考えられた。調査の結果、9基の近世墓を検出した。なお、調査地の基本層序は、腐植土の下が黄褐色礫混じり粘質土の地山となる。以下、調査概要を記す。

**検出遺構** SK01は、調査地の北端で検出された。一辺約1m・深さ約95cm前後を測る方形土坑である。底部から、棺材片、釘などを検出した。棺の種類を確認できる痕跡などはみられなかった。

SK02は、調査地の西端で検出した。平面形は方形で、一辺約1.1～1.2mとやや不整形になっ



第23図 洞中古墳平面図

ている。深さは約1.1mを測る。底部から箱形に組んだ座棺の痕跡を確認した。その大きさは長辺約70cm・短辺約60cmである。底部から棺材片などが出土した。

S K03は、2号墓の南隣りで検出した。平面形はやや長方形で、長辺約94cm・短辺約82cm・深さ約56cmを測る。底部から肥前系磁器椀や棺材辺などが出土した。

S K04は、調査地の中央部で検出した。平面形は一辺約60cmを測る方形である。出土遺物はなかった。

S K05は、調査地の最北端で検出した。長辺約96cm・短辺約74cm・深さ約46cmの長方形土坑である。比較的浅い土坑であるが抜根のため、深さは正確に検出できなかった。

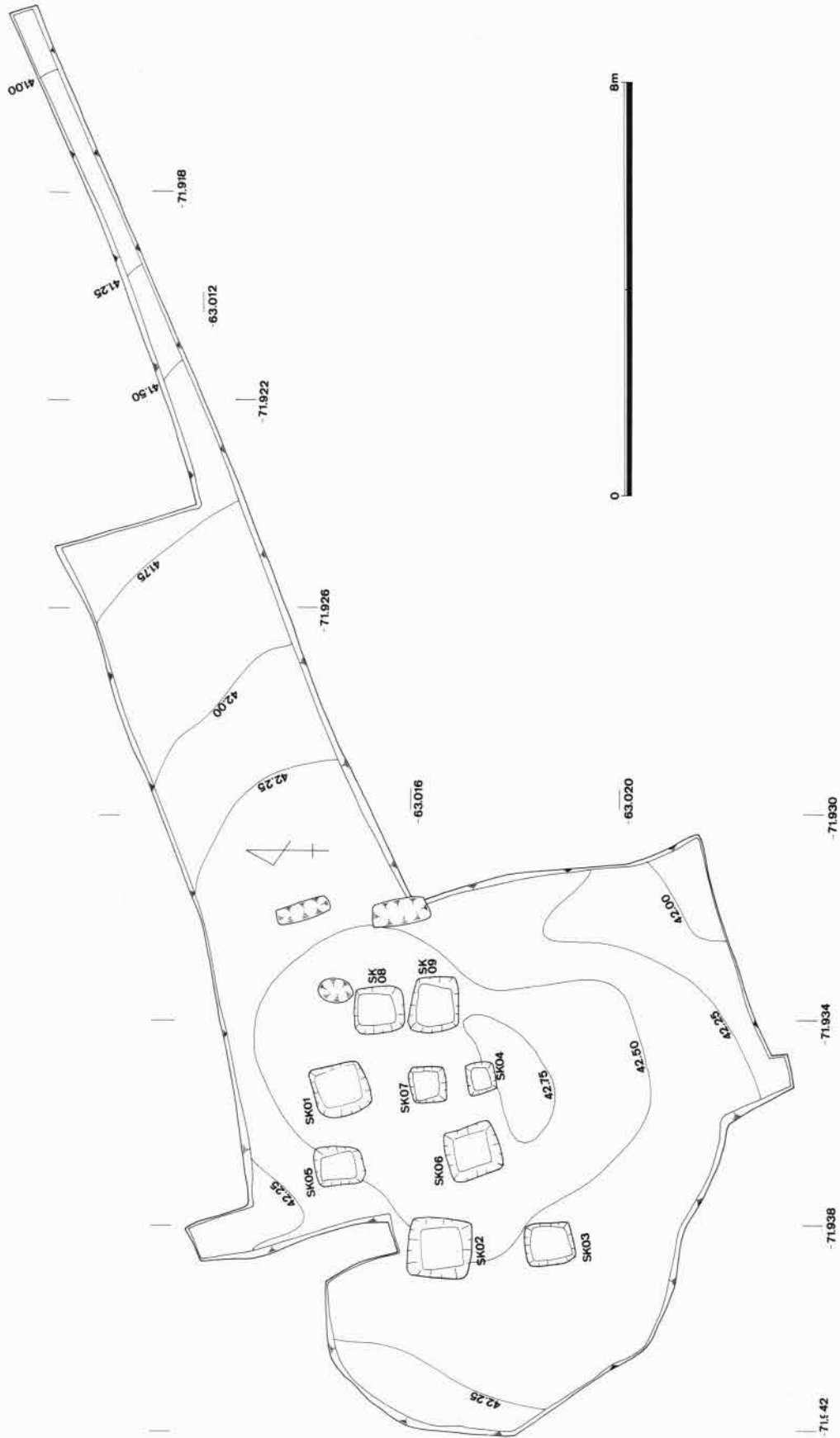
S K06は、調査地中央部で検出した。平面形は一辺約1m・深さ約1.34mの方形土坑である。底部に近くなるに従い、細くなっていく。検出した土坑の中で最も深い。底部から棺材片が出土した。検出面下約1mのところ箱形に組んだ座棺の痕跡を確認した。その大きさは一辺約34cmである。

S K07は、4号墓の北隣りで検出した。一辺約64cmの方形土坑である。

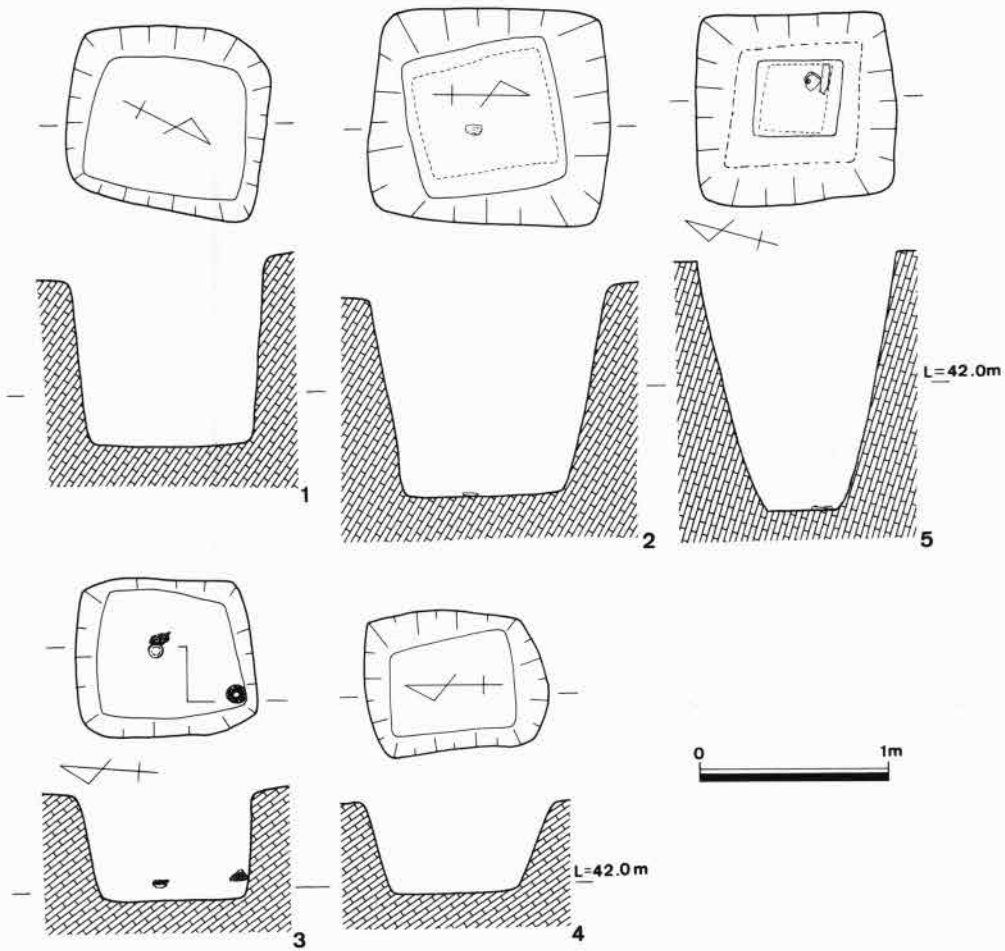
S K08は、調査地東端で検出した。長辺約96cm・短辺約88cmの方形土坑である。

S K09は、8号墓の南隣りで検出した。一辺約92～94cmの方形土坑である。

**出土遺物** 1～10は、土師器皿である。底部の磨耗が激しいが、糸切り痕がみとめられるものがある(体部が外反するもの(3・6・7・9)、やや直線的に外方に開くもの(1・2・5・10)、その中間的なもの(4・8)に大別できる。)。11は、18世紀前半頃と思われる肥前系染付磁器椀



第24図 洞中近世墓平面図

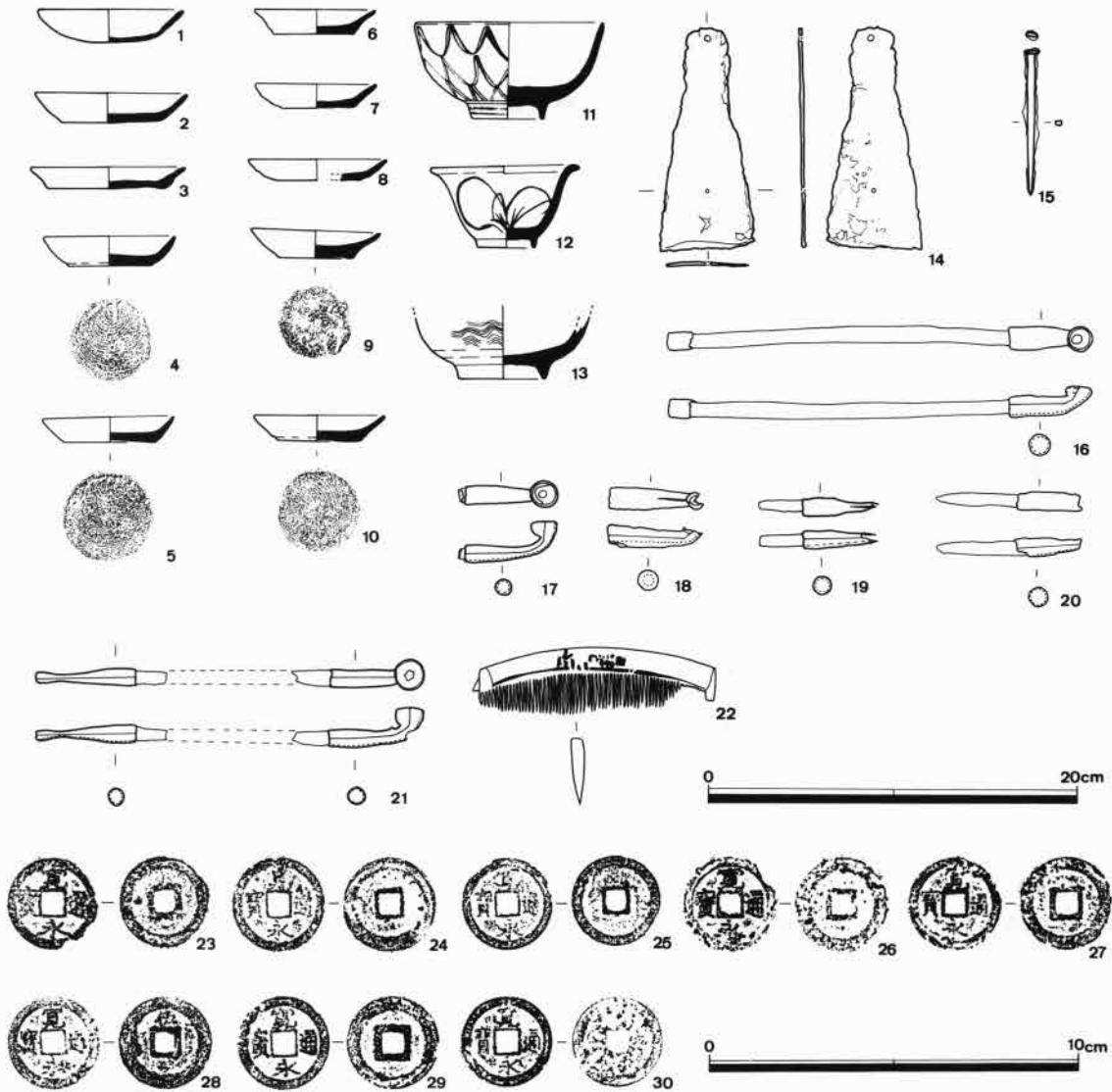


第25図 墓壇実測図

1. S K 01 2. S K 02 3. S K 03 4. S K 05 5. S K 06

付表1 洞中近世墓一覧表

番号	掘形の規模	棺の種類	棺の規模	出土遺物
S K 01	方形(1 m×1 m)	不明	不明	・六道銭6・土師皿2・つば1・隅金具1・キセル(完存)1(半分)1・銅板(大)1・銅板(小)1・布袋・棺材(厚さ1.2cm、長さ30cm、幅12cm)・金具類多数
S K 02	方形(1.1m×1.2m)	箱形座棺	0.70×0.60	・土師皿1・六道銭6・棺材(厚さ0.6cm、長さ6.5cm、幅4cm)・金具類多数
S K 03	方形(0.94m×0.82m)	不明	不明	・土師皿2・白磁1・六道銭3・キセル(頭部)1
S K 04	方形(0.5m×0.6m)	不明	不明	なし
S K 05	方形(0.96m×0.74m)	箱形座棺	0.5×0.4	・六道銭6・白磁1・櫛2・土師皿1
S K 06	方形(1 m×深さ1.38m)	箱形座棺	方形(0.55m×0.55m) *底部から少なくとも約0.5mは棺高と思われる。	・六道銭2・土師皿1
S K 07	方形(0.8m×0.7m)	不明	不明	・六道銭6・棺材(厚さ1 cm、長さ12cm、幅11cm)
S K 08	方形(0.96m×0.88m)	箱形座棺	0.5×0.38	・土師皿2・キセル(部分)1
S K 09	方形(0.92m×0.94m)	不明	不明	・六道銭6・キセル(銅部欠損)1・棺材(厚さ1 cm、長さ11cm、幅6 cm)



第26図 洞中近世墓出土遺物実測図・拓影

1・2・14~16・18・23~25. S K01      3・26・27. S K02      4・5・11・17・28. S K03  
 6・12・22・29. S K05      7・8・30. S K06      9・10・19・20. S K08  
 21. S K09      13. 第Ⅱ層中(黄褐色礫土)

である。体部外面に二重網目文を施している。12は、肥前系染付磁器の小椀である。体部外面に草花文を施している。17世紀中～後半頃のものと思われる。13は、肥前系陶器(唐津)の椀である。体部外面に白土で波状のハケ目文を施す。17世紀後半頃のものと思われる。14は、テコ状の鉄製品である。長さ約12cm・最大幅約5cmを測る。基部先端に穿孔がみえる。用途は不明である。15は、棺材を接合する釘である。長さ約8cmを測る。16~21は、キセルである。いずれも脂返しとよばれる湾曲部が短いもので、火皿が逆台形を呈する。22は、櫛である。外面は朱漆が塗られ、中央部に黒漆で草花文を描いている。長さ約12.6cm・幅約8mmを測る。古銭は寛永通寶で、計54枚出土している。すべて一文銭である。

小結 洞中近世墓は、出土遺物から18世紀を中心とする墓群であることが判明した。このことは、先述した墓石の元号ともほぼ一致する結果となった。墓壙の配置・配列から次の4グループ



に区分することができる。SK02とSK03、SK05とSK06、SK01とSK04とSK07、SK08とSK09である。それらが、どのような関係かは出土遺物などの検討を行う必要がある。また、18世紀を中心にした墓制を考える上で新たな資料が追加されたといえよう。(尾崎昌之)

## 6. 大俣城跡

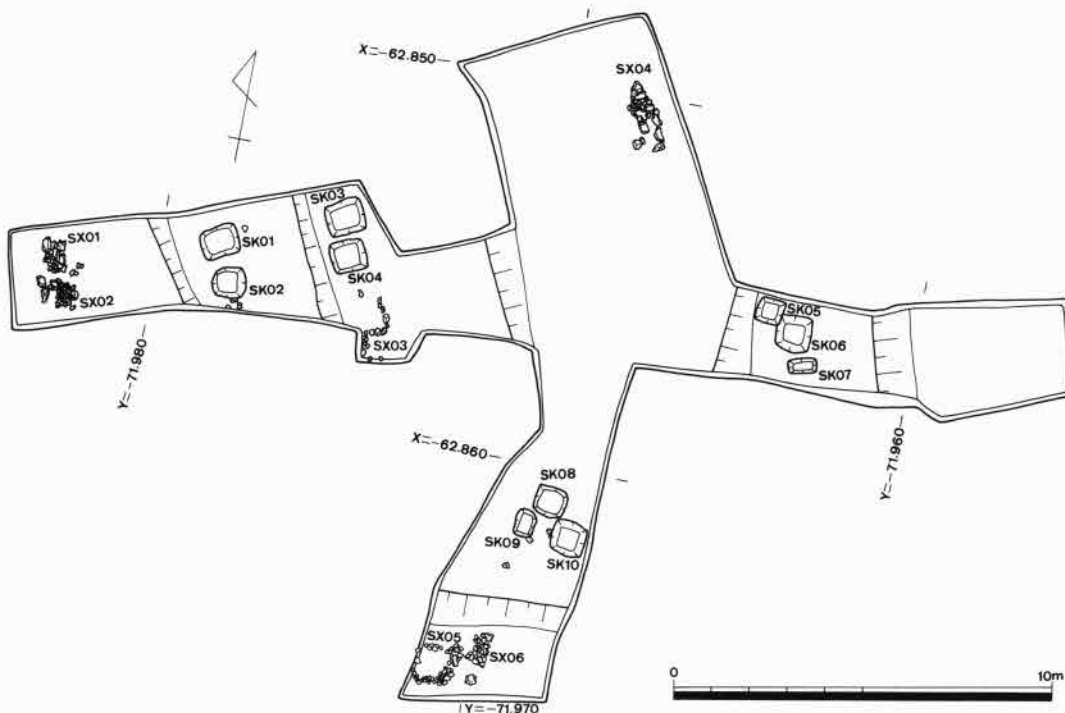
### ①B地区

はじめに 調査前に、丘陵尾根稜線に沿って段状地形を呈していることや、「天保」銘の墓石が放置されており、その周囲に染付の磁器碗が散乱していることなどから、墓地として利用されていたと考えられた。以下、調査概要を記す。

**検出遺構** 段状地形に沿ってトレンチを設定した。掘削後、表土下約5～15cmの地山面から10基の土壙墓を検出した。段状に造られた平地にまともって土壙墓が設けられている。土壙墓の掘形の平面形は、方形または長方形で、規模については付表2のとおりである。棺材と思われる木片が残存していた土壙墓は4基(SK02・04・05・06)であり、いずれも箱形に組んだ座棺の底部と考えられる。他の土壙墓内には棺材らしき木片は残存していなかったが、SK09の底部には方形状に青灰色に土色変化した跡がみられることから、同様の棺痕跡と思われる。また、SK08の底部に積まれた自然礫は、棺の蓋に重しとして載せられていたものが棺が腐蝕した後に落下したものと考えられる。なお、人骨については、どの土壙墓からも全く検出されなかった。

集石遺構01～06について付言すると、いずれも子供の拳大から人頭大の自然礫を意識的に配列または積み上げており、供養塔基礎などの墓に関連する施設と考えられる。

**出土遺物** 土師器皿・煙管・古銭などで、基数に比べて乏しかった。1・2は、土師器皿であ

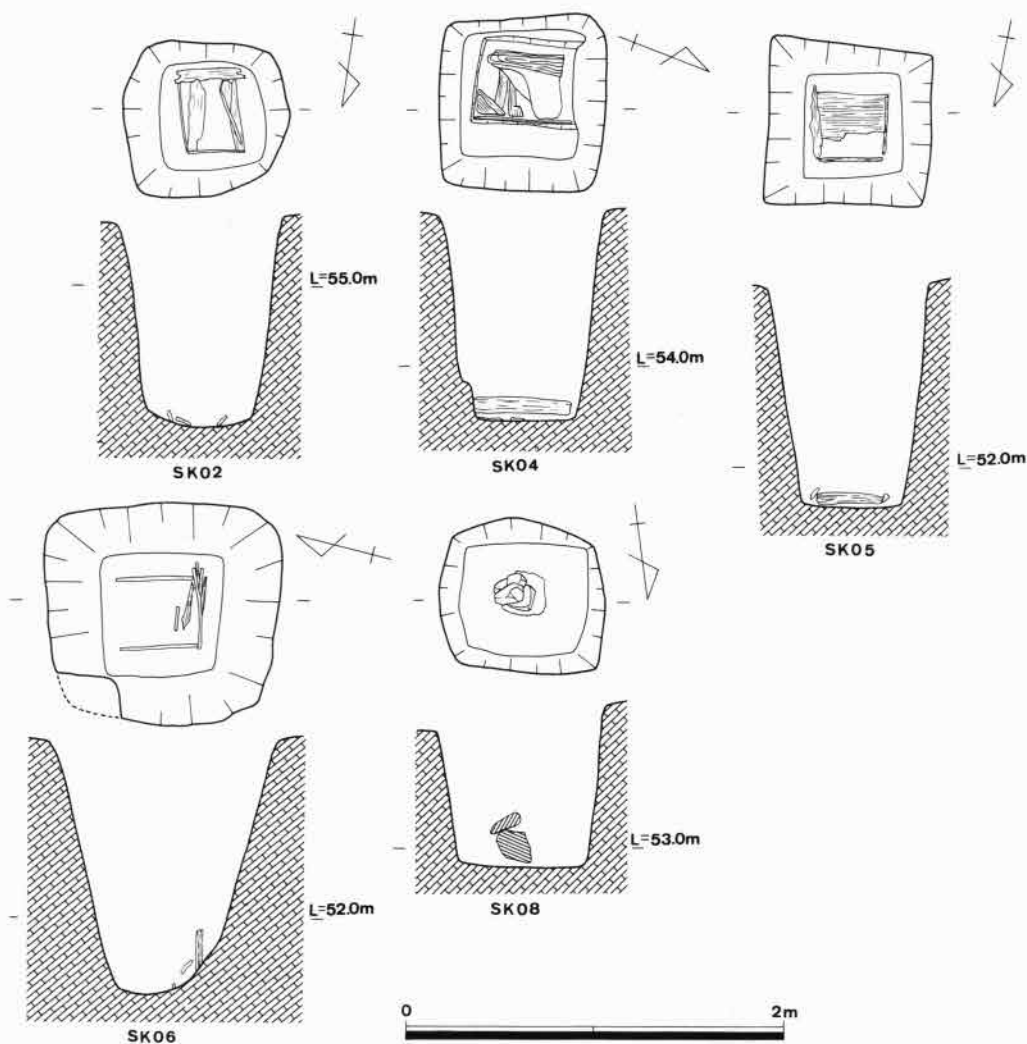


第27図 大俣城跡B地区遺構配置図

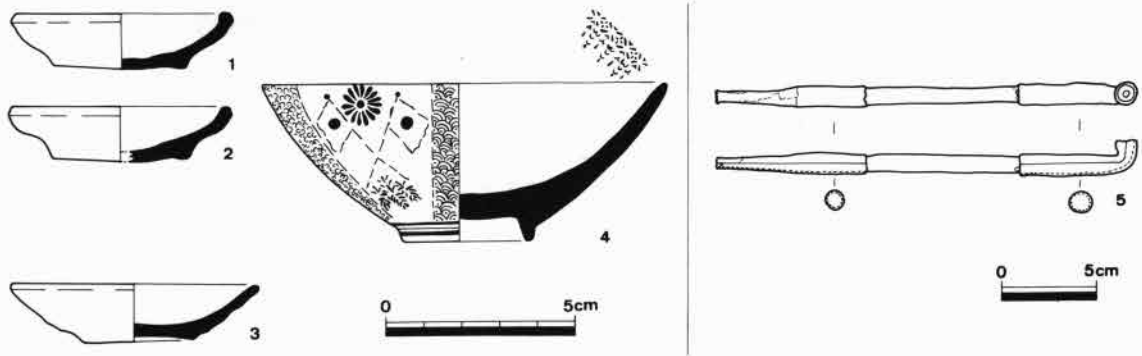
る。1は、口径5.6cm・底径3.5cm・器高1.4cmを測る。2は、口径5.7cm・底径3.6cm・器高1.4cmを測る。どちらも底部は糸切りで、口縁端部を肥厚させている。3は、内面に灰釉を施した陶器の皿である。口径6.4cm・底径2.9cm・器高1.5cmを測る。4は、染付磁器椀である。口径

付表2 城跡B地区墓壙一覧表

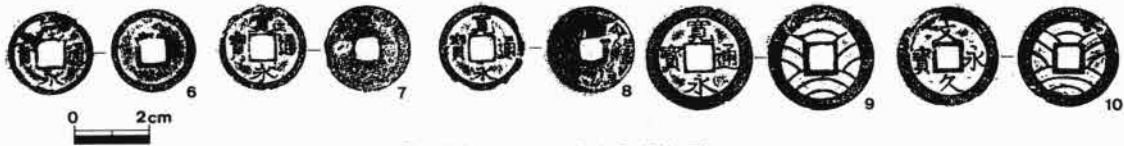
土壙墓番号	掘形形状	検出面 (m×m)	底(m×m)	深さ(m)	棺材及び棺痕跡 の有無	出土遺物
S K01	長方形	1.03×0.8	0.74×0.57	0.96	無	
S K02	方形	0.89×0.85	0.58×0.56	1.06	棺材底部有	布片
S K03	方形	1.04×0.91	0.74×0.56	1.00	無	煙管 2
S K04	方形	0.92×0.88	0.52×0.43	1.11	棺材底部有	煙管 1・布片
S K05	方形	0.88×0.84	0.55×0.53	1.18	棺材底部有	
S K06	方形	1.24×1.18	0.65×0.65	1.35	棺材底部有	
S K07	長方形	0.82×0.44	0.54×0.28	0.69	無	寛永通寶 4・文久 永寶 1・布片
S K08	方形	0.9×0.81	0.69×0.59	0.80	無	土師器皿 2・布 片・釘多数
S K09	長方形	0.77×0.53	0.56×0.34	0.61	棺痕跡のみ有	
S K10	方形	0.97×0.97	0.57×0.51	1.12	無	煙管 1



第28図 大俣城跡B地区墓壙実測図



第29図 大俣城跡B地区遺物実測図



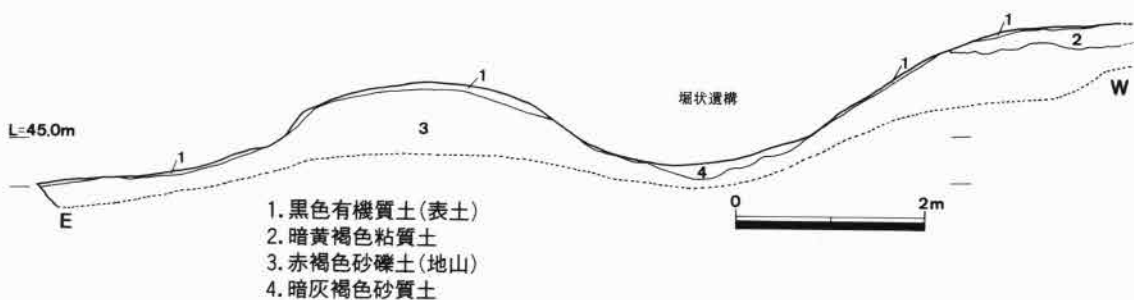
第30図 S K 07出土古銭拓影

10.7cm・器高4.2cmを測る。体部外面に日章旗や円弧状の文様を型紙摺で施す。3・4は、いずれも19世紀頃のものと考えられる。5は、煙管で胴部のみ竹製になっている。脂返しと呼ばれる湾曲部が短いもので、恐らく火皿が逆台形になっていたものと思われる。18～19世紀のものか。古銭は寛永通寶4枚、文久永寶1枚が出土している。6～8は一文銭、9・10は四文銭である。

小結 大俣城と関連する遺構の検出はみられなかったが、検出された土壌墓群は出土遺物や墓石から19世紀～20世紀初頭頃のものと考えられる。遺構配置から各段状地形には同じグループの人々が埋葬されていたと考えられる。集石遺構については墓と考えているが、墓制の一つである参り墓として使用されていたものとも想像できる。戦後、大俣城跡(A地区)の西方に墓地が見つかったため、B地区は使用されなくなった。

②C地区

B地区と同じ尾根筋稜線に直交する堀切状の落ち込みがあり、大俣城に関連する遺構と考えられていた。この落ち込みを中心に稜線に沿ってトレンチを設定し掘削を行ったところ、表土下に暗黄褐色粘質土層があり、次いで風化した赤褐色砂礫の地山面を確認した。しかし、落ち込みの傾斜が始まる辺りから暗黄褐色粘質土層は見られず、表土直下に傾斜した地山面が認められることから、ある時期に地山を削り込んで造られたと思われる。ただ、時期を特定する遺物がないことから、大俣城との関連については断定できない。

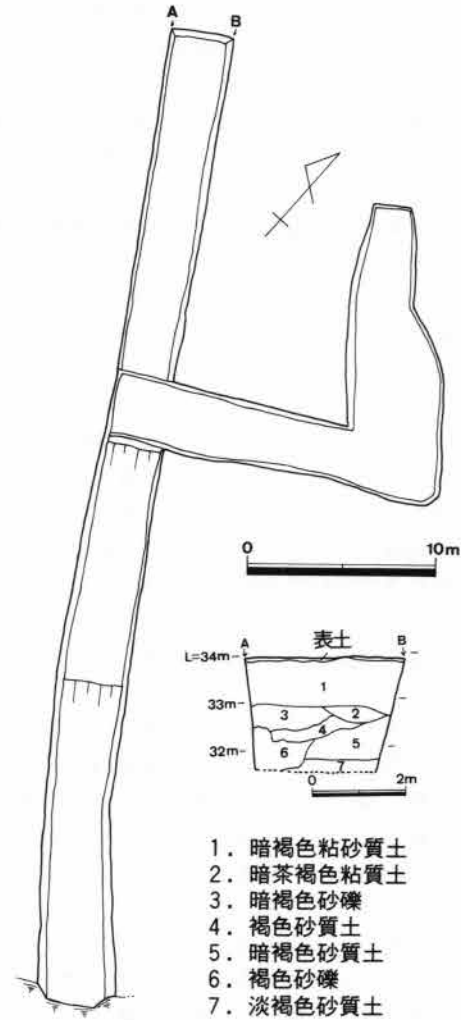


第31図 大俣城跡C地区土層断面図

③D地区

B・C地区の南側の谷部にあたり、居館などの存在が想定された。緩斜面の中でも特に平坦な場所に幅約4m・長さ約50mのトレンチを設定し重機掘削を行った。表土下には暗褐色砂質土の層が約1m堆積し、その下には褐色系の砂礫及び砂質土が厚く重なっていた。顕著な遺構及び遺物は見られず、トレンチを拡張した後も褐色砂礫土の広がり認められるのみであった。大俣城に関する遺構やその他の顕著な遺構はなかった。居館などの存在を求めるならば、大俣城東麓にある「館」またはそれに近接する「庄内屋敷」などの集落近辺が有力視される。

(大岩洋一)



第32図 大俣城跡D地区トレンチ平面図

1. 暗褐色粘砂質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. 暗褐色砂礫
4. 褐色砂質土
5. 暗褐色砂質土
6. 褐色砂礫
7. 淡褐色砂質土

注1 調査参加者は下記のとおりである。

澤田圭子、鎌田真喜子、野尻和真、細山田章子、小坂至道、日下部健二、高橋あかね、奥井 愛、大庭篤史、百瀬一志、重松泰成、中尾洋子、志賀春夫、志賀良重、志賀ナツ、大槻末子、辻村みね、河北ハズエ、松井嘉代、辻村ツタノ、坂根トシエ、梅原一枝、志賀マサエ、梅原マツノ、坂根勝巳、志賀すが子、坂根紀代子、坂本巳佐子、坂根茂弘、志賀和義、梅原幸江、坂根田鶴子、志賀千津子、坂根昭美、岡本美和子、松下道子、関口睦美、福井裕子、四方千佳子、塩尻陽子、足立英之、岩崎輝巳、今西市郎、今西みつ子、岩田寿美子、亀井 毅、迫田貴子、佐藤久美子、新宮ヒサノ、谷口成美、千原満里子、土井淑子、永井 治、長田いつ枝、長田京子、長田日出美、中村ひろみ、野田友子、野間安昭、野間 篤、真下恵美子、真下春美、松井義信、松下 修、水口和子、宮本利美、森下要子、吉岡 譲、吉岡勇治、小滝初代、中島恵美子、西村香代子、疋田季美枝、林 秀子、森川敦子、友井川十三代、梶間直美、有近敦子、中瀬かほり、田中ゆかり、大島紀子

山尾古墳の調査に際して、綾部市教育委員会、国府町教育委員会、但東町教育委員会、秋山浩三氏、入江文敏氏、尾上元規氏、崎山正人氏からご教示及びご協力を得た。記して深謝いたします。

注2 野島 永「京都縦貫自動車道関係遺跡平成5年度発掘調査概要 (4)ジンド古墳」(『京都府遺跡調査概報』第62冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注3 平成7年に、綾部市教育委員会によって緊急調査が行われた。

注4 中村孝行「聖塚・菖蒲塚試掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第11集 綾部市教育委員会) 1984

注5 鍋田 勇・石崎善久ほか「近畿自動車道敦賀線関係遺跡昭和63年度発掘調査概要 (1)私市円山古墳」(『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

注6 岩田 実「荒神塚発掘調査報告」(『綾部史談会考古資料集』2 綾部史談会) 1963、京都府立丹後郷土資料館編『丹波荒神塚』常設展資料2 1974

注7 崎山正人『下山古墳群』Ⅲ(『福知山市文化財調査報告書』第25集 福知山市教育委員会) 1994

注8 中村孝行・小山雅人「綾中廃寺跡第1次・第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981

注9 西 弘海「土器の時期区分と型式変化」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』Ⅱ 奈良国立文化財研究

- 所) 1978、中村 浩『和泉陶器窯の研究』 柏書房 1981
- 注10 福知山高校教諭 小滝篤史氏に現地でご教示を得た。礫床に用いられた蛇文岩は、北丹波では大江山山系で採取可能であるという。
- 注11 安藤鴻基「終末期方墳」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館) 1992
- 注12 渡辺邦雄「畿内における終末期群集墳の外部構造—特に列石を中心として—」『古代文化』第47巻第2号 1995
- 注13 『石舞台古墳及び周辺の発掘調査概要(石舞台地区国営公園予定地)』 榎原考古学研究所 1976
- 注14 平群町教育委員会によって、1994年に墳丘の調査が行われている。それによると一辺約36m・高さ約6.5mの三段築成の方墳で、墳丘全面に貼石がみられる。築造時期は、7世紀中頃と推定されている。
- 注15 新納 泉・尾上元規編『定北古墳』 岡山大学考古学研究室 1995
- 注16 谷本 進ほか『箕谷古墳群』 兵庫県八鹿町教育委員会 1987。報告書の集成によれば、6世紀～7世紀における兵庫県北部の列石を有する横穴式石室墳は、この時点で22例を数えるという。このうち、方墳は、但東町の三原古墳群において3基が調査されている。築造時期は、いずれも7世紀前半～中頃のもので、その系譜を考えるうえで注目される(宮村良雄「三原古墳群」(『但東町の埋蔵文化財』2 兵庫県但東町教育委員会) 1985)。
- 注17 吉織雅仁ほか『夕垣古墳群・夕垣遺跡発掘調査報告書』 兵庫県教育委員会 1983
- 注18 但馬考古学研究会編『古代但馬と日本海』 但馬考古学研究会 1995
- 注19 増田孝彦・河野一隆「上野古墳群・滝谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注20 前掲注7
- 注21 岡田晃治『千原古墳・弓木城』(『京都府岩滝町文化財調査報告』第6集 岩滝町教育委員会) 1984
- 注22 『大谷1号墳』 岡山県北房町教育委員会 1989
- 注23 笠野 毅「舒明天皇押坂内陵の墳丘遺構」『書陵部紀要』第46号 1994
- 注24 史跡整備に伴い、墳丘及び石室前庭部などが継続調査されている。調査の結果、変形八角形の墳丘(対角長17m)の前庭部に、幅14mの方形壇が付設されており、石垣状の列石がめぐらされていたことが判明している。
- 注25 直宮健一・古川久雄『中山荘園古墳』 宝塚市教育委員会 1985
- 注26 群馬県吉岡町教育委員会により、1993年に調査。
- 注27 前掲注15、前掲注22、亀山行雄「31. 7世紀の古墳」(近藤義郎編『吉備の考古学的研究』(下)所収 山陽新聞社) 1992など。
- 注28 亀山行雄「二子14号墳」(『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』5 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 81 岡山県教育委員会) 1993
- 注29 岡山大学助教授新納 泉先生に現地でご指導いただいた際、山尾古墳の羨門部の形態は岡山県北部地域の古墳の資料に類例があり、比較検討する必要があるとのご教示を得た。
- 注30 尾上元規「1 終末期方墳の築造規格と変遷」(前掲注15)
- 注31 実際には、無袖式の石室が多いが、石室すべてを天井石で架構するものごとを示している。
- 注32 前掲注7
- 注33 前掲注19
- 注34 泉森 皎「南郷遺跡の調査」(『季刊 明日香風』第47号 (財)飛鳥保存財団) 1993
- 注35 亀田 学『神山丑神遺跡発掘調査概要』I 大阪府教育委員会 1992
- 注36 前掲注22
- 注37 金子裕之「石のカタ古墳の調査」(『奈良山』Ⅲ 奈良県教育委員会) 1979
- 注38 谷若倫郎編『上三谷古墳群』Ⅱ(『埋蔵文化財調査報告書』第29集 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター) 1988
- 注39 尾上元規氏の研究成果をもとにした考え方である(尾上元規「1 終末期方墳の築造規格と変遷」、前掲注15)。なお、尾上氏より、本概報をなすにあたり、参考文献を寄贈いただいた。記して感謝したい。
- 注40 平井 勝『小殿遺跡(英賀郡衙推定地)英賀廃寺』 岡山県教育委員会 1980
- 注41 小山雅人「丹波綾中廃寺の創建年代」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注42 増田信武・杉原和雄他『水無月山遺跡発掘調査報告書』 京都府立丹後郷土資料館 1980
- ※調査を通じ、河北 明氏・松井 愿氏には格別のご理解・ご協力を得た。深謝します。

## 2. 第二京阪自動車道関係遺跡 平成6年度発掘調査概要

### はじめに

第二京阪自動車道関係遺跡は、日本道路公団の依頼を受けて、第二京阪自動車道建設に関連して調査を行う遺跡の総称である。第二京阪自動車道(京都南道路)は、京都盆地と大阪平野にかけて淀川沿いに带状に広がる京阪間地域を通り、京都都市圏(京滋バイパス)と大阪都市圏(近畿自動車道)を結ぶ総延長約30kmの自動車専用道路である。また、第二京阪自動車道に並設される一般国道1号線バイパス(京都南道路)は、京都市伏見区と大阪府門真市を結び、京阪間の広域幹線ネットワークが形成されることになった。調査対象である京都府域約8.8km間では、昭和63年度から平成5年度にかけて建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、八幡市の木津川左岸から綴喜郡田辺町(府境)約5.5km間の路線帯内で発掘調査を実施した。平成6年度からは、日本道路公団の依頼を受けて発掘調査を実施している。これまでの調査成果は、当調査研究センターが刊行している発掘調査概報<sup>(注1)</sup>で報告している。

平成6年度は、八幡市域の内里八丁遺跡と上津屋遺跡の2遺跡で発掘調査を実施した。

内里八丁遺跡は、八幡市内里小字八丁・日向堂に所在する。内里八丁遺跡の調査は、昭和63年度の試掘調査に始まり、遺構が検出された遺跡の南部地区(A地区)で平成元年度から本格的な調査を開始し、これまでにA・B地区の調査を終えている。

内里八丁遺跡は、木津川左岸沖積地に存在する埋没自然堤防上に営まれた弥生時代後期～鎌倉時代の複合遺跡であることが、これまでの調査成果によって明らかとなった。A地区では、下層の旧自然堤防の後背湿地部から弥生時代後期末～古墳時代初頭の水田跡2面を検出している。また、上層部では古墳時代前期と飛鳥・奈良時代を中心とする遺構・遺物を検出している。B地区では、最下層から水田跡、上層から古墳時代前期・中期の竪穴式住居跡、奈良～平安時代の掘立柱建物跡群を検出している。

平成6年度の調査は、幹線排水路(防賀川)を挟んでB地区の東に位置するD地区の南半部(D1地区)約2,000m<sup>2</sup>で面的調査を行った。さらに、C地区以北の路線帯内で遺跡範囲の確認を目的として、トレンチによる試掘調査も並行して実施した。内里八丁遺跡の発掘調査は、平成6年4月13日から平成7年3月3日の期間で、D1地区約2,000m<sup>2</sup>と試掘調査約2,000m<sup>2</sup>の計約4,000m<sup>2</sup>の発掘調査を行った。

上津屋遺跡は、木津川左岸にあり、内里八丁遺跡の北東に隣接する。上津屋遺跡の発掘調査は今回が初めてであり、遺跡の状況・範囲確認のための試掘調査を実施した。

平成6年度の発掘調査は、調査第2課調査第3係長辻本和美、同調査員竹原一彦(内里八丁遺

跡)・岸岡貴英(上津屋遺跡)が担当し、多くの補助員・整理員の協力を得て実施<sup>(注2)</sup>した。調査に際しては、八幡市教育委員会・京都府教育委員会・京都府山城教育局などの諸機関から多大な協力をいただいた。

なお、調査に係る経費は、日本道路公団が負担された。本書は、各遺跡の担当者と永澤拓志(近畿大学生)が執筆し、文末に名を記した。

(竹原一彦)

## 位置と環境

京都府の南部には、桂川・鴨川・宇治川・木津川によって開かれた広大な山城盆地が形成されている。これらの河川は、京都と大阪の府境に接する男山丘陵と天王山に挟まれた狭隘部で合流した後、淀川となって大阪湾に注いでいる。盆地の中央部、京都市伏見区・宇治市・久世郡久御山町にまたがる一帯には昭和初期まで巨椋池が存在し、古くは伏見区淀付近に桂川・宇治川・木津川の合流部があったと推定されている。

平成6年度に調査を実施した内里八丁遺跡・上津屋遺跡が所在する八幡市は、山城盆地の南縁部に位置するところから、地形の上でこの地域は北の木津川沖積地と南の丘陵部に分かれる。

これまでの調査は、丘陵及び台地部での調査が先行し、沖積地での調査例は少ないが、以下、平成6年度に調査を実施した遺跡周辺地域で、代表遺跡を中心に時代を追って概観していく。

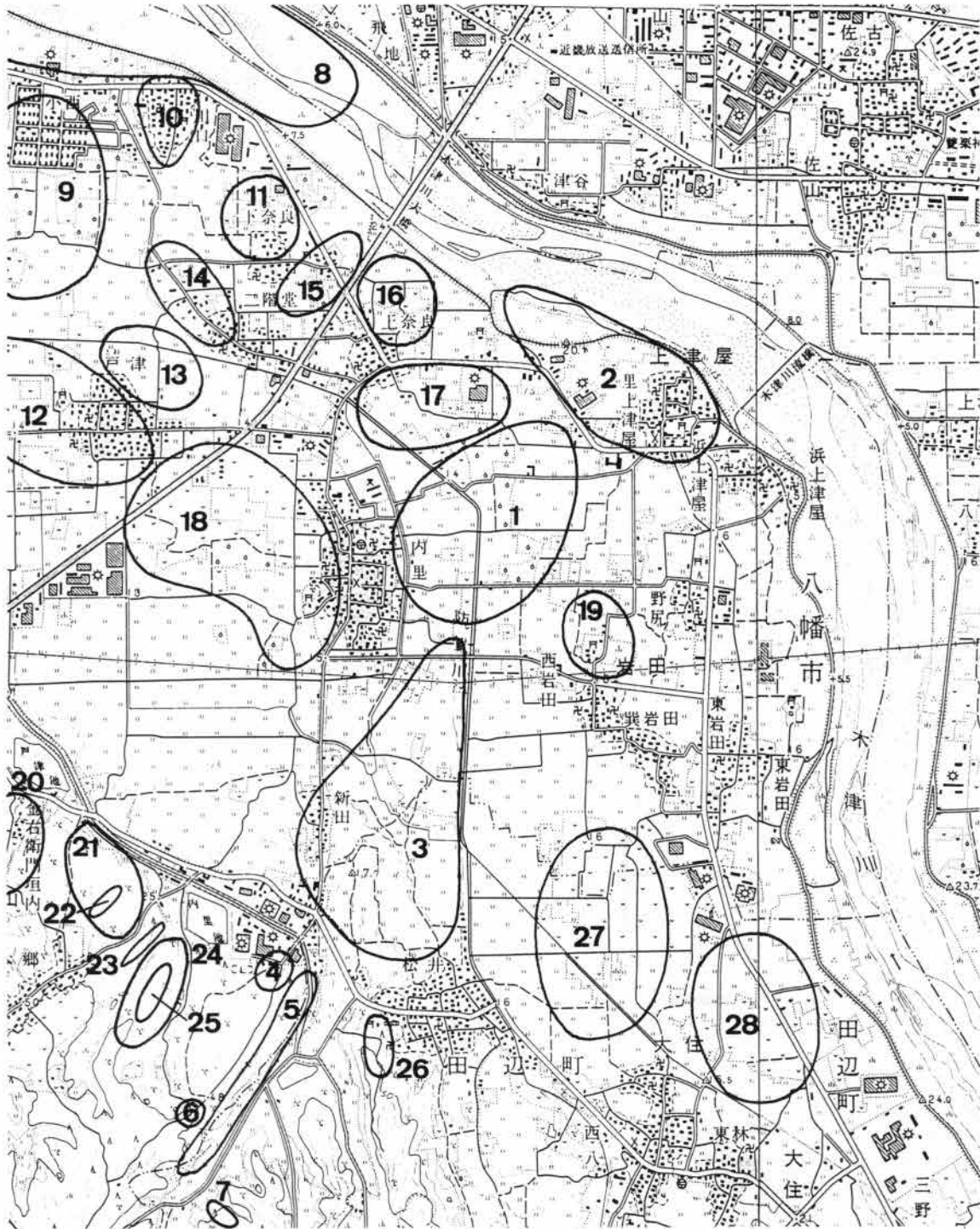
旧石器時代の遺跡は少なく、八幡市荒坂遺跡からナイフ型石器、田辺町では高ヶ峯遺跡で石核が採集されている。また、近隣では大阪府枚方市楠葉東遺跡から有舌尖頭器・ナイフ型石器が出土している。これらの遺跡は、すべて丘陵部に所在する遺跡である。

縄文時代では明確な遺跡が判明していないが、八幡市のヒル塚古墳から前期後半の土器片、金右衛門垣内遺跡から後期の切目石錘の出土をみている。田辺町では山崎遺跡から縄文後期の石棒・異形石器が出土しているほか、飯岡の木津川河川敷から縄文土器の出土をみている。

弥生時代に入ると遺跡数も増加する。前期における遺跡はまだ発見されていないが、中期以降丘陵部に高地性集落が認められる。八幡市では金右衛門垣内遺跡(中期前半～)・井の元南遺跡(中期中葉)に代表され、後期には幣原遺跡・美濃山廃寺下層遺跡・南山遺跡で竪穴式住居跡が検出されている。田辺町における高地性集落では、中期に開始される狼谷遺跡があり、後期の遺構としては天神山遺跡・飯岡遺跡から住居跡群が検出されている。平野部でみると、八幡市では木津川下床遺跡で竪穴式住居跡が検出されたほか、内里八丁遺跡で後期の水田跡・方形周溝墓が検出されている。

古墳時代に入ると、丘陵域及びその周辺に集中して古墳が築造される。八幡市男山丘陵周辺には古墳時代前期後半以降、天皇ノ杜古墳・寺戸大塚古墳に代表される桂川右岸の向日町丘陵グループ、椿井大塚山古墳に代表される山城グループとそれに続く久津川古墳群に匹敵する古墳群が築かれる。

この地域における前期古墳としては、八幡市域で石不動古墳・茶白山古墳・西車塚古墳・東車

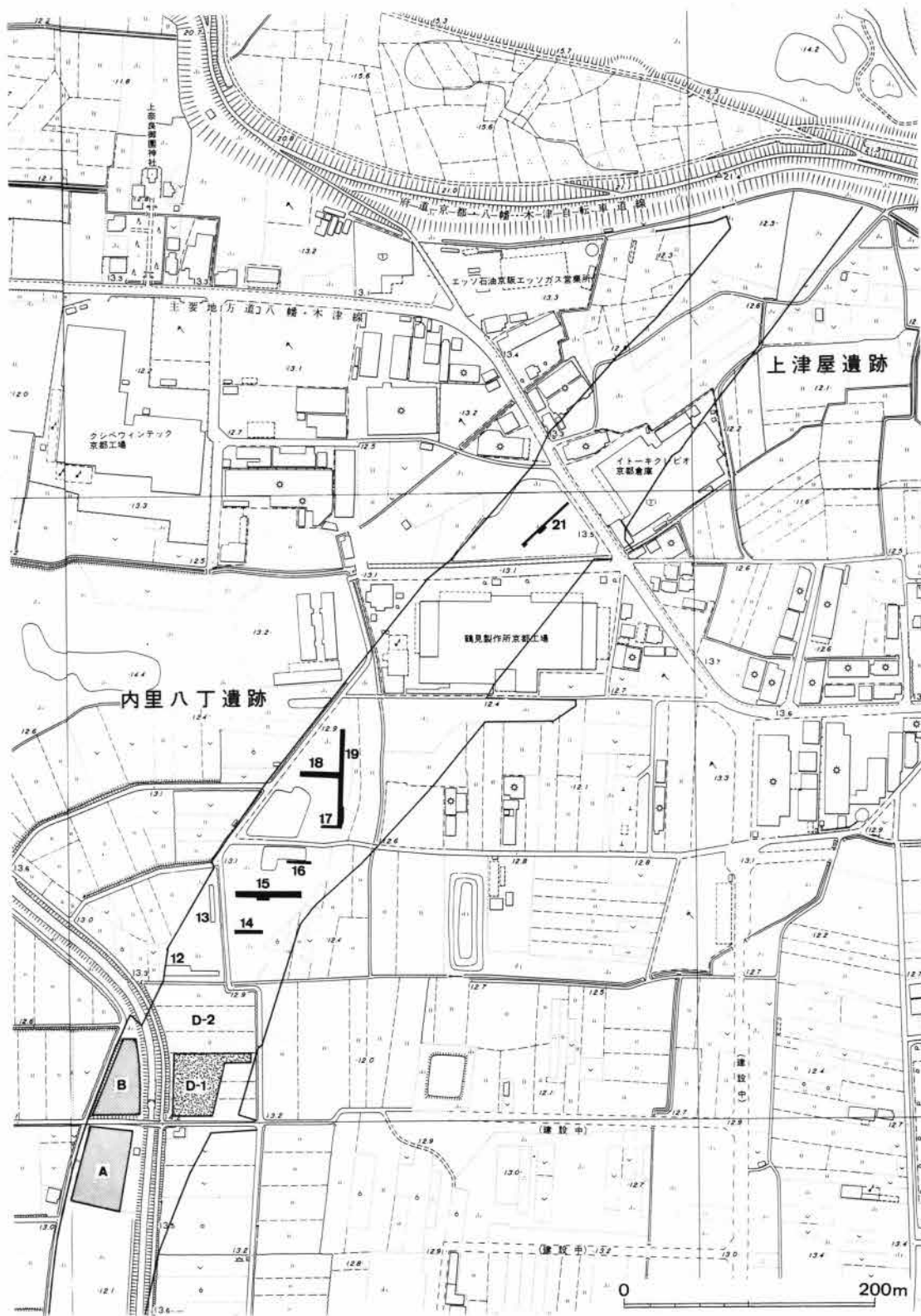


第33図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

- |            |           |            |                 |              |
|------------|-----------|------------|-----------------|--------------|
| 1. 内里八丁遺跡  | 2. 上津屋遺跡  | 3. 新田遺跡    | 4. 女谷横穴群        | 5. 荒坂横穴群     |
| 6. 荒坂遺跡    | 7. 口仲谷古墳群 | 8. 木津川河床遺跡 | 9. 河口扇遺跡        | 10. 河口環濠集落   |
| 11. 下奈良遺跡  | 12. 戸津遺跡  | 13. 奥戸津遺跡  | 14. 今里遺跡        | 15. 出垣内遺跡    |
| 16. 上奈良北遺跡 | 17. 上奈良遺跡 | 18. 内里五丁遺跡 | 19. 西岩田遺跡       | 20. 金右衛門垣内遺跡 |
| 21. 狐谷遺跡   | 22. 狐谷横穴群 | 23. 美濃山横穴群 | 24. 美濃山廃寺下層遺跡   |              |
| 25. 美濃山廃寺  | 26. 松井横穴群 | 27. 魚田遺跡   | 28. 散布地(遺跡名称未定) |              |



塚古墳、田辺町では飯岡車塚古墳など、50～100m前後の大規模な前方後円墳が存在する。中でも茶臼山古墳は、九州阿蘇石製の舟形石棺を持つことで注目される。中期では八幡市で美濃山大塚古墳・東二子塚古墳・西二子塚古墳など、首長墳とみられる大型円墳が築かれる。一方、田辺



第34図 調査地位置図

町では前方後方墳の大住車塚古墳・大住南塚古墳、大型円墳のゴロゴロ山古墳・十塚古墳などの首長墳が築かれる。後期に入ると、顕著な首長墳の築造がなくなるとともに、小規模な群集墳の築造がみられるようになる。このような状況から南山城一帯は中期後半以降、車塚古墳に代表される久津川古墳群を生みだしたグループが覇権を確立したものと考えられる。

また、この地域は、古墳時代後期以降、横穴群が多数造営される。横穴群の多くは丘陵東斜面に築かれており、八幡市域では狐谷横穴群・美濃山横穴群・女谷横穴群・荒坂横穴群、田辺町では松井横穴群・堀切横穴群・飯岡横穴群が周知されている。これらの横穴群は、九州から移住させられた隼人の居住圏と重複することから、隼人との関連性が指摘されている。

古墳造営に係わる集団の居住及び生産基盤は平地部に求められるが、平地部での調査例が少ないことから、その実態に関してはまだ明らかでない部分が多い。古墳時代の集落跡の調査例としては、わずかに内里八丁遺跡と新田遺跡で中期の竪穴式住居跡、木津川河床遺跡で後期の竪穴式住居跡が検出されている程度である。そのほか、田辺町興戸遺跡では水田跡が検出されている。

飛鳥・奈良時代では、仏教伝来にともなって、八幡市西山廃寺・志水廃寺・美濃山廃寺、田辺町興戸廃寺などが丘陵部に建立されている。また、男山丘陵部には四天王寺創建瓦を供給した平野山瓦窯とともに志水窯跡・松井窯跡などが知られる。平地部の調査は進んでいないが、これまでに八幡市の内里八丁遺跡・上奈良遺跡で掘立柱建物跡群が検出されている。また、田辺町では興戸遺跡・古屋敷遺跡が知られる。古屋敷遺跡は、山陽道山本駅と推定されている遺跡であり、官衙色の強い建物跡群が検出されている。

平安時代以降は、男山丘陵上に石清水八幡宮が創建される。同八幡宮は、平安・中世を通じて多数の荘園を所有し、第一級の神社としての地位を確立した。平地部では、「条里地割」の整備が進み、「六の坪・八の坪・三十」などの小字名や水田畦畔の位置関係にその痕跡をみることができる。中世に入ると、南北朝の戦乱に関連した山城が築かれるほか、多くの伝承や旧跡の存在は、この地域での戦闘が激しかったことを物語るものであろう。

以上、調査地周辺の歴史環境を略述してきたが、これまでの調査は丘陵部とその周辺に集中し、平地部の調査は近年ようやく開始されたばかりである。大規模古墳を築造した集団やその生産基盤に関する問題、古代における交通の要衝としての八幡・田辺地域の位置づけなどを明らかにしていく上で、今後の平地部での調査が期待されるところである。

(竹原一彦)

## (1) 内里八丁遺跡

### 1. はじめに

D地区は、前年度調査のB地区の東に位置し、両調査区間には防賀川が北流する。平成6年度は、D地区を南北に二分割し、南側のD1地区で面的調査を実施した。また、遺跡範囲確認を目的としたトレンチによる試掘調査を路線帯内の北部で実施した。

D1地区の調査は、初めに調査地内の遺構面の状況を把握するため、重機を使用した試掘を行った。この試掘の結果、集落関連遺構の存在する自然堤防の東縁ラインを確認した。この東縁ラインは、調査区の中央やや東側を北東から南西方向に走っている。ラインの西側は黄褐色系砂質土による微高地であり、東側はグライ土壌が厚く堆積した後背湿地であることが明らかとなった。後背湿地での土層観察では、A・B地区で観察された水田土壌が認められず、深部では有機物を伴うシルトの堆積層が認められた。このような状況から、後背湿地部分には顕著な遺構がないと判断し、面的調査範囲を西部の微高地部分に再設定した後調査を開始した。微高地での調査は、古墳時代(前期・中期)・奈良～平安時代・鎌倉時代の遺構面から竪穴式住居跡・溝・井戸・土坑などを検出するとともに、多くの遺物の出土をみている。以下、各遺構面における主要な遺構・遺物について述べてみたい。

### 2. 各地区の概要

#### (1) D1調査区

##### A. 第4遺構面(古墳時代前期)

海拔約11.3m前後に広がる微高地上から竪穴式住居跡5基・建物跡1棟・溝・柱穴を検出した。微高地は、過去に調査したA・B地区と一連のものであり、東縁部に位置する。調査区の東端部は低地となる。断ち割りによる土層観察の結果、微高地から東方向に下がる急斜面を確認するとともに、シルト・砂による互層堆積を確認した。最下層付近には沼沢地にみられる有機物を多量に含むシルトが厚く堆積しており、盤・階段などの木製品とともに布留式土器の出土をみている。調査区東端の最深部は海拔9mであり、微高地上面との比高差は約2.3mを測る。

#### ①検出遺構

**竪穴式住居跡SH07** 南部に位置する4基からなる住居跡群(SH07～10)の1基である。群中の東南にあり、一辺約4.2～5.2mの方形プランの住居跡である。長軸は北から東に約44°振る。検出面から床面までの壁高は約20cmを測る。床面は水平でなく、4か所の柱穴で囲まれた住居跡中央が高く(硬化)、周壁にかけてゆるやかに下がる傾斜が認められた。住居跡東南壁中央の壁面に接して貯蔵穴とみられる不定形の浅いピットが存在する。ピットの規模は径約1.1～1.3m×深さ約15cmである。住居跡床面の中央で広範囲に炭・灰の堆積が認められたことから、中央に炉が

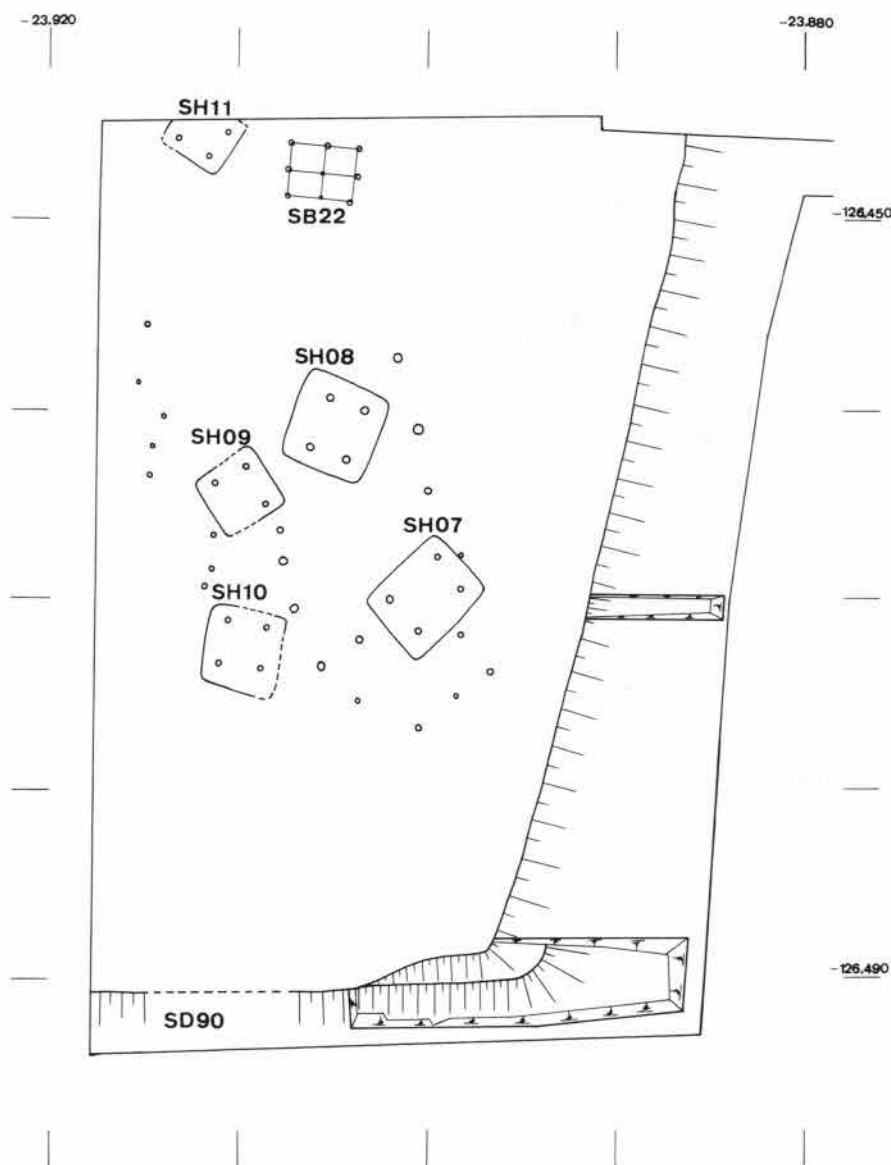
存在したと判断される。また、南西壁面に接する床面から上面が平らな花崗岩を検出した。この花崗岩の周囲は通路様に高まり(硬化)、住居跡中央に続いている。住居跡床面・貯蔵穴から庄内併行期の高杯・甕が出土している。床面の遺物の状況として、住居跡中央の高まり周縁付近から出土する傾向にある。

#### 竪穴式住居跡

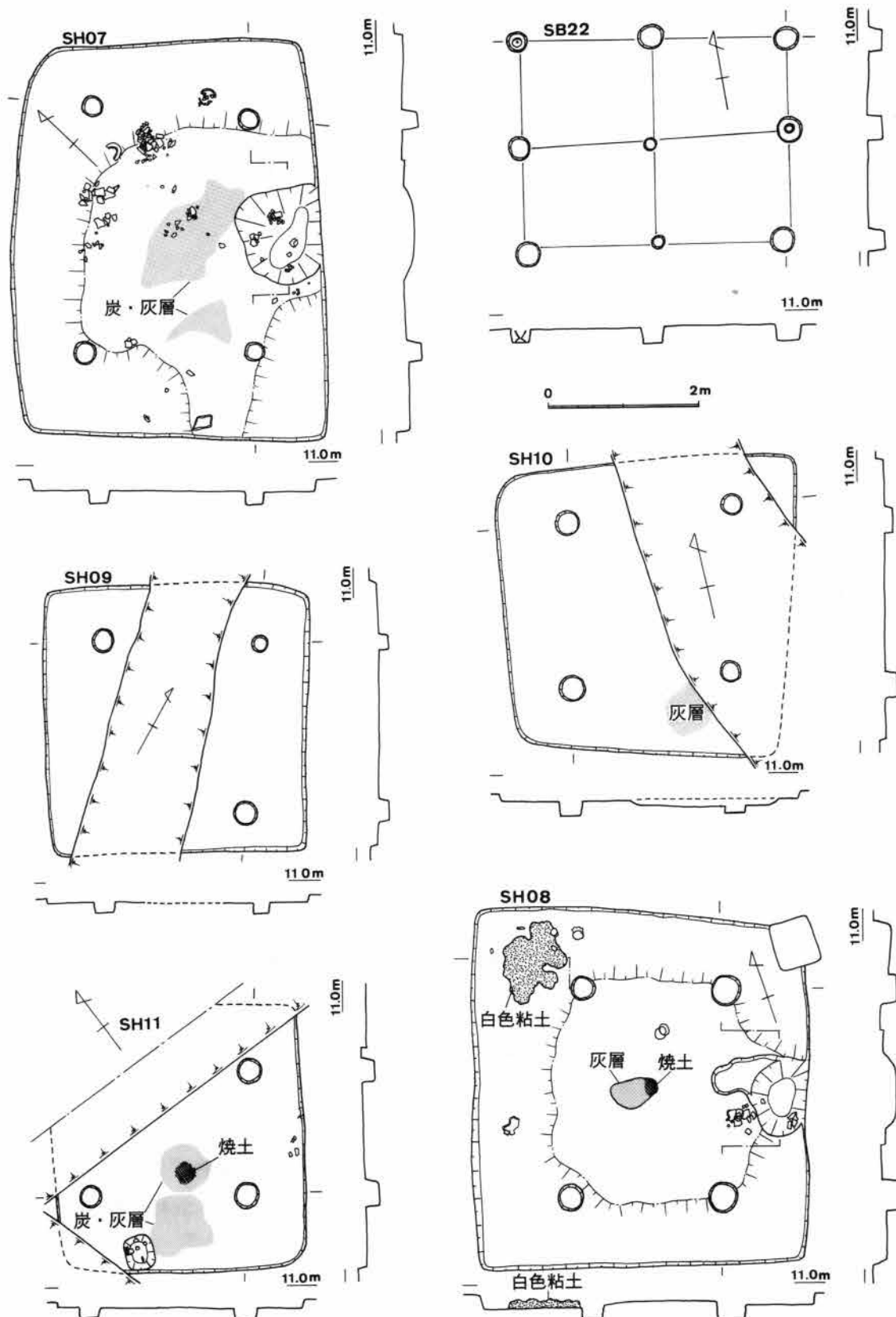
SH08 SH07  
の北西にあり、  
約9mの間隔を

あけている。一辺約4.7m前後の方形プランの住居跡である。住居跡の軸線は北から東に約20°振る。SH07とともに床面中央が硬化し、外周部より高まる。住居跡中央床面に掘り込みの炉跡が存在する。楕円形の炉跡は長径0.6m・短径0.4m・深さ5cmを測り、東端部が特に焼け締まっている。住居跡東南壁中央の壁面に接して貯蔵穴とみられる楕円形の浅いピットが存在する。ピットは長径1m・短径0.7m・深さ30cmを測る。貯蔵穴の北西側床面には浅い段が認められる。住居跡の北東隅には白色の粘土塊(バケツ一杯分)が集積されていた。出土遺物として、炉跡の北東60cm付近から完形の甕、白色粘土塊付近から器台、床面及び貯蔵穴付近から高杯・甕など庄内式併行期の土器が出土している。

竪穴式住居跡SH09 SH08の南西にあり、約2mの間隔を開けている。一辺約3.6~3.8mの方形プランの住居跡である。住居跡の軸線は北から西に約30°振る。住居跡中央部は後世の溝で壊されている。柱穴は3か所検出したが、炉跡は確認できなかった。遺物の出土は認められない。



第35図 第4遺構面平面図



第36図 第4遺構面・竪穴式住居跡・掘立柱建物跡実測図

竪穴式住居跡SH10 SH09の南、SH07の西に位置し、それぞれ7～8mの間隔を保っている。一辺約4mの方形プランの住居跡である。住居跡の軸線は北から西に約15°振る。住居跡の東部は後世の溝で壊されている。柱穴4か所を検出したほか、床面南部付近で炭・灰の堆積が認められた。古式土師器の破片が少量出土している。

竪穴式住居跡SH11 北部グループに属する住居跡である。方形プランの住居跡の北側は調査区外にのびる。軸線は北から東に約32°振っている。住居跡の規模は、一辺約3.4m前後と推測される。住居跡南西壁面に接してやや西寄りの地点で貯蔵穴とみられる小ピットを検出した。ピットは方形を呈し、一辺約40cm×深さ約5cmを測る。貯蔵穴の北東側床面に炉跡が存在する。庄内併行期の甕・高杯の出土をみている。

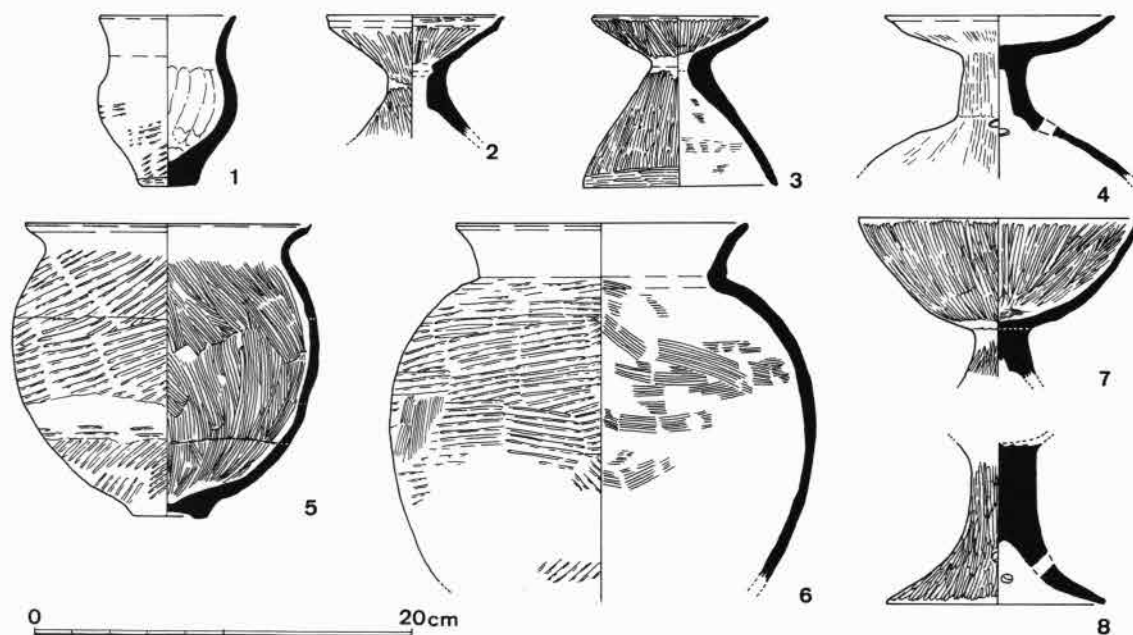
総柱建物跡SB22 SH11の西側約4m付近に存在する2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。建物跡の規模は、東西約3.6m×南北約2.8mを測る。建物跡の軸線は、北から西に約8°振っている。北東隅の柱穴内から、完形の器台1点が逆位置状態で出土している。

溝SD90 調査区南端で検出した東西溝とみられる遺構である。北岸部の南に下がる斜面を検出した。調査区東端部の沼沢地から、西に流れた水路と推測される。溝底部の東端は沼沢地斜面の途中にあり、溝底部付近には有機物シルト層が認められた。この有機物シルト層中から櫛・杓・建築部材などの木製品のほか、布留式併行期の高杯(杯部)・小型丸底壺が多量に出土した。さらに、溝最下層の薄い砂層中には庄内併行期の甕が存在した。

②出土遺物(第37図)

今回は住居跡関連の遺物を中心に報告を行い、溝・沼沢地出土の庄内～布留式期の土器・木製品については今後の報告に委ねる。

1は、SH11の貯蔵穴出土の甕である。口径7.4cm・器高9.1cmを測る。体部の張りは弱く、突



第37図 第4遺構面竪穴式住居跡群出土遺物実測図  
 1. SH11 2・5～8. SH08 3. SB22 4. SH07

出ぎみの厚い平底をもつことから、縦長のプロポーションとなる。体部外面は粗い平行タタキ、内面は強いユビナデである。2はSH08、3はSB22、4はSH07出土の小型器台である。2は、口径9.4cmを測る。直線的な受け部端は立ち上がり、面を作る。杯部内面と外面はていねいにヘラミガキする。3は、口径9.4cm・器高9.1cmを測る。やや内湾ぎみの受け部は中空で、端部は丸くおさめる。脚部は、内湾ぎみに開く。受け部の内外面と脚部外面は、ていねいにヘラミガキする。脚部の内面は、ヨコハケする。4は、口径12.1cmを測る。受け部は内湾ぎみで、浅い皿状を呈する。短めの脚柱部から大きく裾が広がる。外面はハケメ調整する。脚部上端の4か所に小円孔を開ける。7・8は、SH08出土の高杯である。7は、椀形高杯の杯部である。口径14.9cmを測る。杯部の湾曲はゆるやかで深い。内外面ともていねいにヘラミガキする。8は、脚部である。脚部径は11.5cmである。外面はていねいにヘラミガキする。5・6は、SH08出土の甕である。5は口径15.1cm・器高15.5cm、6は口径15.4cmを測る。ともに体部は球形に近く、5では小さな凹底をもつ。外面は左下がりの太いタタキ、内面はハケメ調整する。

(竹原一彦)

### B. 第3遺構面(古墳時代中期)

海拔約11.6m前後に広がる微高地上で遺構面を検出した。調査地北部の微高地上から竪穴式住居跡3基と土坑を検出した。

#### ①検出遺構

**竪穴式住居跡SH04** 調査地北部で東西に連続する3基の住居跡のうち、東に位置する竪穴式住居跡である。住居跡は方形を呈し、一辺約6m・深さ約25cmを測る。住居跡の軸線は、北から東に約11°振っている。住居跡内の東壁中央やや南に偏って、東西約1.0m×南北約0.65mの馬蹄形を呈する竈が築かれている。竈の底面は、住居跡床面から約6cm下がり、中央部に支脚とみられる方柱状の立石が存在した。支脚は、焚き口方向にやや傾き、約1/3が埋められるが上端部は底面から約16cmの高さを測った。竈の底には灰が薄く堆積し、上部には壊れた竈の壁体が崩れ落ち、上面には土師器の甕破片が多数散乱していた。

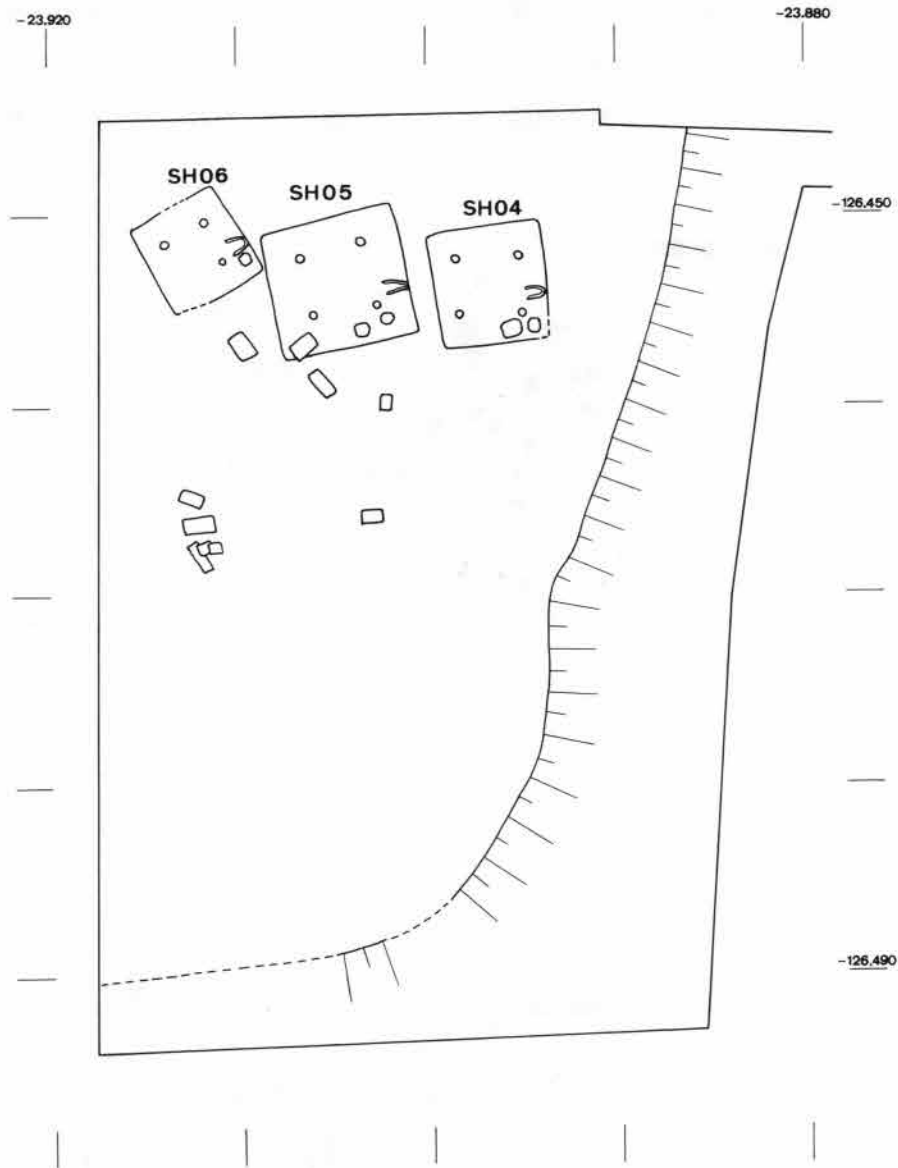
住居跡の床面は水平ではなく、4か所の柱穴に囲まれた中央部が周辺部より高く、かつ硬く締まっていた。硬化した中央の床面は上下2面あり、中間層には薄い灰層が存在したことから、住居跡の中央部は貼り床であることが明らかとなった。竈の南側やや離れた位置には貯蔵穴とみられる土坑2か所が存在した。東側の土坑は楕円形を呈し、東西約0.6m×南北約0.8m×深さ約12cmの規模を測る。また、西側の土坑は円形に近く、直径約1.1m×深さ約21cmのすり鉢状を呈している。西壁中央付近の床面上には方形を呈する浅い窪みが存在する。この窪みは、周囲の床面より底面が硬化していることから、住居の出入り口にできた窪みと推測される。住居跡の床面の周縁部には浅い周溝が存在する。

この住居跡は、短期間に埋没したのではなく、土層断面の観察から数期に渡る埋没過程を確認した。住居の埋土には中間層に炭・灰層が認められ、層中及び上面で遺物(第41図1・3・5・8～14)が出土した。一方、住居跡床面上の遺物として、第41図2・4・7・15の土器の出土し

たほか、滑石製  
勾玉(板状)1点  
が出土している。

**竪穴式住居跡**

**S H05** 検出し  
た3基の住居跡  
中、中央に位置  
する方形住居跡  
である。東に隣  
接するS H04と  
同一の方位を取  
り、住居間隔は  
約1.3mの距離  
を置いている。  
S H05は、一辺  
が6.5～7mを  
測る大型の住居  
跡である。住居  
跡は削平が著し  
く、検出面から  
床面までの壁高  
は約10cmであっ  
た。S H04と同  
じく、東壁の中



第38図 第3遺構面平面図

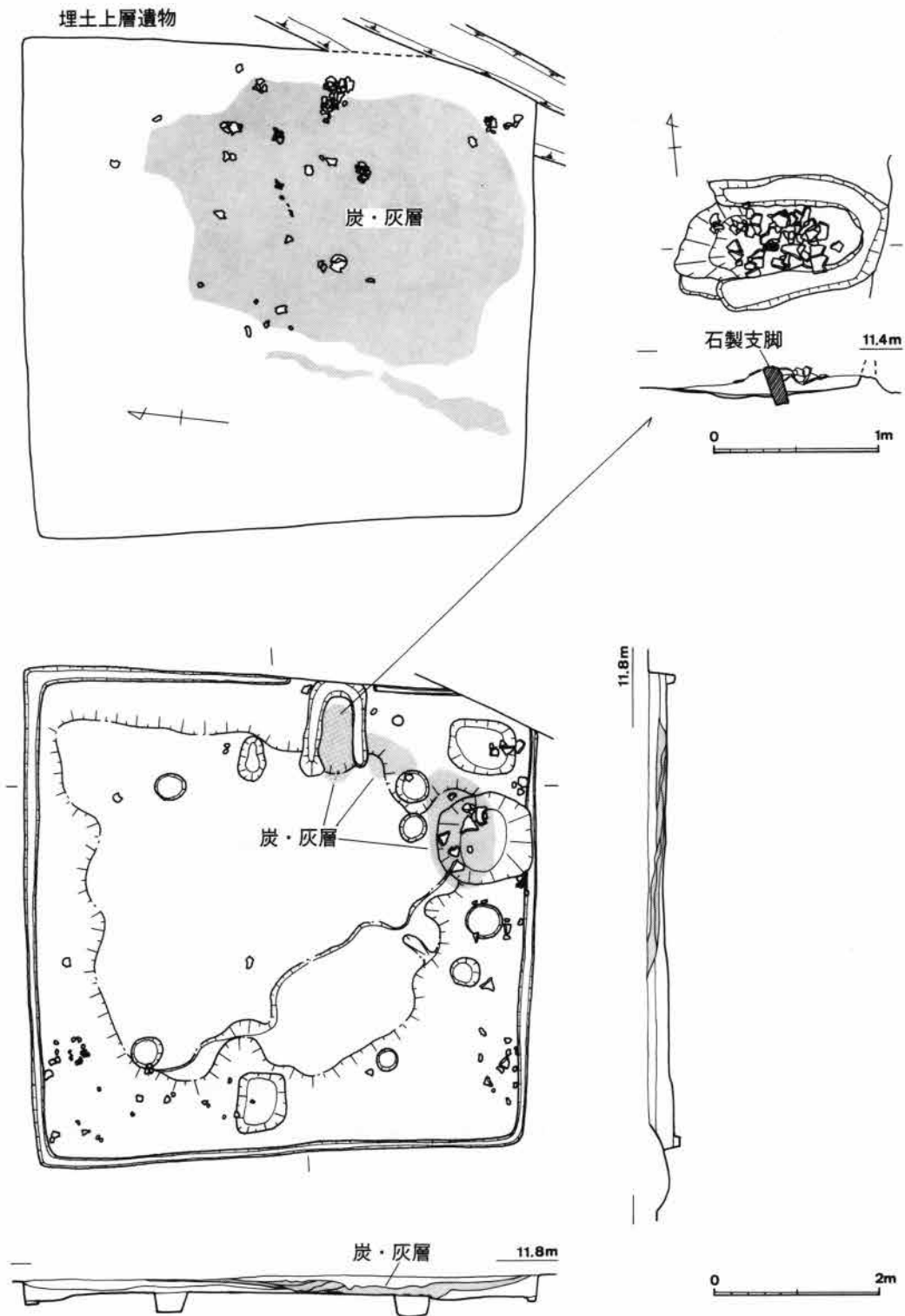
央やや南寄りに竈が築かれる。竈は、住居壁に近い煙道付近では約50cmと幅狭く、焚き口付近の最大幅は約1.0mであり、全長は約1.5mを測る。竈内中央には土師器の甕(第42図5)による支脚が遺存していた。支脚の甕は完形品を使用し、口縁部を底面下に埋めている。支脚の高さは約11cmを測る。支脚の上部には壊れた竈壁とともに土師器甕の破片が散乱していた。

床面は、4か所の支柱穴に囲まれた中央部が硬化し、周囲より幾分高まっている。南壁中央部に接する床面には、貯蔵穴とみられる東西約70cm×南北約60cm×深さ約25cmのすり鉢状を呈するピットが存在する。貯蔵穴内から須恵器の有孔無頸壺(第42図3)・杯蓋(同1)・甕などの出土をみている。また、竈の北側、東壁に近い床面上で直径約20cmの範囲が焼土化していた。位置関係などから、過去に竈が存在した可能性が高い。

**竪穴式住居跡 S H06** 西側に位置する方形の住居跡であり、一辺約5.0～5.5m×深さ約15cmの規模を測る。住居跡の主軸は、北から東に約30°と大きく振っている。東側のS H05とは近接部



分で約10cmしか離れていない。竈の位置は、他の住居跡と同様に、東壁中央やや南に偏る。竈の規模は、全長約1.2m×幅約0.8mを測る。SH05と同じく、竈内には土師器甕(第42図4)による支脚が遺存している。支脚の周囲には土師器の甕(同8)が散乱していた。竈の南側には貯蔵穴とみられる一辺約40cmの方形を呈する浅いピットが存在する。また、竈の北側には過去の竈跡とみ



第39図 SH04実測図

られる焼土部分  
を検出している。

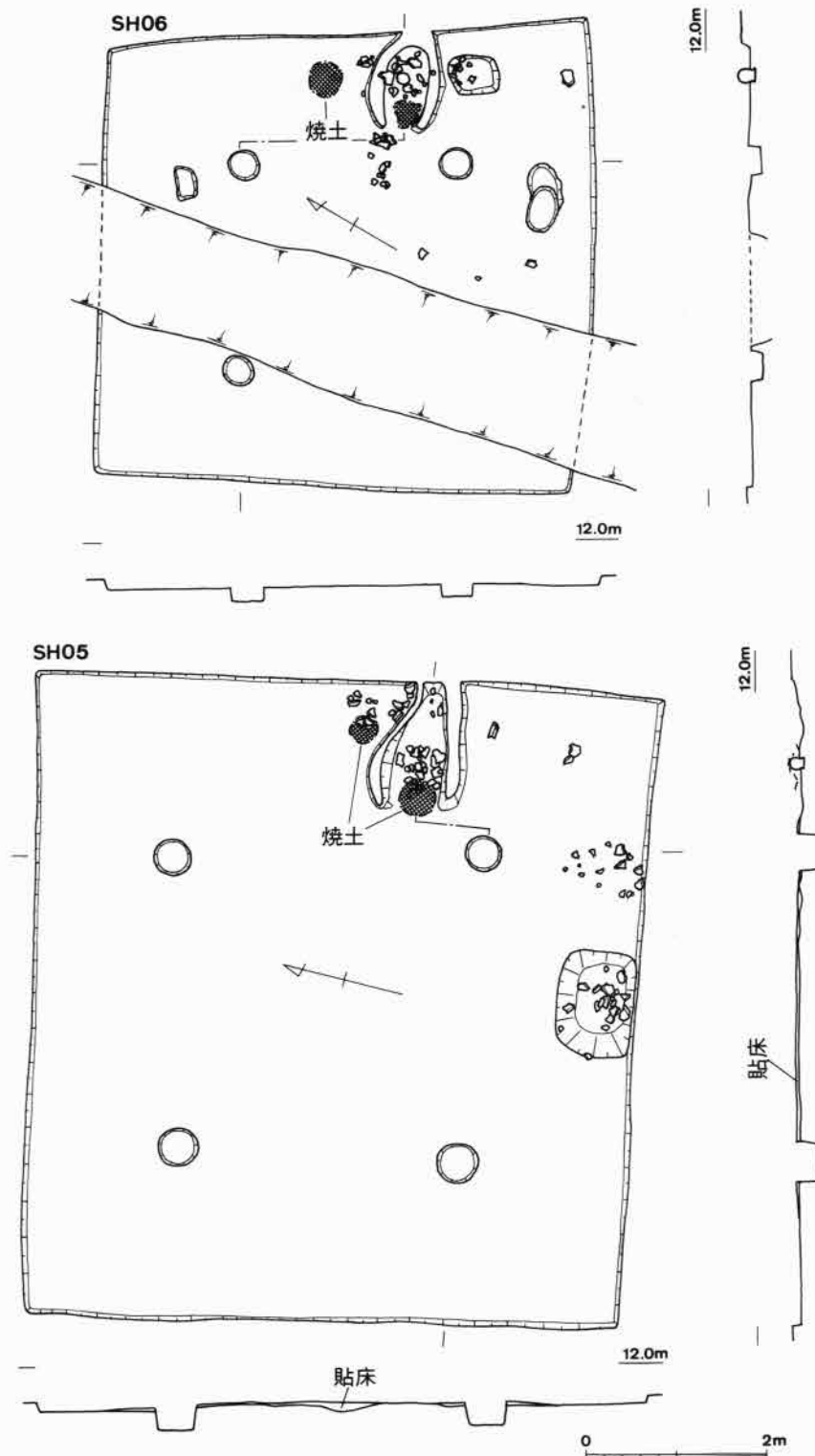
②出土遺物

SH04(第41  
図) 住居跡内  
の埋土・床面・  
竈・貯蔵穴か  
ら、須恵器(1  
～4)・土師器  
(5～15)・滑石  
製勾玉が出土し  
ている。須恵器  
はすべて床面上  
からの出土であ  
る。杯身(1～  
3)は、立ち上  
がりは一旦内傾  
した後上方にの  
び、端部は丸く  
おさめる。杯身  
3の口縁端部は  
面をもつ。受け  
部は外上方にの  
びる。身部の外  
面には、回転ヘ  
ラケズリが受け  
部近くにまで及  
んでいる。口径  
は9.4～11.2cm、  
器高は4.3～  
5.0cmを測る。

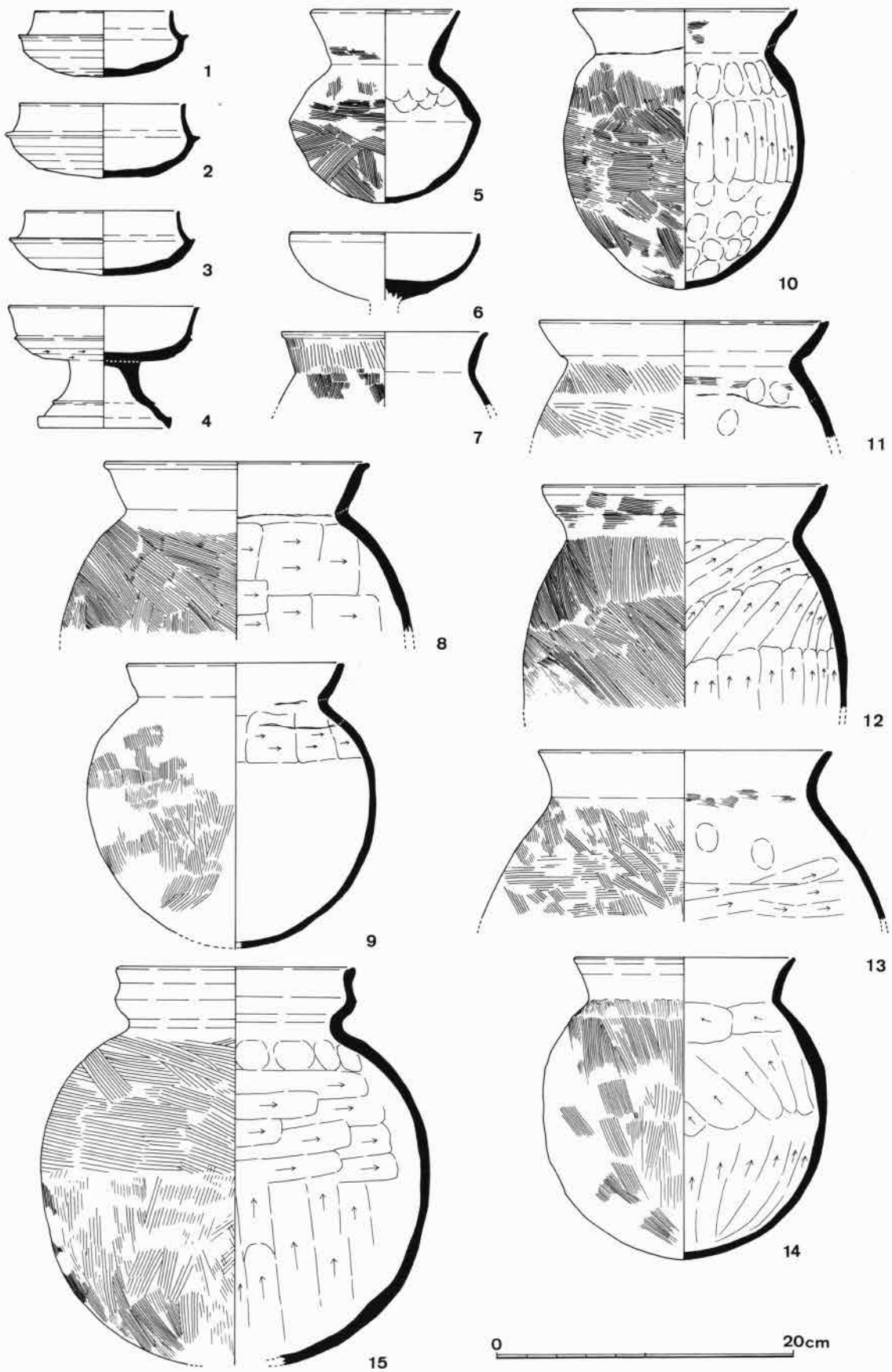
無蓋高杯4は、

口径13.0cm・器高8.4cmを測る。杯部は、杯蓋と同一の形態であり、口縁端部は面をもつ。脚部の中ほどにシャープな稜をめぐらす。

土師器では壺・甕・高杯などの出土をみている。住居跡埋土の上層出土(6・7・15)と床面も



第40図 SH05・06実測図



第41図 S H04出土遺物実測図

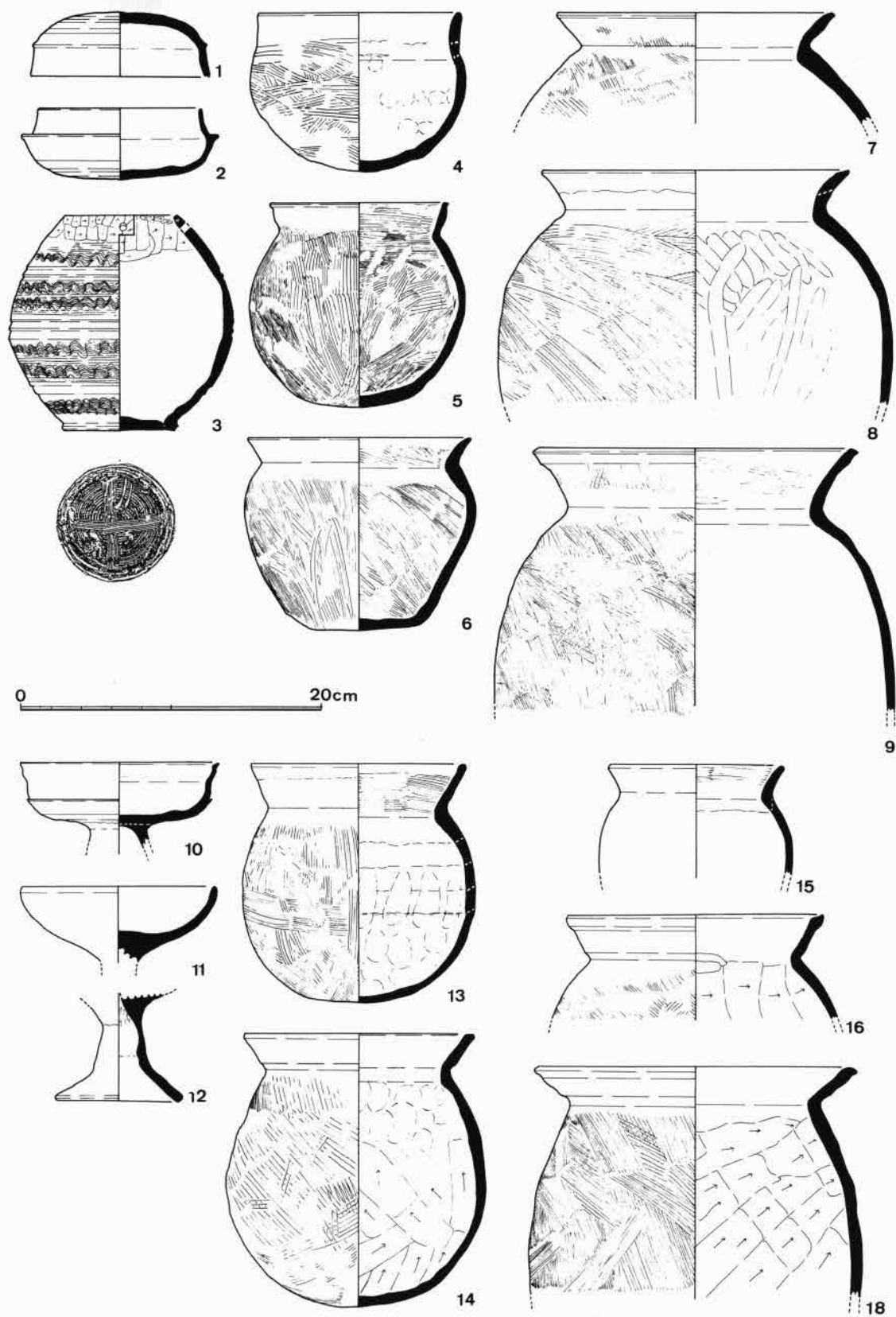
しくは床付近出土(8~14)に分かれる。壺5は、体部がやや偏球形を呈し、底部は丸底である。口縁部は直線的に外上方にのび、端部は丸くおさめる。外面はハケメの後、口縁部をユビナデで仕上げている。口径10.2cm・器高13.1cmを測る。高杯6は、脚部を欠く。杯部は碗状を呈し、口縁端部は外面を強くヨコナデする。口径は6.3cmを測る。7~15は、甕である。甕7は、ゆるやかに外反する口縁の端部がやや肥厚して丸く終わる。外面はハケメ調整する。口径は14.0cmである。甕8・9は、「く」の字に外反する口縁の端部に面をもつ。体部は下半部を欠くが、丸みの強い体部とみられる。体部外面はハケメ調整し、内面は横方向にヘラケズリする。8の口径は17.8cm、9の口径は14.6cmを測る。甕10~12は、内湾ぎみにのびる口縁の端部が内傾する凹面をもつ。甕10の底部は丸底で、体部は丸みが強い。口径15.2cm・器高18.9cmを測る。甕12の体部は長胴形である。すべての甕は、体部外面をハケメ調整する。口径は15.2~19.2cmである。甕13・14は、「く」の字に外反する口縁の端部が丸く終わる。甕14の体部は球形を呈する。口径は15.0cm、器高は20.4cmを測る。甕15の口縁は二重口縁である。口縁端部は肥厚し、外反ぎみに終わる。体部は球形を呈し、外面はハケメ調整している。体部内面はヘラケズリを行い、頸部には指頭圧痕を残す。口径は16.3cm、器高は27.0cmを測る。

S H05(第42図1~9) 住居跡床面と竈・貯蔵穴などから須恵器(1~3)・土師器(4~9)の出土をみている。

杯蓋1は、天井部の丸みが強く、口縁端部は段をもつ。外面の回転ヘラケズリは稜線近くにまで及んでいる。口径は12.0cm・器高4.3cmを測る。杯身2の口縁は、受け部から内傾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。身部外面のヘラケズリは中ほどで終わる。口径は11.0cm・器高4.7cmを測る。3は、有孔無頸壺である。体部の形態と文様構成は樽形甕の体部に似ており、3は特に体部の丸みが強い。口縁部は内外面とも細かいヘラケズリを行い、端部はヘラ切り未調整のまま終わっている。口縁部の4か所に小さな円孔をもっている。体部外面には2条1対の凹線で区画された文様帯4か所に、それぞれ2条の波状文が施されている。底部は平底で、円盤状の粘土で体部と接合している。外底面は同心円文的にカキメを行った後、ハケメ状工具で「十」字を描いている。口径は7.4cm、器高は14.4cmを測る。

無頸壺4は、口径12.0cm・器高10.6cmを測る。体部は半球形で、口縁部はやや外反ぎみに上方に立ち上がる。甕5は、竈支脚として使用されたものである。体部は、球形で内外面をハケメ調整する。口径11.6cm・器高13.6cmを測る。6は、偏球形の体部をもち、底部は平底である。体部の最大幅は上部に位置する。内外面ともハケメ調整する。口径は15.1cm、器高は12.9cmを測る。7~9は、甕である。7は、口径18.6cmを測る。口縁端部は丸く、外面をハケメ調整する。8は、口径20.6cmを測る。口縁端部は内傾する凹面をもつ。外面はハケメ調整し、内面はヘラケズリの後ナデ仕上げする。9は、口径21.4cmを測る。口縁は「く」の字に屈曲した後、外側に肥厚した端部をもつ。外面と口縁部内面はハケメ調整する。

S H06(第42図10~18) 竈とその周辺から須恵器10と、土師器(11~18)の出土をみている。無蓋高杯10は、脚部を欠く。口径は、13.2cmを測る。11・12は、高杯の杯部と脚部である。碗形を



第42図 S H05・06出土遺物実測図

呈する杯部をもつ11の口縁は13.1cmを測る。13～18は、甕である。13は、竈の支脚に使用されている。球形の体部をもち、口縁端部は内側に丸く肥厚する。口径14.2cm・器高15.3cmを測る。14の体部最大幅は中央やや下部にある。口径15.3cm・器高18.3cmを測る。すべての甕の外表面はハケメ調整を施す。

(永澤拓志)

### C. 第2遺構面(奈良時代)

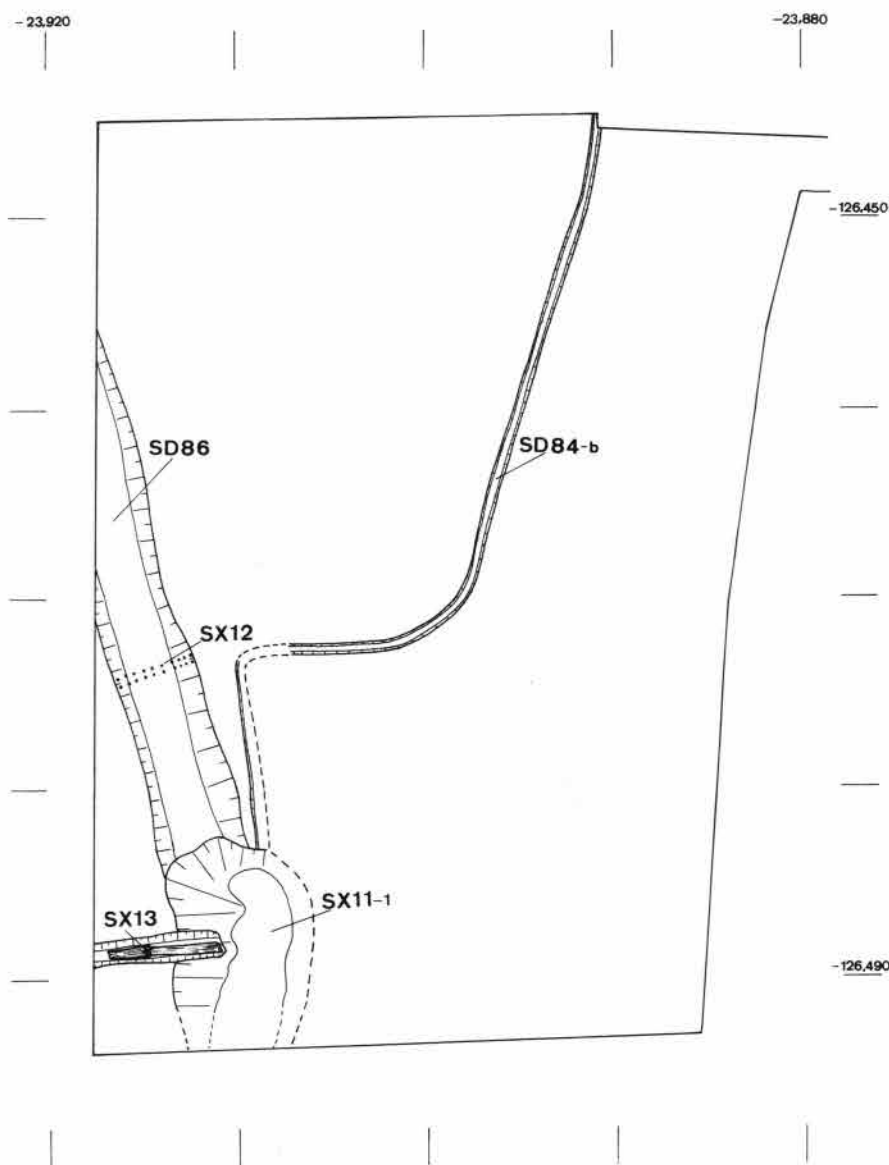
第3遺構面から約15cm上部で検出した遺構面であり、海拔は約11.7m付近に位置する。第3遺構面上に堆積した淡黄茶色の粘質細砂層をベース面としている。第3遺構面で確認した微高地東縁ラインは、この時期に大きく西に移動している。特に、調査区の南部域での微高地の削平が顕著に現われる。微高地周縁部には溝(SD84)がめぐらされ、溝の東側は水田土壌と推測する淡緑灰色の粘質微砂層(海拔約11.5m)が広がる。

#### ① 検出遺構

(第43図)

微高地上から溝・池状遺構・橋・暗渠施設を検出したが、B地区に認められた建物跡・井戸などの分布は、この地区に及んではない。

溝SD84b  
微高地周縁部をめぐり、南の池状遺構から水利を取ったとみられる。溝幅の最大値は約0.5m・東側低地面からの深さは約30cmを測る。水口は池状遺構北岸にあり、一旦北流



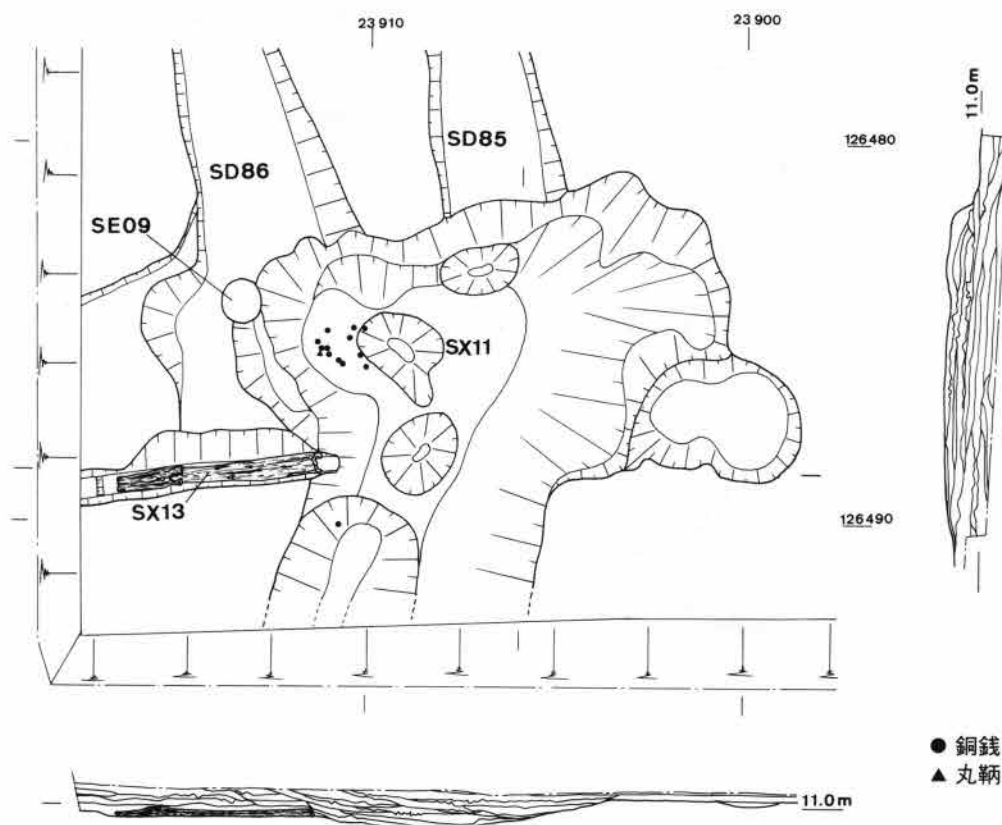
第43図 第2遺構面平面図

した後東に直角に折れ、再度やや東に振りながら北流する。この溝は平安時代(S D84 a)でも、ほぼ同一場所を流れていたことが、上層の調査で明らかとなっている。

溝 S D86 調査区西部で検出した大型の素掘り溝である。溝幅約4.5mを測る。深さに関しては、溝底の海拔高が10.9mを測ることから、約70~80cmの深さであったと推測できる。溝の方位は、北から西に約14°振っている。溝の南端部にいびつな楕円形を呈する池状遺構が存在する。溝は、溝底の傾きから南流する溝であり、池状遺構に注ぎ込んでいる。溝底では橋の存在をうかがわせる杭列の痕跡を検出したほか、牛の足跡が多数認められ、荒れた状況にあった。特に、牛の足跡については橋とした杭列部分には認められない。溝の埋土は、上層では砂の粒子が細かく粘性が強いが、下層になるほど粒子は粗くなる。溝最下層には3mm前後の石を含む砂が10cmほど堆積し、多量の土器とともに土馬・ミニチュア竈などの祭祀遺物や墨書土器・鍔帯などが包含されていた。

橋 S X12 S D86に架かっていた橋の痕跡を確認した。池状遺構の北約10m付近に位置し、橋脚と推測する2列の杭列痕跡(直径約5~8cmの小穴)を検出した。並走する杭列の間隔は約50cmを測る。また、列における各杭間隔は40~50cmを測る。溝底部の2個1対の杭痕跡の周囲は、水流による楕円形の窪みが認められた。橋自体は、杭列の規模・形状からみて、杭と板を使用した単純な構造であったと推測される。

池状遺構 S X11 S D85・86の南端部に存在する不定形で、深さのある遺構である。底面は平



第44図 S X11・13実測図

坦でなく、大きく浪打つ形状を呈する。溝・暗渠付近の底面は、ことさら大きく窪んでいる。池状遺構の南西部が底付近まで切れた状況にあり、常時多量の水が滞水していた状況は観て取れない。埋土の観察によって位置・規模・形状に変化が認められる。

池状遺構の第1期は、初期段階(第43図)であり、S D84b・S D86・S X11と関連する。時期的には奈良時代末頃とみている。池状遺構はS D86のほぼ軸線上にあり、形状は南北に長い楕円形を呈していたと推測される。長さ10m以上・幅8m前後・深さ約1.2mの規模と判断される。S D86の溝底と池状遺構底面との比高差は約50cmを測る。最下層には有機物を含む暗灰色系の微砂が互層に約40cmほど堆積し、多量の土器に混じって墨書土器・土馬・獣骨・板材が少量出土した。さらに、S D86に近い底面上から、和同開珎10枚・万年通宝1点・神功開宝1点・銚帯が、およそ1mの範囲内から出土した。さらに、南約4m離れた底面から、和同開珎1枚の出土をみている。

池状遺構の第2期(第48図)は、S D86埋没後東側に作られたS D85に伴う段階であり、平安時代前期頃とみられる。池状遺構は、S D85とともに東側に中心が移動し、西側に張り出す弧状を呈している。埋土は褐灰色系の細粒砂が堆積し、須恵器・土師器が少なからず含まれている。

池状遺構の第3期は、S D85の埋没後の段階であり、平安時代中期～後期とみられる。池状遺構は土砂の堆積が進み、40cmほどの浅い窪地状を呈していたとみられる。黄白色砂(洪水砂)の厚い堆積があり、その後ほとんど完全に埋没したと判断される。

溝S D88 池状遺構の第3期もしくは埋没後に作られた素掘り溝である。S D86と池状遺構の結合部付近を斜めに横断し、方位は北から西に約30°振っている。南流する溝の幅は約2～2.3m・深さ約50cm前後を測る。池状遺構部分では第3期の洪水砂を溝底が大きく削り取っている。

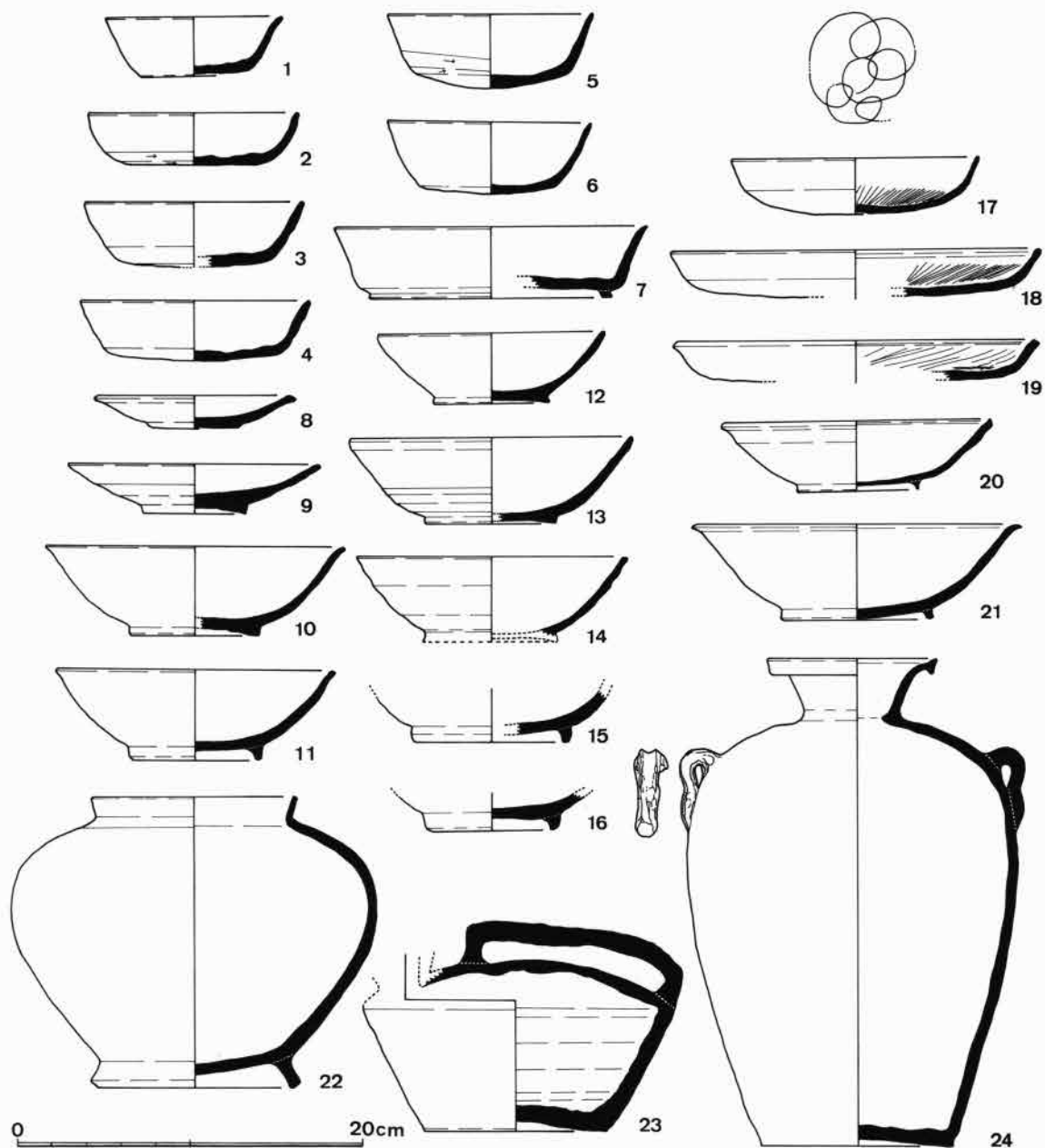
暗渠S X13(第44図) 池状遺構第1期に注ぎ込む暗渠排水施設である。暗渠の主軸は東から北に約7°振っている。暗渠は、広葉樹の幹の中ほどを縦割りして心部を取り除いた幹2本を使用する。暗渠の全長は約5.3mを測る。それぞれ直径約40cm・長さ3.9mと直径約50cm・長さ1.7mの幹部を使用し、結合部は30cmほど重ね合わせている。暗渠の施設手順は素掘りの溝を掘り、池状遺構に近い東側に長尺の暗渠を据え、さらに短尺の暗渠を西側に重ねた後、埋め戻していることが明らかとなった。また、暗渠の側面には暗渠の固定とみられる、直径約7cmの丸木も存在した。暗渠の西側の調査区壁面の観察では、西にのびる素掘り溝の痕跡が確認された。暗渠の西端下面の海拔高は約10.45m、東端部では10.38mであった。暗渠の内部には粒子の粗い砂の堆積が認められた。

## ②出土遺物

第2遺構面では、遺構に伴う出土遺物が多数を占めた。なかでも、溝S D86・池状遺構S X11から良好な土器の出土をみた。

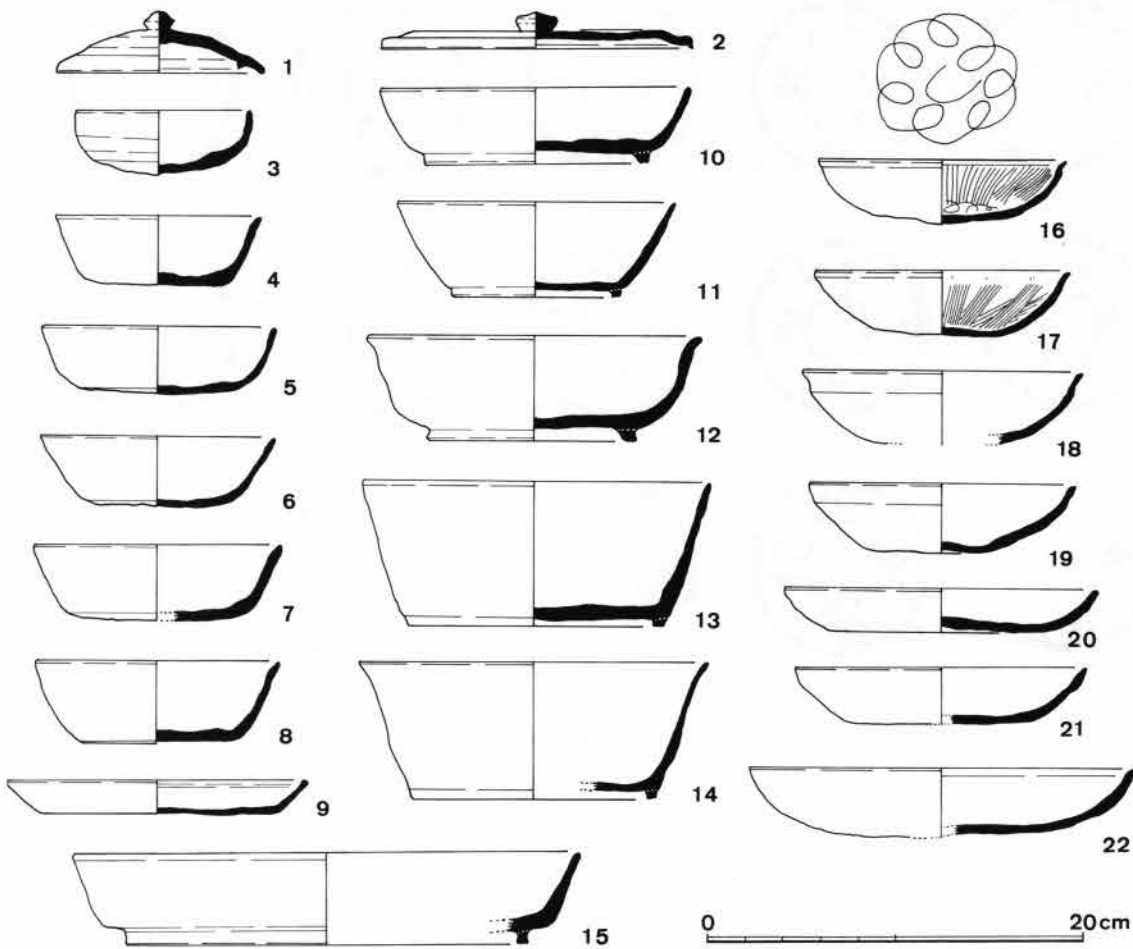
溝S D86 第45図1～6は須恵器の杯Aである。口径10.2～13.6cm・器高3.1～4.4cmを測る。1～3・6は溝底面出土であり、4・5は埋土上層からの出土である。7は、杯Bであり、溝底に近い暗灰色砂層中からの出土である。口縁端部は外方に尖りぎみにおさめる。貼り付け高台は





第45図 S D86出土遺物実測図

端部に近く、やや「ハ」字状を呈する。口径18.2cm・器高3.6cmを測る。8・9は、上層から出土した緑釉の皿である。8は、口径11.0cm・器高1.9cmを測り、底部は平高台である。9は、口径14.6cm・器高2.8cmを測り、底部は蛇の目高台である。10～16・21は、椀である。椀の中で、10・21は緑釉椀、15・16は灰釉椀、他は須恵器である。緑釉椀10は、口径17.2cm・器高5.3cmを測る。底部は蛇の目高台であり、口縁端部は外反し丸くおさめる。21の底部は、輪高台(貼り付け)である。口縁端部は、大きく外反し尖りぎみに終わる。口径19.2cm・器高5.6cmを測る。12～14は、須恵器の椀である。底部は平高台である。12は、口径13.2cm・器高4.2cmを測る。13は、口径16.3cm・器高5.0cmを測る。14は、口径15.5cmである。17～20は、土師器であり、杯17・20

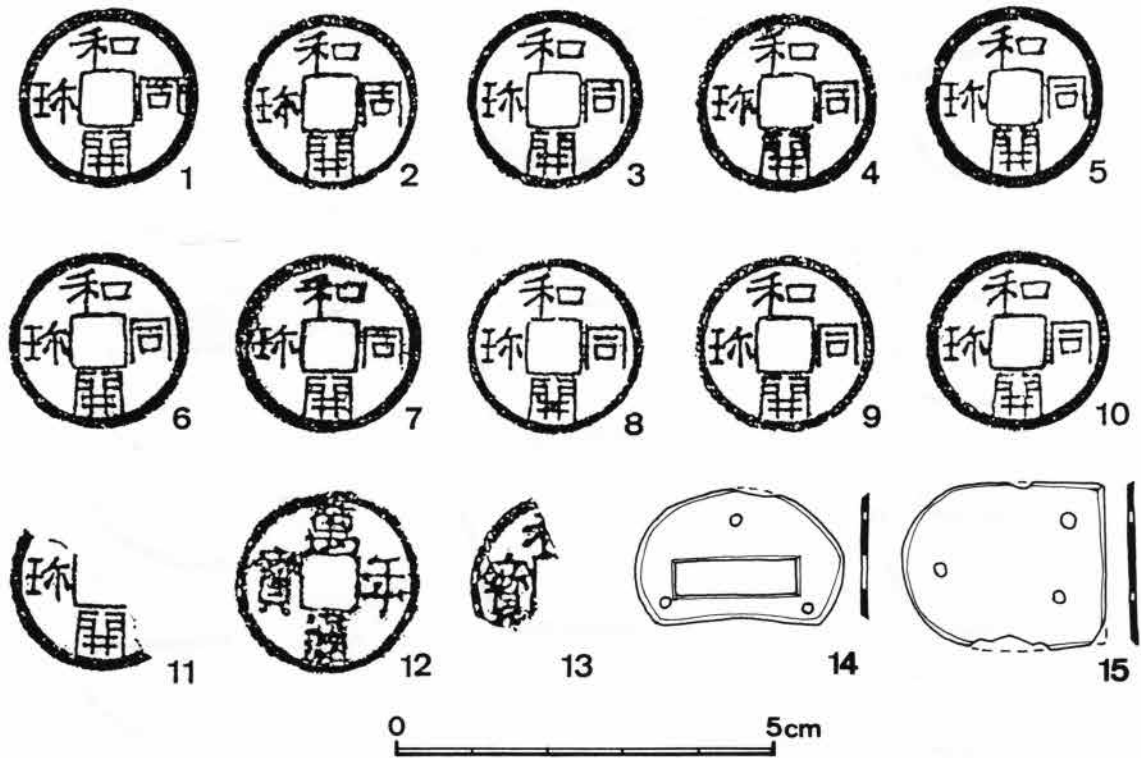


第46図 S X11出土遺物実測図

と皿18・19に分かれる。17～19の見込み部には暗文が施される。杯のうち、20では底部に貼り付けによる輪高台が付く。17は口径14.4cm・器高3.3cm、20は口径15.6cm・器高3.1cmを測る。皿では、18が口径23.5cm・器高2.8cm、19は口径20.8cm・器高2.5cmを測る。17～19は、溝底面の出土である。22は、須恵器の短頸壺である。球形に近い胴部であり、最大径は器高のやや上部にある。底部には「ハ」の字に開く輪高台が付く。口径12.1cm・器高16.9cmを測る。23は、須恵器の平瓶であり、溝の中層から出土した。肩部の張りが強く、大型の把手が付く。体部幅18.1cm・体部高9.9cmを測る。24は、溝の中層上面から出土した二耳壺である。ゆるやかな丸みをもつ肩部の2か所に耳が張り付けられる。口径9.8cm・器高28.5cmを測る。

第47図15は、溝底付近から出土した銅板製の蛇尾の裏板である。全長2.7cm×幅2.2cm×厚さ0.8mmを測る。先端部は丸く仕上げ、表面の周囲は斜めに面取りを行う。板面には止め穴が3か所に開けられている。

池状遺構 S X11(第46・47図) 第46図の1～15は須恵器、16～22は土師器である。図化した土器は底面及び下層中から出土したものである。1・2は、蓋である。1は、丸みをもつ天井部に小さな宝珠つまみが付き、内面の口縁端部付近にかえりを有する。口径10.8cm・器高3.3cmを測



第47図 S X11出土銅銭拓影・銅製袴帯

る。2は、ほぼ水平な天井部が端部で「Z」字状にカーブを描き、端部は下方に屈曲する。天井部中央に擬宝珠様のつまみを付す。口径16.5cm・器高1.9cmを測る。3は、1と同様に7世紀前半の杯身である。底部はヘラ切り未調整であり、やや丸みを帯びる。口径9.2cm・器高3.5cmを測る。4～8は、杯Aである。体部は外上方に直線的に立ち上がり、底部はヘラ切り未調整である。口径11～13cm・器高3.5～4.5cm程度である。9は、皿である。口径16.1cm・器高1.8cmを測る。10～14は、杯Bである。底面端部付近に貼り付けの輪高台が付く。口径と器高からみて、18.4cm×7.5cm、16.5～17.5cm×4.1～5.6cm、14.7cm×4.9cmの、大(13・14)・中(10・12)・小(11)に大別される。15は、高台を有する皿Bである。底部端のやや内側に貼り付けの輪高台をもつ。口径26.8cm・器高4.8cmを測る。16～19は、椀である。口径に対して器高が高く、底部から口縁部にかけて大きなカーブを描いて立ち上がる。内面調整では、16は暗文を施し、17ではハケメ調整する。口径は13.2～15.0cm、器高は3.5～3.9cmを測る。20～22は、皿である。口径は15.4～20.6cm、器高は2.3～3.7cmを測る。

第47図1～13は銅銭であり、うち1～11は和同開珎、12は万年通寶、13は神功開寶である。直径は2.8～2.9cmを測り、中央に一辺7mmの方形孔をもつ。14は、銅板製の丸鞆の裏板である。縦1.9cm×横2.8cm×厚さ1mmを測る。形状はカマボコ形を呈し、下端部に偏って1.7cm×0.4cmの方形窓を開ける。また、板面の3か所に止め穴を有する。

D. 第1遺構面b(平安時代)

第2遺構面から約20cm上で検出した第1遺構面のうち、平安時代に属する遺構を抽出した。第

1 遺構面の海拔は11.9m付近にあり、微高地面は北から南にゆるやかに下る。S D84の東部及び南東部は西側の微高地より約40cm低く、粒子の粗い砂(洪水砂)の堆積が認められた。S D84の東部ではこの洪水砂の下に粘性の強い還元微砂層が認められた。また、微砂層上面から牛の足跡を検出したことから、この微砂層が広がる低地部は水田であったと推測される。

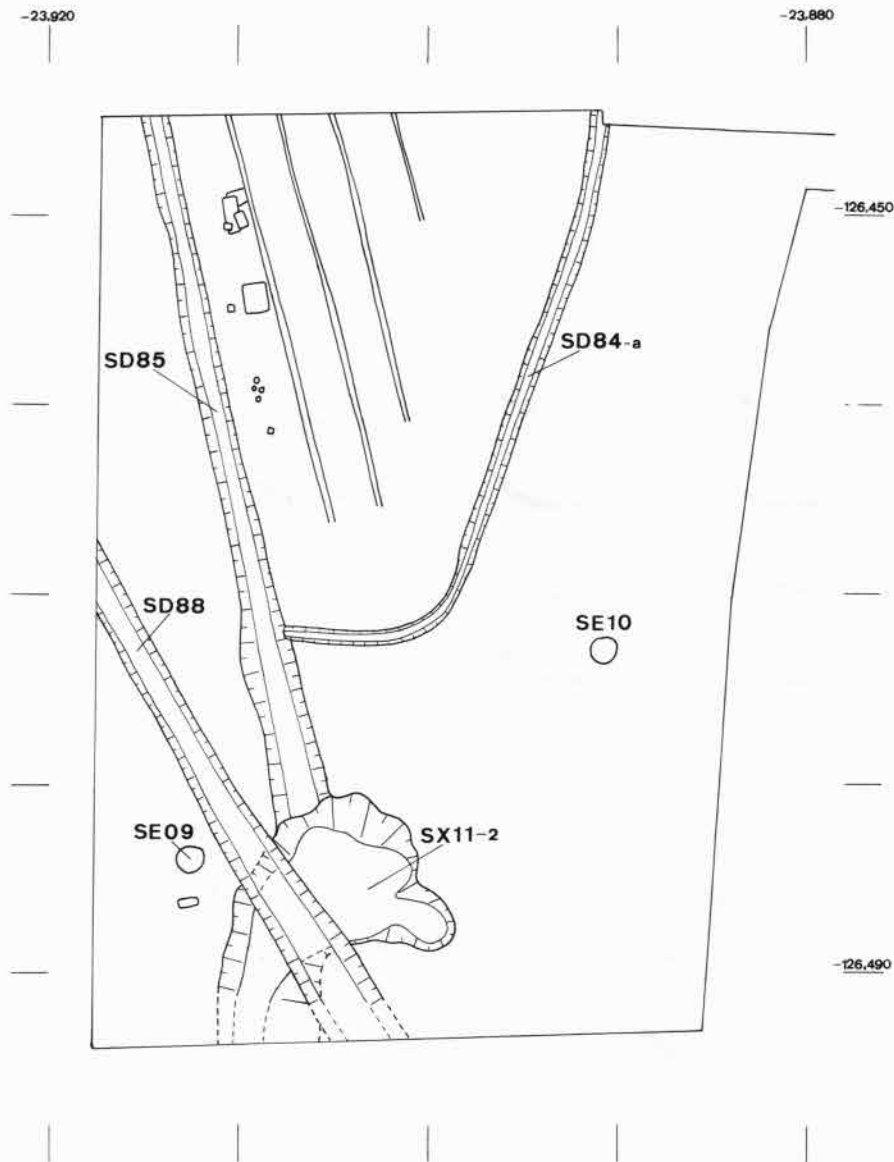
①検出遺構(第48図)

平安時代の遺構として素掘り溝・溝群・井戸跡・池状遺構・土坑を検出した。

**溝 S D84 a** 西部の微高地と東部の水田域とを分ける溝であり、微高地の東縁部を逆「L」字状に北流する。溝の西端(上流側)はS D85に取り付く。溝幅約1 m・水田面からの深さ約25cmを測る。溝内には黄色の砂が堆積していた。

**溝 S D85** 調査区西部で検出した幅1.6~2.8m×深さ約0.6mの南流する素掘り溝である。溝は直線的にのび、南端は池状遺構(S X11)に注ぎ込む。溝の方位は北から西に約12°振る。溝の埋土は3層に分かれ、中間層には黄白色の洪水砂の堆積が認められた。溝埋土に含まれた遺物はわずかであったが、洪水砂の上面から平安時代前期の須恵器の出土をみている。

**溝 S D88** 調査区西南端で検出した幅2~3.4m×深さ約0.5mの南流する素掘り溝である。直線的にのびる溝は南流し、方位は北から西に約30°振っている。溝は、池状遺構がほぼ



第48図 第1遺構面 b 平面図

埋まった段階で造られたことが、切り合い関係にある池状遺構の土層観察から判明している。

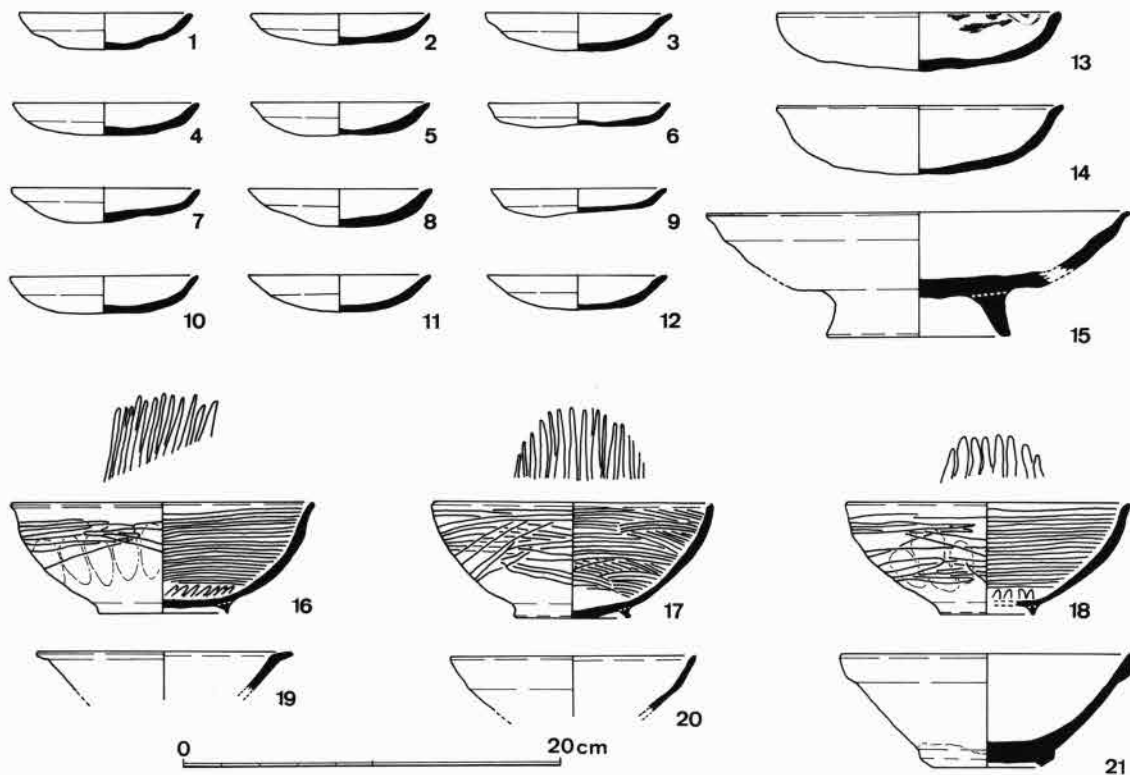
池状遺構 S X11 埋没が進行した第2期に属する段階である。第3遺構面の報告で記したためここでは割愛する。

井戸 S E 09 調査区西南部の微高地上で検出した井戸跡である。掘形は、円形で直径約1.2m・深さ約1.6mを測る。埋土の土層観察から、直径約90cmの円形を呈する木製井戸枠の存在が推測される。井戸内の土器の出土状況は一括性がなく、土師器・黒色土器の破片に混じって土師器皿・白磁碗が出土している。

井戸 S E 10 水田域と判断した低地部で検出した井戸跡である。掘形は円形で直径約0.8m・深さ約2.2mを測る。埋土の土層観察から直径約60cmの円形を呈する木製井戸枠の存在が推測される。井戸内には暗灰色の微砂とシルトが互層をなしている。出土遺物(第49図)として、底付近から瓦器碗18が出土した。また、底から土砂が約20cm堆積した段階で、一括性のある土師器皿10~11、瓦器碗16・17、曲物の底板、網代籠が出土した。さらに、底から約1.5m埋まった段階で、一括性のある土師器皿3~9・13・14、足高高台杯15、白磁碗21が、人頭大の河原石とともに集中して出土している。このような遺物の出土状況は、井戸の埋没過程で最低2回の祭祀が行われたと判断される。

②出土遺物

井戸 S E 09(第49図) 1・2は、小型の土師器皿である。オサエとナデによって仕上げる。口径は9.2~9.5cm・器高は1.6~1.9cmである。19・20は、白磁碗である。器壁はともに薄く仕上げ



第49図 S E 09・10出土遺物実測図

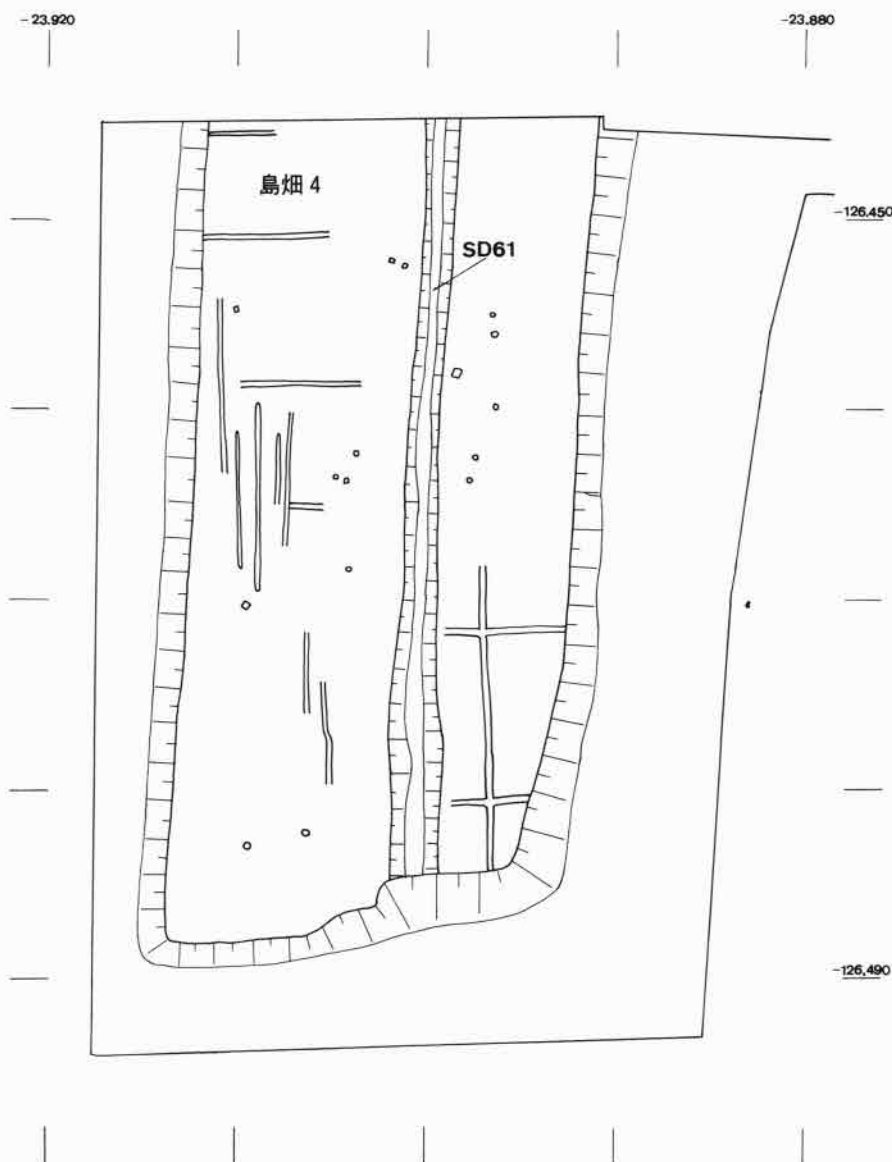
られ、口縁端部は強く外反するもの(19)と内湾するもの(20)に分かれる。底部を欠くが、口径は19が13.6cm、20が13.6cmを測る。

井戸SE10(第49図) 3~12は、小型の土師器皿である。オサエとナデによって仕上げる。口径は9.3~10.1cm、器高は1.3~2.1cmである。13・14は、大型の土師器皿である。口径はともに15cmであり、器高は、3.1cmと3.8cmを測る。13は燈明皿であり、口縁端部の内面の一部に油煙の痕跡が認められる。15は、「ハ」の字に開く高さをもった高台が付く杯である。縁部は、底部からゆるやかなカーブをもって外方に立ち上がる。口縁端部は、外反して丸く終わる。口径22.4cm・器高6.5cmを測る。16~18は、瓦器碗である。深みのある碗の口縁部は、端部が外反するもの(16・18)と、真っ直ぐ終わるもの(17)に分かれる。17では、口縁端部の内側に小さな段をもつ。底部には断面が三角形の高台を有する。内外面には暗文が施される。口径は14.7~16.0cm、器高は6cm前後を測る。21は、白磁碗である。器壁は薄く、内湾して立ち上がる口縁端部は肥厚させた玉縁が付

く。削り出しによる高台は、逆台形を呈する。高台部については無施釉である。口径は15.4cm、器高は6.2cmを測る。

**E. 第1遺構面 a (鎌倉時代)**

第1遺構面 b と同一面で検出した遺構のうち、鎌倉時代に属するものを抽出した。この遺構面では鳥畑を検出するとともに、鳥畑上から小柱穴・溝・耕作に伴う溝群を検出した。



第50図 第1遺構面 a 平面図

①検出遺構(第50図)

島畑 4 調査区中央部で検出した南北に長い島畑である。島畑の北側は調査地外にのびるが、東西約20m×南北約44m分を検出した。島畑の西側と南側は、東側の後背湿地に合わせる形で微高地を幅広く掘り下げていることから、島畑の周囲で水田耕作が行われたとみられる。西側低地と島畑の比高差は約60cmを測る。水田と判断した低地部には牛の足跡が多数認められたほか、瓦器・土師器など13世紀後半の遺物が出土している。

溝 S D 61 島畑の中央付近を南流する幅約1.8m・深さ約60cmの南北溝である。溝埋土には砂が厚く堆積している。溝内から土師器などの遺物が少量出土している。

溝群 島畑上で検出した幅30cm前後の浅い溝である。溝は、ほぼ東西南北の方向をとり、島畑南東部では方形区画を意識した配置状況にある。この溝で区画された規模は南北約9mである。この溝群は、耕作に伴うものと判断される。

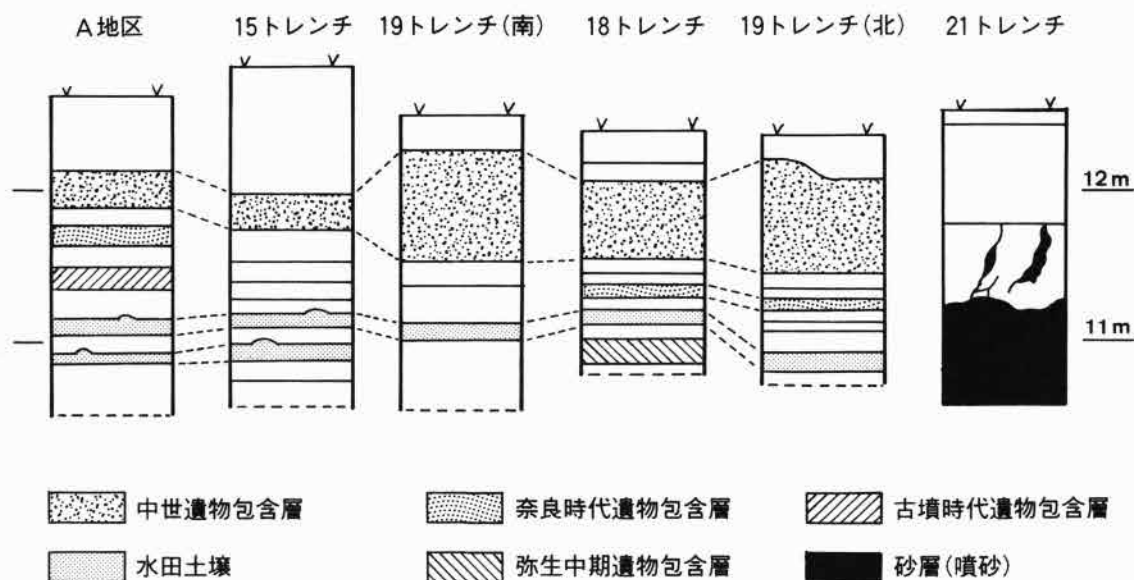
(竹原一彦)

(2)試掘調査トレンチ

内里八丁遺跡の試掘調査は、昭和63年度に南部地域で12か所に試掘トレンチを設け、遺跡範囲の確認を行っている。今回は、北部地域における遺跡範囲確認を目的として8か所にトレンチを設ける計画であったが、建物移転・用地買収などの関係から、7か所での試掘調査となった。調査トレンチは、南から順に第14～19・21の番号を与えた。

調査概要(第34・51図)

第14トレンチ 全長約26m×幅約3～4mの東西方向トレンチである。同トレンチでは黄色系の砂質土が厚く堆積することから、D1地区などで確認された微高地が北にのびる状況が確認できた。海拔約11.7m(地表下約80cm)付近で方形掘形をもつ柱穴2か所を検出した。掘形の一边は



第51図 試掘トレンチ土層断面図

約50cmを測る。柱穴は、東西方向に約3mの間隔で検出した。出土遺物がないことから時期は不明であるが、奈良～平安時代に属する柱穴と推測される。

**第15トレンチ** 全長約50m×幅約4～5mの東西方向トレンチである。黄色系の砂質土が厚く堆積する状況にある。海拔11mと11.2m付近に水田土壌とみられる暗灰色粘質土層が存在する。土層観察の結果、畦畔様の高まりが見られたことから、A地区などで検出された水田跡がこの地域にも広がっていた可能性が高い。さらに、海拔約11.4m付近にも遺構面が確認され、トレンチ東端近くから南北方向溝(やや西に振る)を検出した。海拔11.8～12m付近には中世遺物包含層が認められ、D1地区で検出した溝群を検出した。また、トレンチの東西両端と中央部には地表付近にまで還元土壌が認められることから、中世～現在に続く島畑(南北方向)を確認した。包含層中から須恵器・土師器・陶磁器の破片が少量出土している。

**第16トレンチ** 全長約22m×幅約3mの東西方向トレンチである。第14・15トレンチ同様、微高地を形成する黄色系の砂質土が厚く堆積している。海拔11.2m付近で水田土壌とみられる暗灰色粘質土層が存在する。また、海拔11.8m付近には中世遺物包含層が認められ、南北方向の溝群を検出した。出土遺物には土師器の小破片が数点出土したのみである。

**第17トレンチ** 全長約16m×幅約2.5mの東西方向トレンチである。トレンチは、第19トレンチと接している。海拔11.7m付近(地表下約70cm)に中世遺物包含層が認められた。同トレンチの土層は、還元土壌が厚く堆積しており、島畑の低地部に相当するとみられる。

**第18トレンチ** 全長約31m×幅約3～5mの東西方向トレンチである。トレンチは、第19トレンチと接している。微高地を形成する黄色系の砂質土が厚く堆積する。海拔約10.8～11m付近には黄褐色粘質砂層が存在し、弥生時代中期とみられる甕の小破片が出土している。海拔約11.2m付近には、水田土壌とみられる黄褐色粘質微砂(暗色)層が存在した。海拔約11.3～11.5m付近には、奈良時代の須恵器を中心とする包含層が存在したが、同時期の遺構は確認できていない。包含層上面では、中世以降とみられる柱穴(円形・方形掘形)を多数検出している。

**第19トレンチ** 全長約80m×幅約5mの南北方向トレンチである。中央部の西側に第18トレンチ、南端部西側に第17トレンチが取り付く。18トレンチのある中央部では、東西方向の島畑(幅約18m)が存在する。島畑以外のトレンチの大部分は還元土壌の広がりであり、低湿地様の状況を呈している。島畑部分では中世とみられる柱穴・土坑を検出している。

**第21トレンチ** 調査対象地の北端に位置する。全長約50m×幅約2mのトレンチである。海拔約11.2m(地表下約1.4m)以下には黄灰色粗砂が厚く堆積し、上部に約60cmの厚みをもつ青灰色系微砂・シルト層の堆積が認められた。トレンチ断面の観察では、この微砂・シルト層中を下層の粗砂が噴き上がる「噴砂」の痕跡を確認することができた。この噴砂は、北東に近接する上津屋遺跡調査でも確認されている現象である。遺構の検出や遺物の出土もないこと、また、厚い粗砂の堆積状況からみて、この地点は内里八丁遺跡外と判断された。



### 3. まとめ

平成6年度の内里八丁遺跡の調査では、部分的ではあるが、遺構・遺物の集中する遺跡範囲をほぼ確認する成果を得た。また、面的に掘り下げを行ったD1地区の調査では、集落の東限となる微高地(自然堤防)の東縁ラインを確認するとともに、古墳時代初頭～中世にかけての集落の変遷過程の一端を明らかにする成果を得られた。

**試掘調査** 集落の存在する微高地が第14～18トレンチにまで広がることが確認できた。微高地は、13世紀後半以降に始まる島畑によって寸断されているが、島畑部分には遺構が遺存している可能性が高い。調査によって出土した遺物はわずかであったが、なかでも第18トレンチでは包含層中から奈良時代の須恵器が集中して出土している。特に、第18トレンチで検出した島畑の下層から、弥生時代中期にさかのぼる土器が出土したことは、奈良時代とともに弥生時代の遺構がこの地に存在する可能性を高めている。一方、第19トレンチでは多くの範囲が湿地状の堆積状況を示しており、トレンチの東側はほどなくして遺跡外に位置すると推測される。また、第21トレンチは旧河川部(木津川)とみられることから、調査範囲内の遺跡の北限は、第18トレンチの北側付近と推測される。第14～16トレンチでは微高地部から奈良～平安時代とみられる柱穴を検出したが、遺構・遺物の分布がわずかであることから、集落域の東縁部に位置していると判断される。また、第14～18トレンチの下層では断面観察によって弥生時代末～古墳時代初頭とみられる水田土壌を確認した。面的調査を行えば、水田跡が検出される可能性が高い。

**D1地区調査** 平成6年度の調査では、集落の立地する微高地の東縁を確認するとともに、古墳時代前期・中期、奈良時代末～平安時代、中世の内里八丁遺跡の様相をうかがえる調査成果を得ることができた。

**古墳時代** D1地区の東側は、古墳時代初頭～後期の間、沼状を呈する湿潤な地であったことが、今回の調査によって明らかとなった。A・B地区で検出した古墳時代初頭頃の洪水で埋没し放棄された水田跡は、この沼地の水を利用していただと判断される。また、調査地の南端で検出した東西溝(SD90)は部分的な検出に終わったが、西に広がる水田跡の主要な灌漑水路の可能性が高い。微高地上では水田跡と同時期の竪穴式住居跡を多数検出することができた。住居跡は北と南の2群に分かれ、南の一群は竪穴式住居跡4基(SH07～10)で構成されている。北群では、現在のところ竪穴式住居跡(SH11)と総柱建物跡(SB22)が確認されている。北群については、今後のD2地区調査でさらに竪穴式住居跡が検出される可能性がある。住居跡内の土器から、およそ庄内期中頃の集落跡と考えられる。また、第3遺構面で検出した竪穴式住居跡は、古墳時代中期末の住居跡である。B地区調査では、同時期の竪穴式住居跡1基(半壊)を検出していたが、今回のD1地区調査で初めて良好な遺構・遺物の検出ができた。

**奈良～平安時代** 今回の調査地ではB地区に見られた建物遺構は存在しなかったが、奈良時代末の大型素掘り溝・池状遺構・暗渠を検出するとともに、多くの良好な遺物の出土をみた。

溝SD86・池状遺構SX11・暗渠SX13は、有機的に関連する遺構である。SD86は、過去の調査で検出した南北溝と異なり、南流する溝という特殊性のある溝である。溝底には砂の堆積が

認められたことから、ある程度の水流があったとみられる。検出範囲がわずかであり、今後の調査で性格が明らかになると思われるが、現時点では西のB地区検出の建物跡群を画する溝と判断する。SX11は、小規模ながら深さのある池状遺構であり、溝SD86及び暗渠SX13の水を溜めたものと判断される。ただ、不定形な形状・溝下の水の落下による底面の窪みなどから、常に満水状況にはなかったとみられる。暗渠は、建物跡群の存在した西のB地区からの排水施設であり、何らかの制約を受けたために築かれたものである。制約の要件として、垣・通路(道路)などの可能性が高いが、現時点では判断しきれない。

出土遺物として、SD86とSX11から奈良時代末の遺物の出土をみている。獣骨・ミニチュア竈・土馬などの遺物の存在は、何らかの祭祀がこの遺構の近辺で行われたことを示す資料である。また、和同開珎に代表される銅銭13枚・銚子の集中出土も祭祀関連遺物と判断される。なお、和同開珎11枚が1遺構から出土した事例は、銭鑄造遺跡・備蓄銭を除くと、京都府内では最多例となっている。

**中世** 古墳時代前期～平安時代まで存続した内里八丁遺跡集落も、ほぼ12世紀でその終焉を迎えている。平安時代の中頃には微高地の東部で畑作が行われたとみられ、方位に対して斜向する耕作関連の溝群が存在する。その後、13世紀後半には微高地の大部分が耕地化し、B・D1地区では条里に沿った島畑が造られる。微高地上の島畑の断面観察では、島畑は、周囲を掘り下げることによって中央部を島畑化している。島畑の周囲は水田とみられ、洪水砂層の堆積状況から、何度か大規模な洪水を受けたことが明らかである。ただ、島畑部分には洪水砂の堆積が認められず、位置・規模・形状に大きな変化が観察できないことから、洪水復旧(水田回復)に伴う島畑の形成は、この地ではみることができない。

平成6年度の調査では、過去6次にわたる調査で明確でなかった時期の遺構を検出するとともに、多くの遺物の出土をみている。内里八丁遺跡の性格を考える上で多くの成果を得ることができた反面、新たな問題提起を受ける結果にもなった。内里八丁遺跡の調査は、調査対象地の約半分の面積を終えた段階にあり、今後の調査に期待が寄せられる。

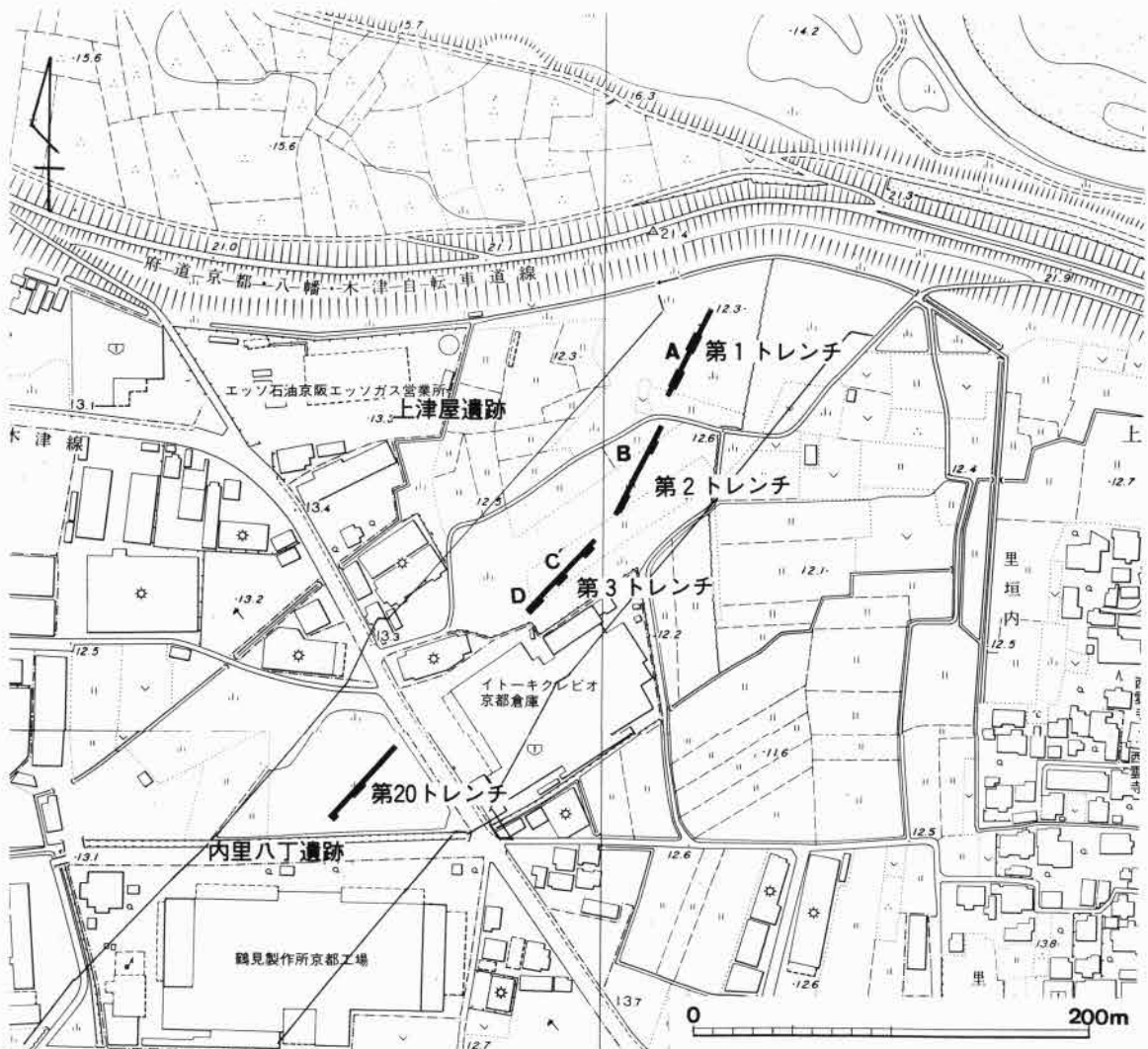
(竹原一彦)

(2) 上津屋遺跡

1. はじめに

上津屋遺跡は、八幡市上津屋に所在する遺跡である。この遺跡は『八幡市遺跡地図』によると、現木津川の左岸の微高地を中心に、東西1,250m×南北800mの広がりを持ち、土師器・須恵器などが表面採集されている。

調査地は、遺跡推定範囲の中央に位置し、北に現河道、西に現集落の立地する微高地を残す沖積低地にあたる。この付近は、現在水田及び島畑などの耕作地として利用されており、また、その地割りは、条里型の地割りを呈しておらず、旧河道及び旧氾濫原の存在が推定されるところである。<sup>(注3)</sup> 調査面積は、約450m<sup>2</sup>である。調査期間は、平成6年5月13日から同年5月24日にかけて実施した。



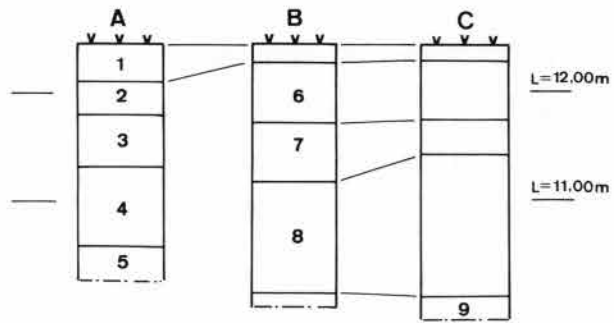
第52図 トレンチ配置図

2. 調査概要

調査は、まず今回の調査対象地の遺構・遺物の分布状況を見るため、北東から南西方向に長方形のトレンチ(幅約3m・長さ約150m)を3本直線状に設定した。その後重機による掘削と人力による掘削及び精査を行い、遺構・遺物の検出につとめた。さらに、層位を把握するため、一部を深く断ち割った。

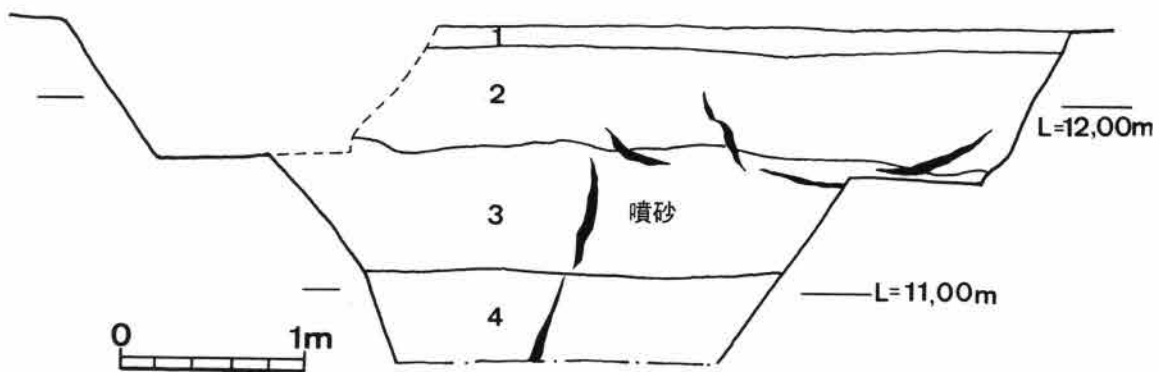
各トレンチの基本層序は、第53図のとおりである。第1トレンチでは、現耕作土下にやや厚い砂層(第2層)がみられ、比較的新しい時期の洪水層と思われる。第2・3トレンチでは、厚い暗青灰色の堆積層(第7・8層)がみられる。基質は、シルト質砂からなるが、細砂や微細砂などが不均質に混じる。ただ、ラミナなどは見られず、流水的な傾向の強い堆積層とは思われない。

各トレンチでは、遺構・遺物は見られなかったが、第3トレンチの南端(D地点)では、一部の断面で砂層の直線状ののびを確認した。この砂層ののびは、幅5cm程度で、1m以上ある。これは、土層の状況から判断して、第4層下の砂層が隆起したものと考えられる。平面的にも第4層上面で、砂層のつまった数条のレンズ状の筋を検出した<sup>(注4)</sup>。さらに、今回の内里八丁遺跡試掘調査の第20トレンチでは、この第2・3トレンチと同じ層相を呈しており、そこでも液状化現象に伴う砂層の隆起現象を確認しており、この状況を裏付けるものであろう<sup>(注5)</sup>。



第53図 土層柱状図(第1～3トレンチ)

1. 現代耕作土
2. 淡黄灰色砂質土(中砂～粗砂)
3. 暗灰色砂質土(微細砂)
4. 暗灰色砂質土  
(細砂・シルトがブロック状に混じる)
5. 暗灰色砂質土(細砂～微細砂)
6. 灰褐色砂質土(中砂～細砂・鉄分を含む)
7. 青灰色～暗青灰色土(微細砂～細砂)
8. 青灰色～暗青灰色土(シルト～微細砂)
9. 灰色砂質土(中砂～細砂)



### 3. まとめ

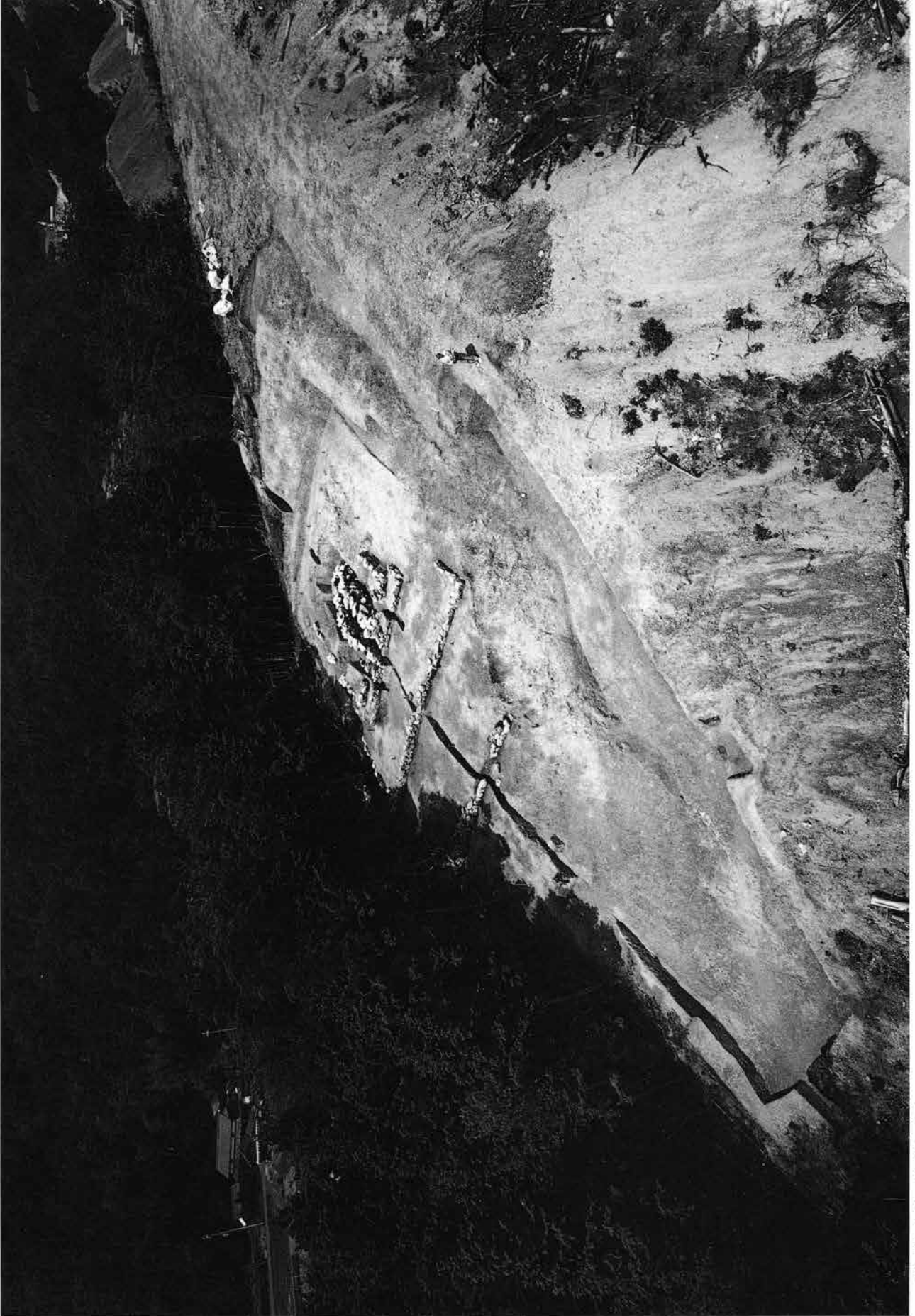
今回の試掘調査では、遺構・遺物を検出することはなく、沼地状を呈していたと思われる堆積層を確認したにとどまった。ただ、第3トレンチで検出した噴砂については、遺物が出土していないため、時期を決めることはできない。この噴砂については、木津川河床遺跡や内里八丁遺跡でも確認されており、今後の検討材料となろう。

(岸岡貴英)

- 注1 三好博喜・荒川 史「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990、荒川 史・竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991、竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992、竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要 (1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993、筒井崇史「京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要 (1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994、竹原一彦「京都南道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要 (1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注2 中前幸子、前田暁宏、小谷哲也、伊藤こず江、山内基弘、坂東哲弥、真弓拓也、永澤拓志、有働一哉、高島明日香、広瀬純子、菅谷友一、永濱寛子、吉田 幸、中村幸子、前田 穰、山端紀明、谷本和歌子、与十田麗子、兼田詩織、上田真一郎、吉永直子、市原信幸、浦島華代、石津孝朗、横山明生、長谷川 洋、丸谷はま子、西川悦子、西村香代子、栃木道代、与十田節子、福田玲子、森田千代子、奥平廣子、平井真由美、辻井和子、藤井矢壽子
- 注3 木津川下流域の地形分類については、中塚氏の論考に詳しい。  
中塚 良「木津川下流域の表層地質と遺跡立地—八幡木津川河床遺跡・新田遺跡を例に一」(『京都考古』第33号 京都考古刊行会) 1984
- 注4 この砂層ののびについては、榊井豊成氏、竹中友里代氏に御教示を得た。
- 注5 この噴砂については、寒川 旭氏から多くの御教示を得た。

# 圖 版





調査地全景（南東から）



図版第2 山尾古墳



(1)調査地遠景（南から）



(2)調査地近景（北から）



(1)墳丘全景（南から）



(2)石室開口部検出状況（南西から）

図版第4 山尾古墳



(1)墳丘全景（南西から）



(2)墳丘全景（南東から）



(1)墳丘北東隅排水溝検出状況



(2)テラス状遺構列石検出状況 (南西から)



(3)第一列石南西コーナー (南西から)



(4)第二列石南西コーナー (南東から)



(5)墳丘西側断ち割り (西から)



(6)テラス状遺構下段中央断ち割り (南東から)



(1)天井石検出状況（北から）



(2)礎床検出状況（南から）



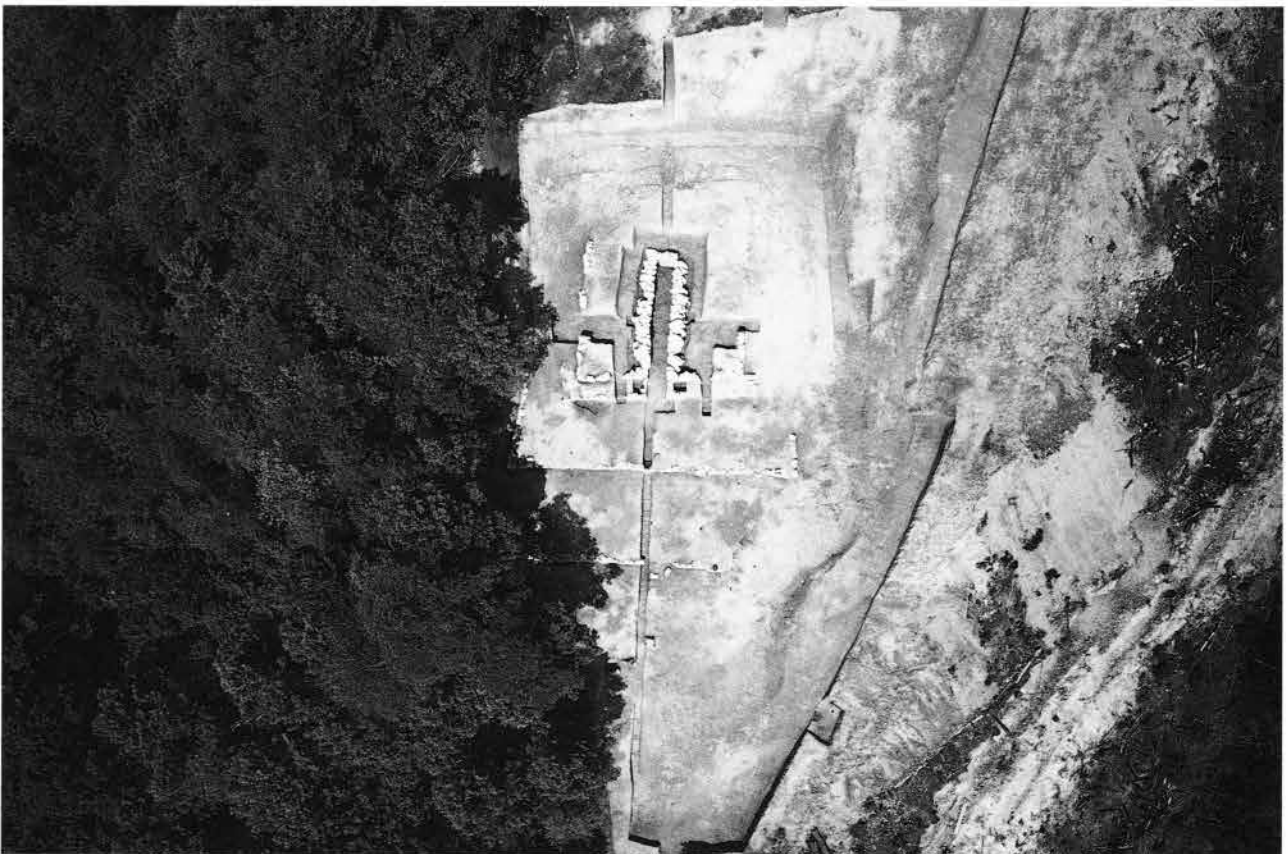
(1)遺物出土状況（南から）



(2)遺物出土状況（石材除去後）



(1)山尾古墳完掘状況（南から）



(2)完掘後調査地全景（真上から）

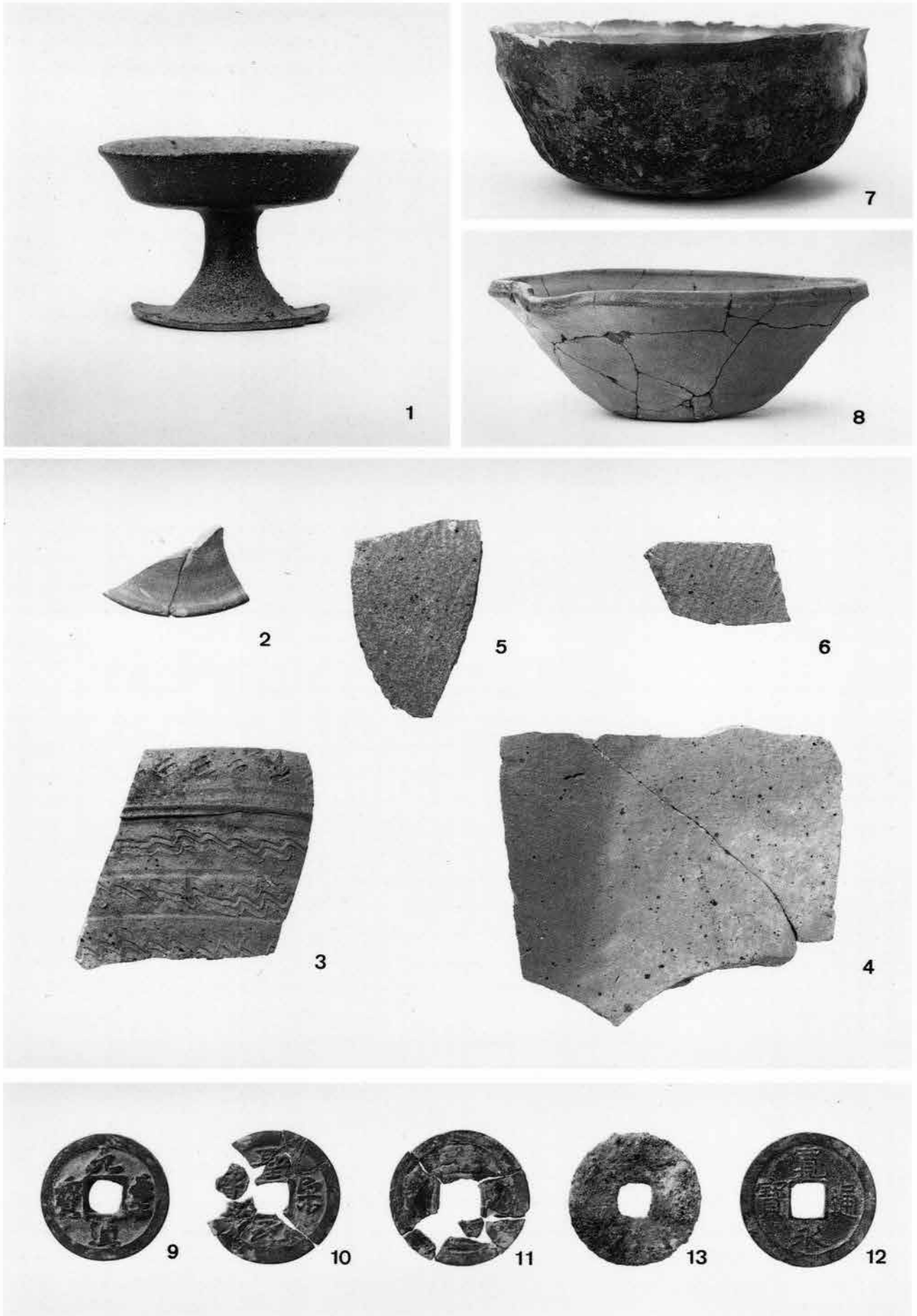


(1)中世土壇検出状況



(2)銭貨出土状況





出土遺物（須恵器・瓦質土器・銭貨）

（番号は実測図番号と同じ）



(1)龍尾寺跡調査前風景（西から）



(2)龍尾寺跡トレンチ南壁土層断面（北から）



(1)西飼神社遺跡調査前風景（北から）



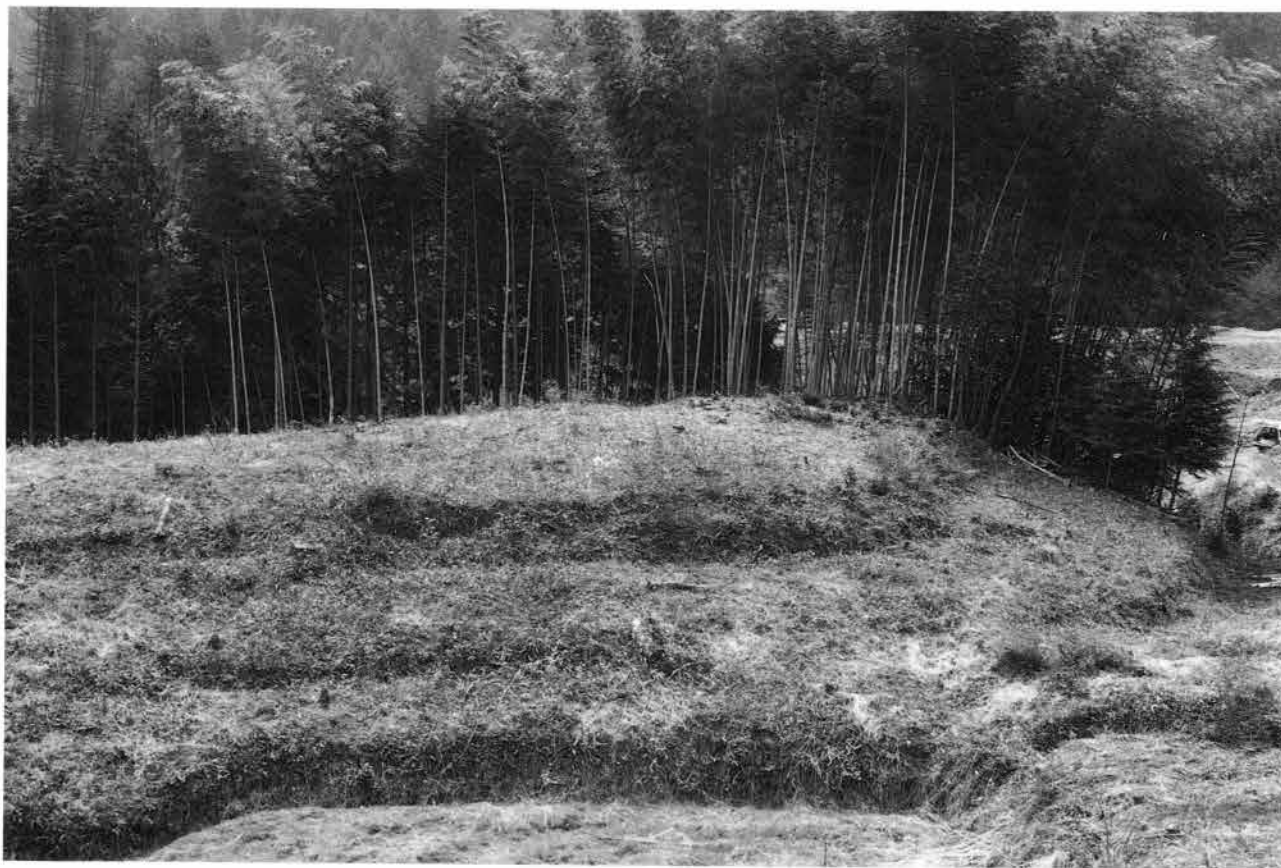
(2)西飼神社遺跡トレンチ全景（南から）



(1)洞中古墳調査前風景（北から）



(2)洞中古墳全景（西から）



(1)洞中近世墓調査前風景（北から）



(2)洞中近世墓全景（東から）



(1)洞中近世墓近景(東から)



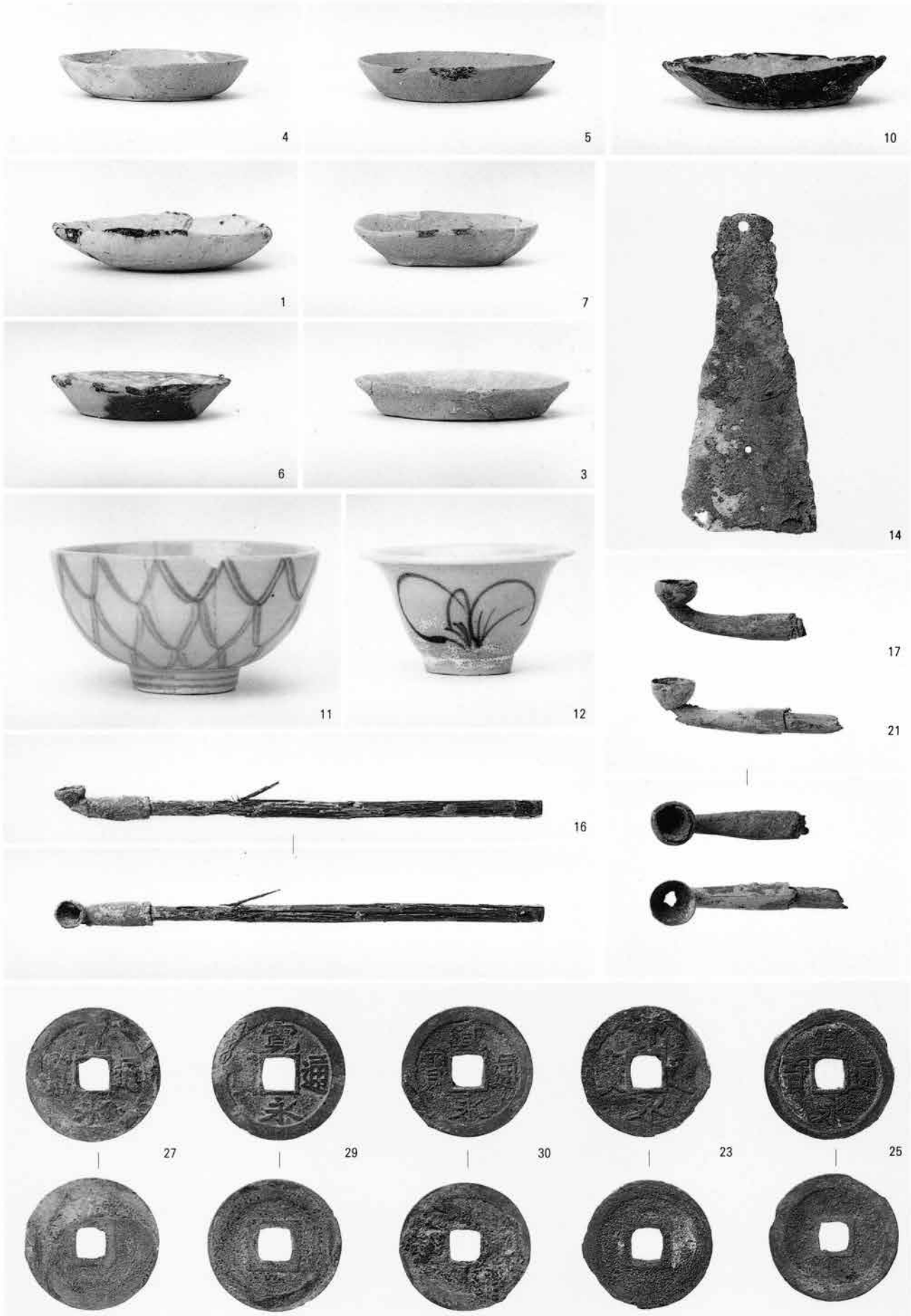
(2)洞中近世墓SK05遺物出土状況(西から)



(1)洞中近世墓S K 0 3 遺物出土状況 (西から)



(2)洞中近世墓S K 0 5 遺物出土状況



洞中近世墓出土遺物

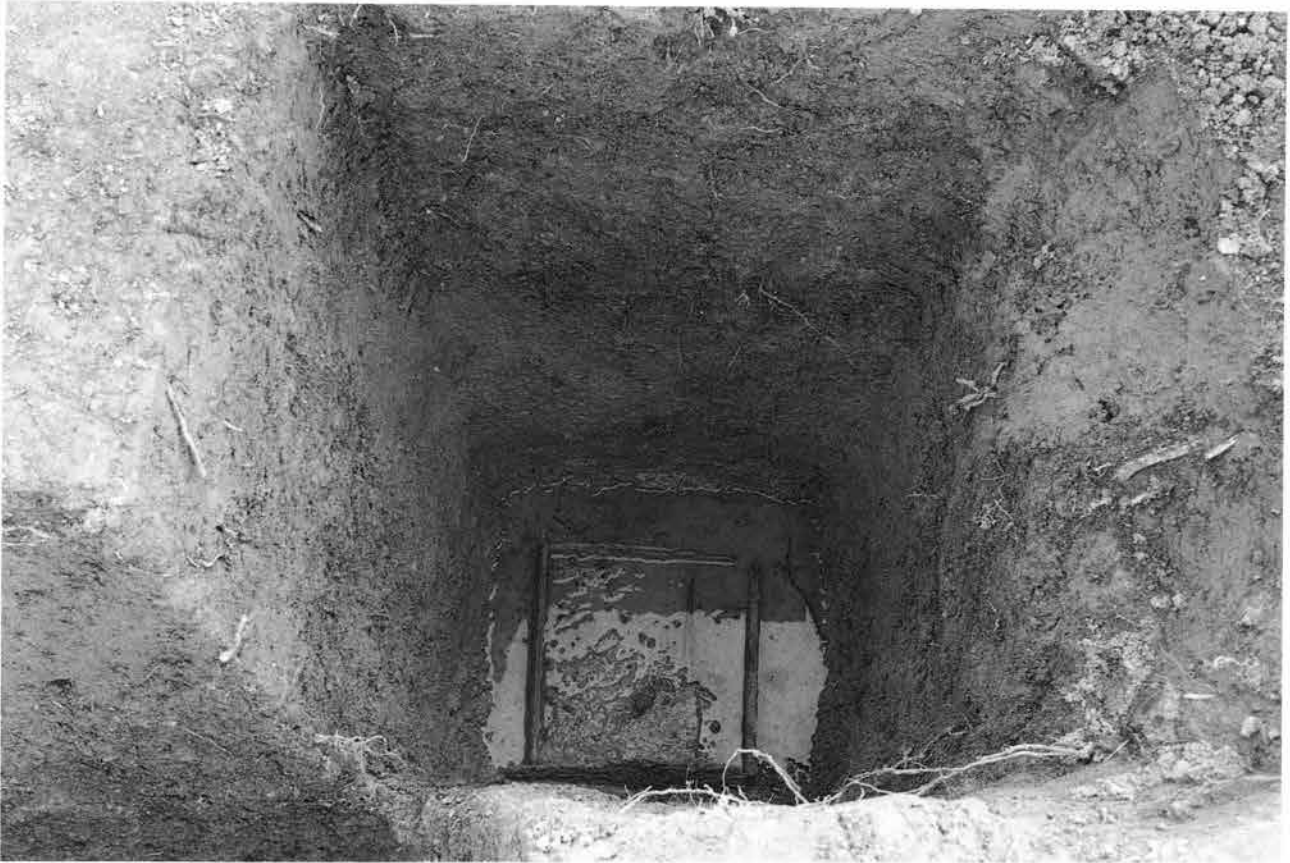




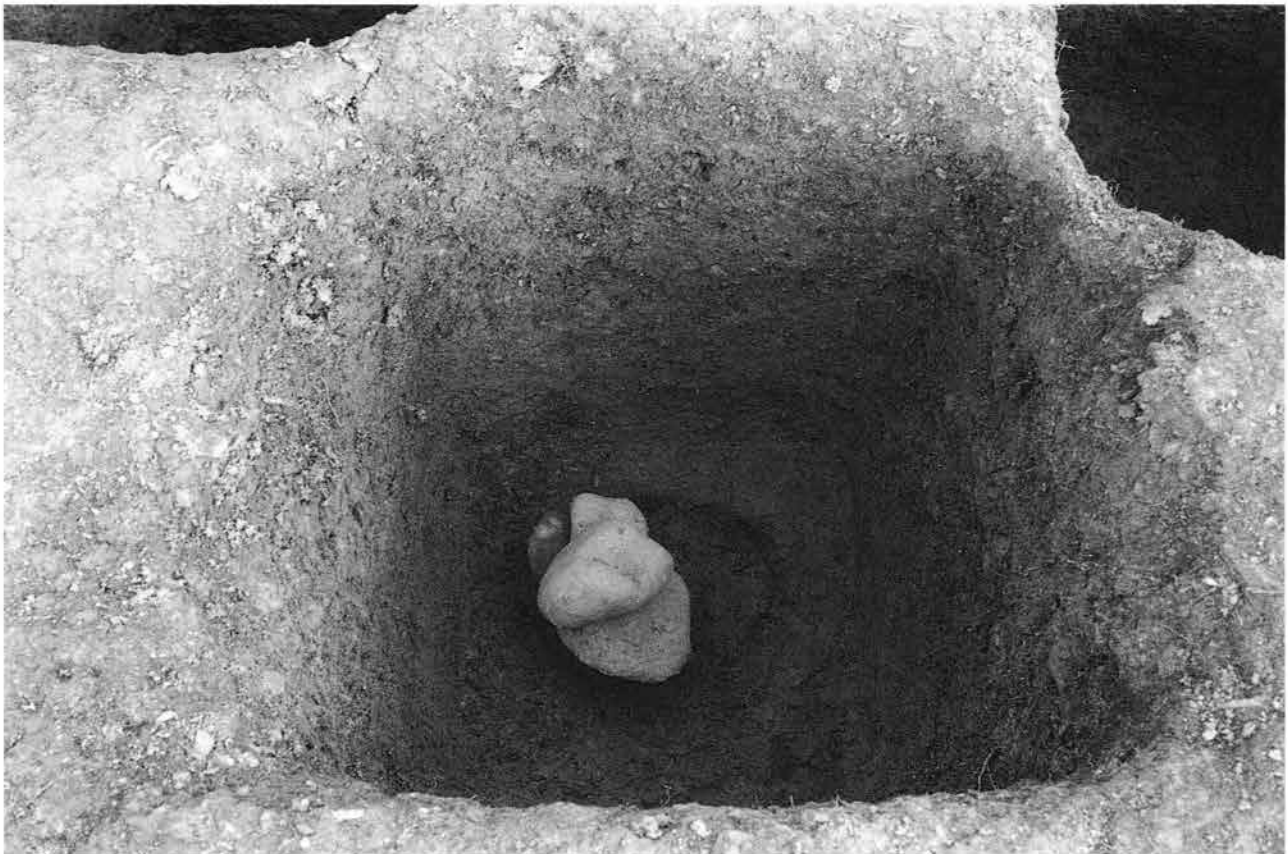
(1)大俣城跡B地区調査前風景



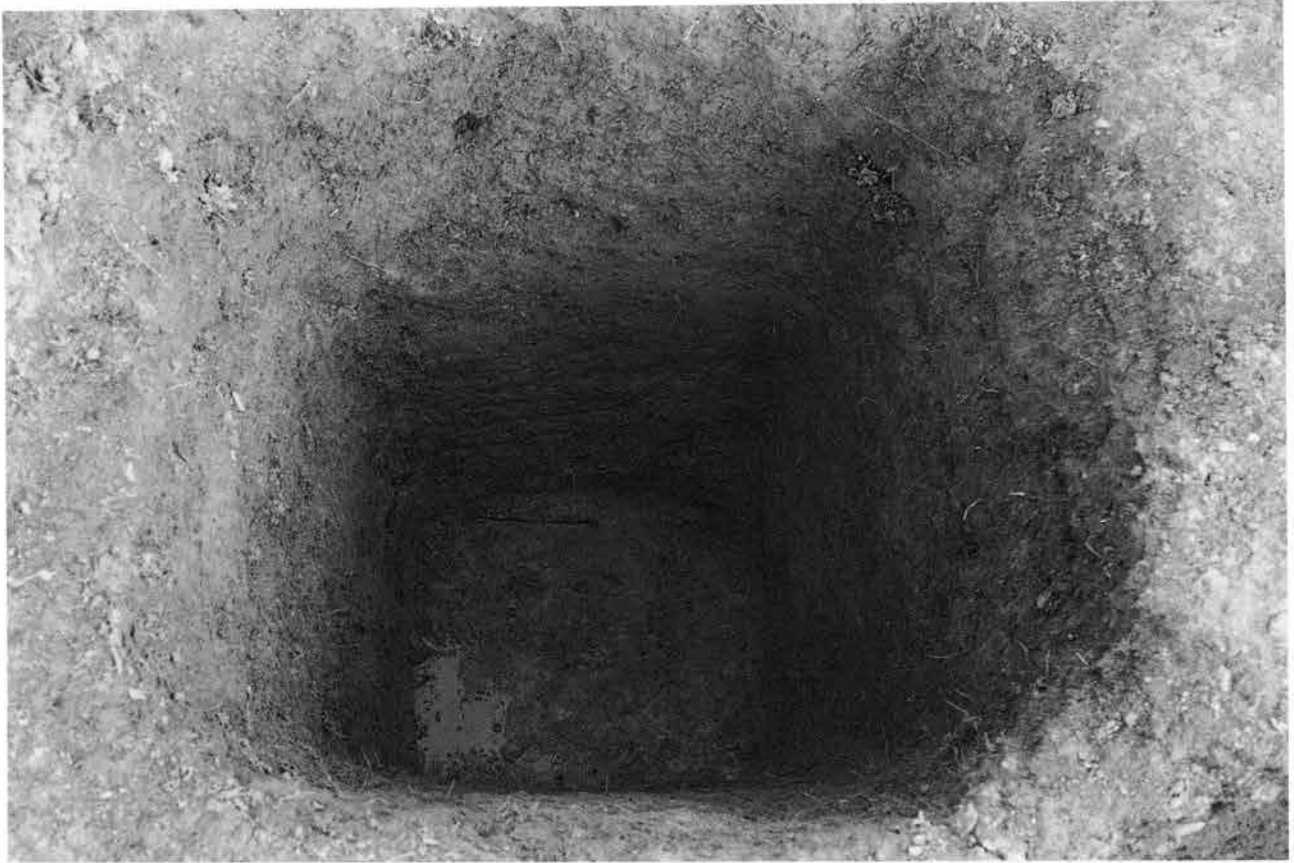
(2)大俣城跡B地区全景



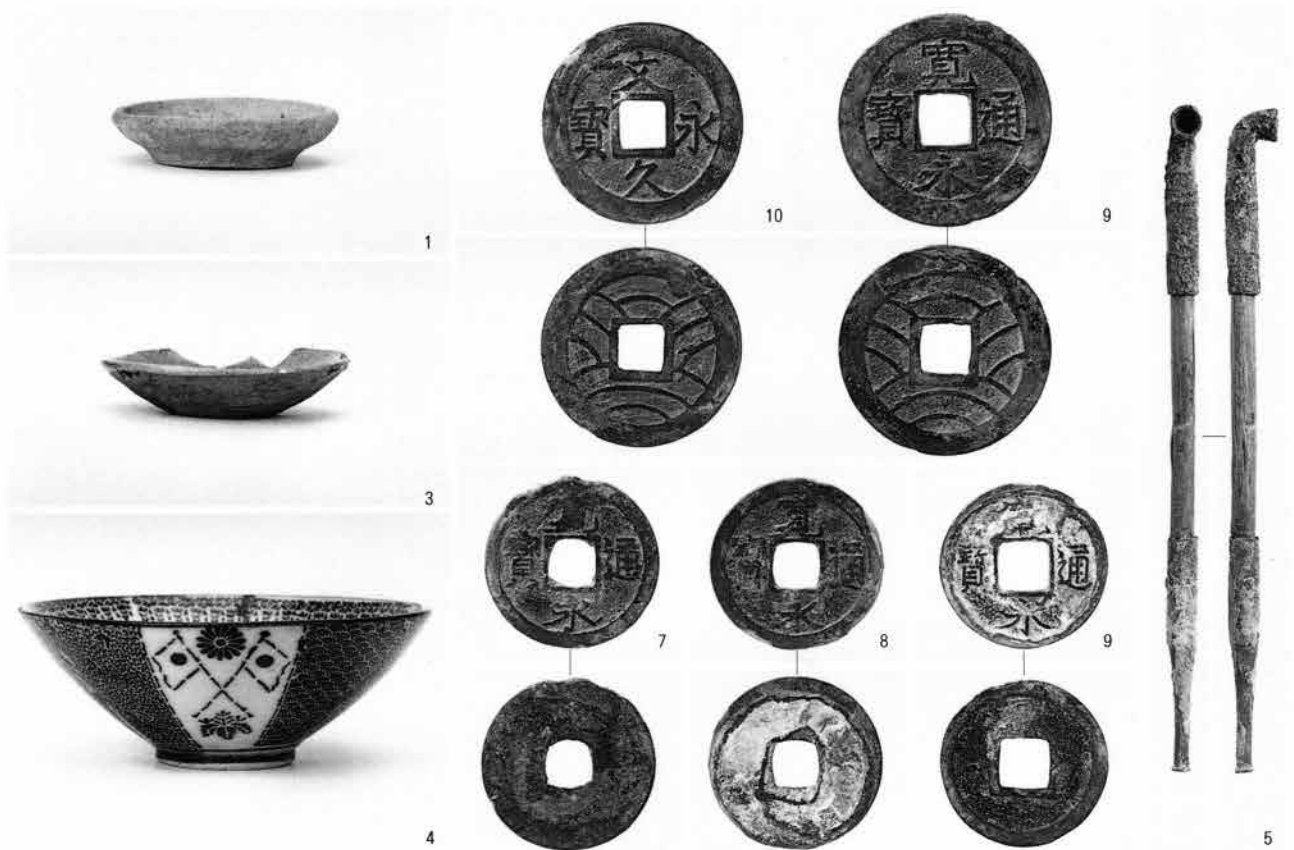
(1)大俣城跡B地区SK09完掘状況



(2)大俣城跡B地区SK12完掘状況



(1)大俣城跡B地区SK14遺物出土状況



(2)大俣城跡B地区出土遺物



(1)大俣城跡C地区調査前風景（北から）



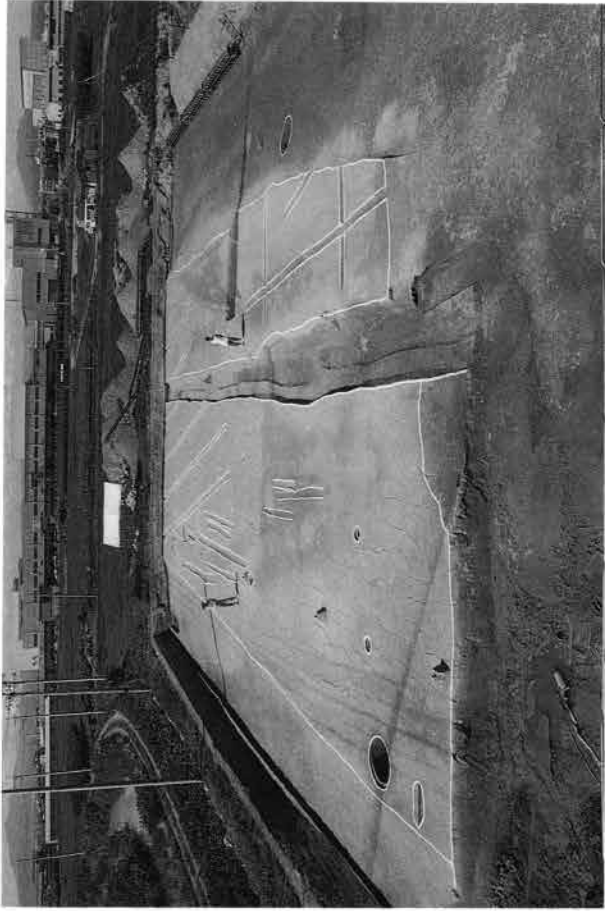
(2)大俣城跡C地区完掘状況（北から）



(1)大俣城跡D地区重機掘削状況（南から）



(2)大俣城跡D地区西壁土層断面（東から）



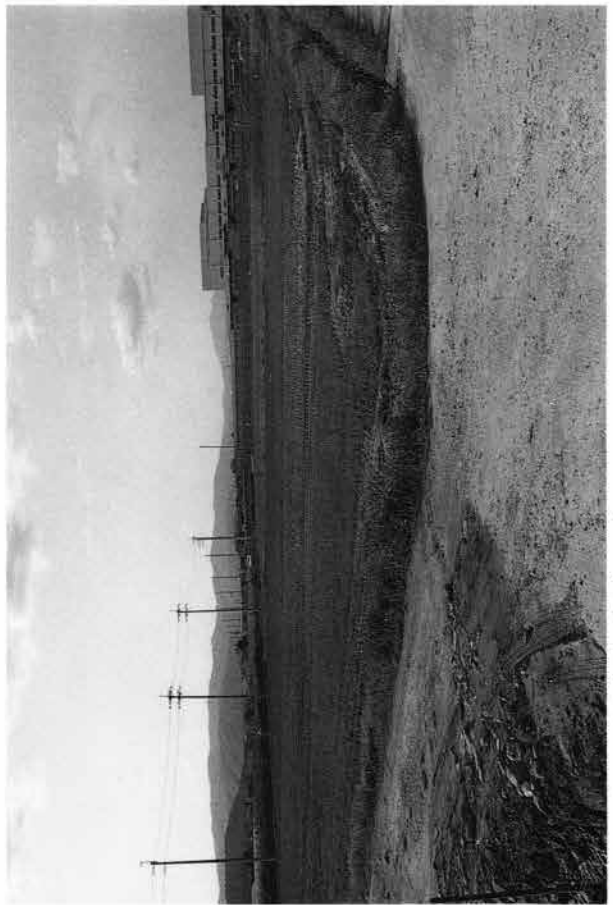
(3)第1遺構面全景(南から)



(4)S E10遺物出土状況



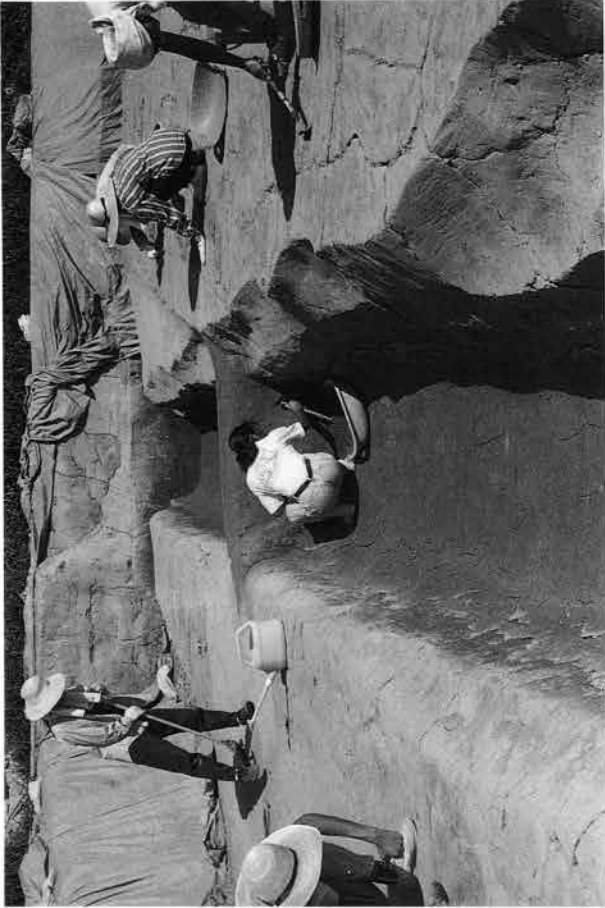
(1)内里八丁遺跡全景(北から)



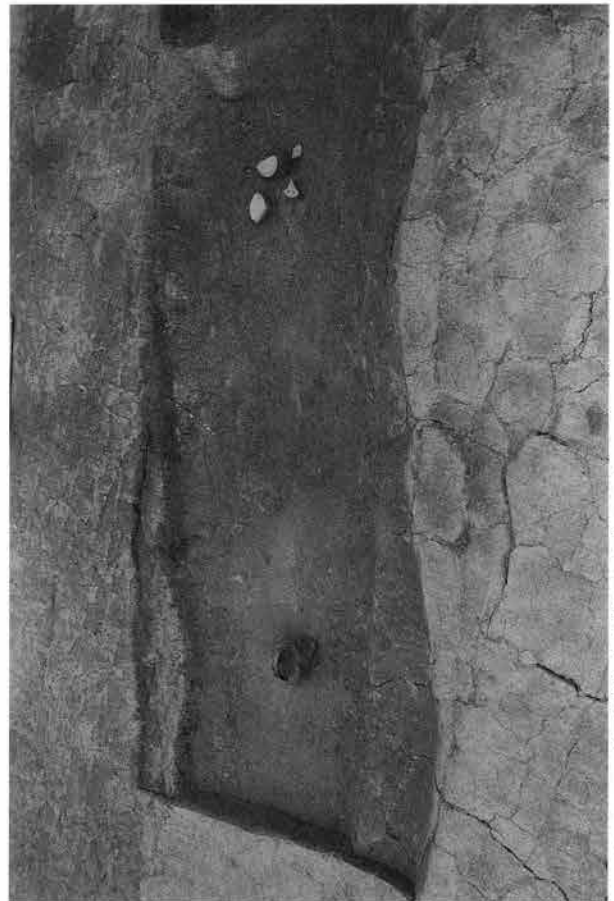
(2)D地区調査前全景(南東から)



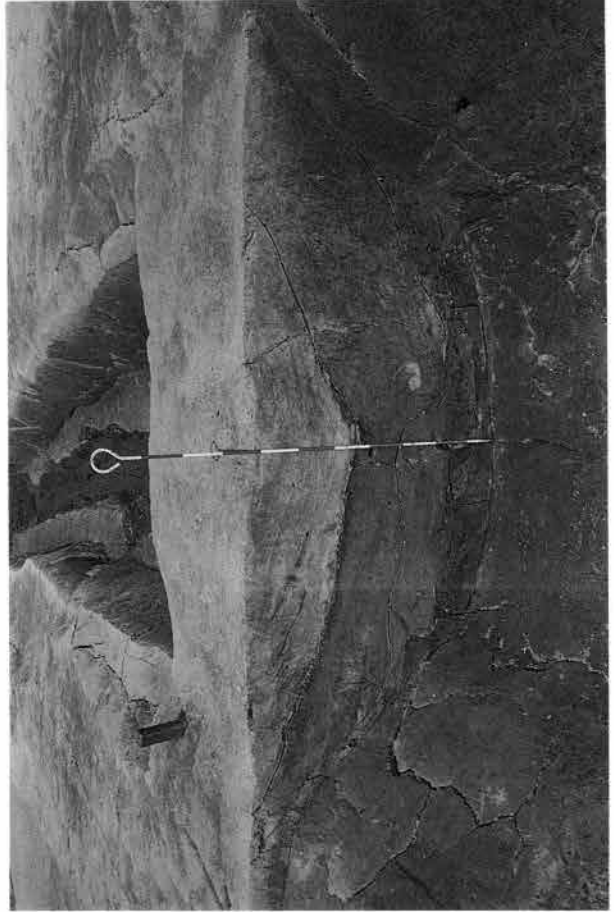
(1) 第2遺構面全景 (南から)



(3) 調査風景 (南から)



(2) S D85上層遺物出土状況 (東から)



(4) S D85セクション (南から)



(3) S X 12 検出状況



(4) S D 86 溝底の牛足跡群 (南から)



(1) S D 86 下層遺物出土状況 (南から)



(2) S D 86 溝底遺物出土状況 (東から)





(3)木製暗渠東小口 (東から)



(4)木製暗渠結合部 (北から)



(1)木製暗渠全景 (西から)



(2)木製暗渠・池状遺構セクション (南から)



(3)銅銭・丸靱出土状況（東から）



(4)和同開珎丸靱出土状況（東から）



(1)池状遺構セクション（南から）



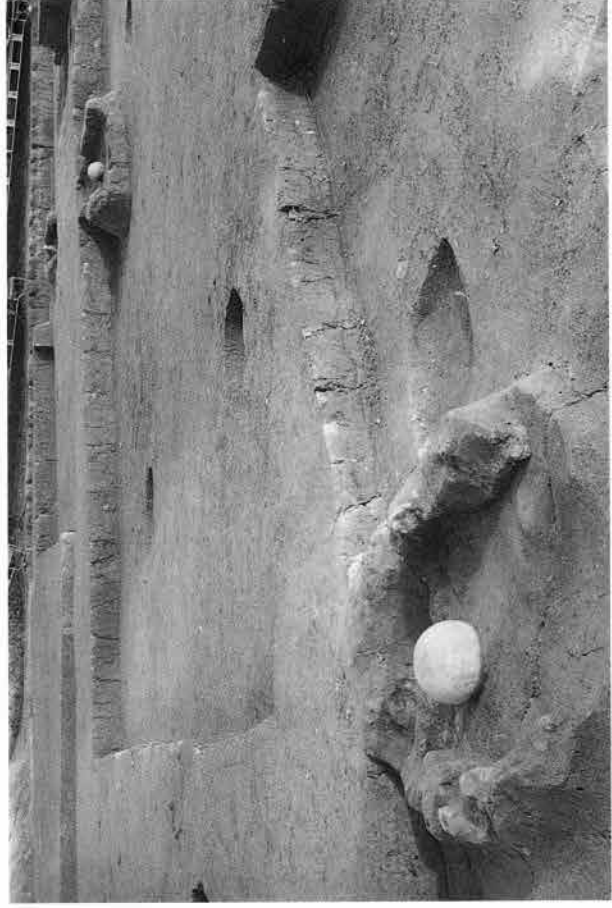
(2)金属器出土状況（西から）



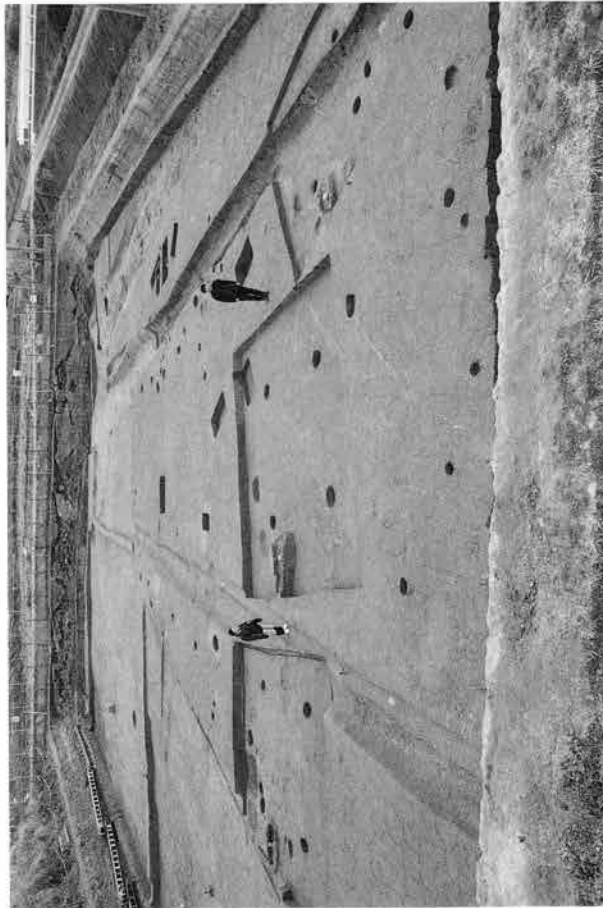
第3遺構面全景（空撮・下方が北）



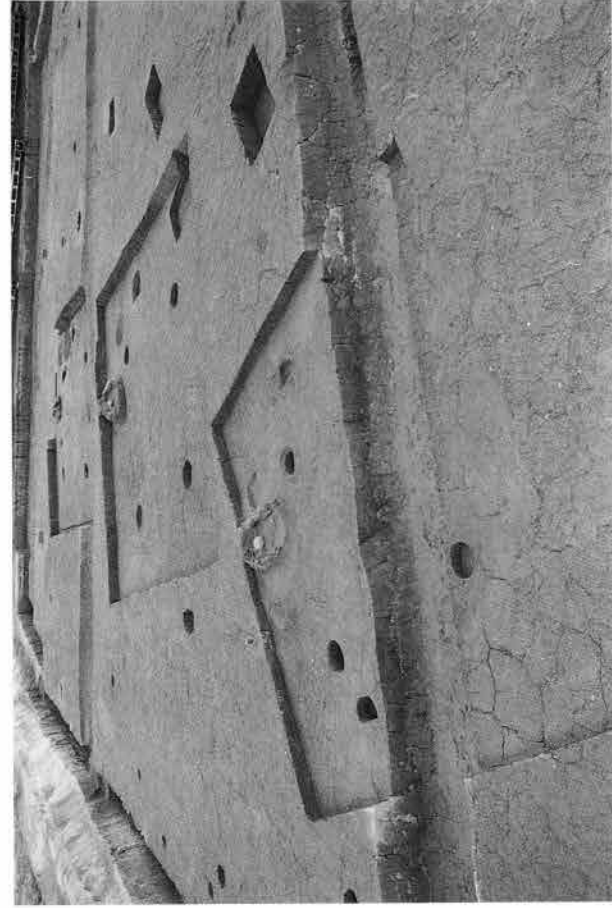
(3) S H06竈セクション (南東から)



(4) S H06竈支脚 (手前・西から)



(1) 第3遺構面全景 (北から)



(2) S H06・05・04全景 (手前・西から)



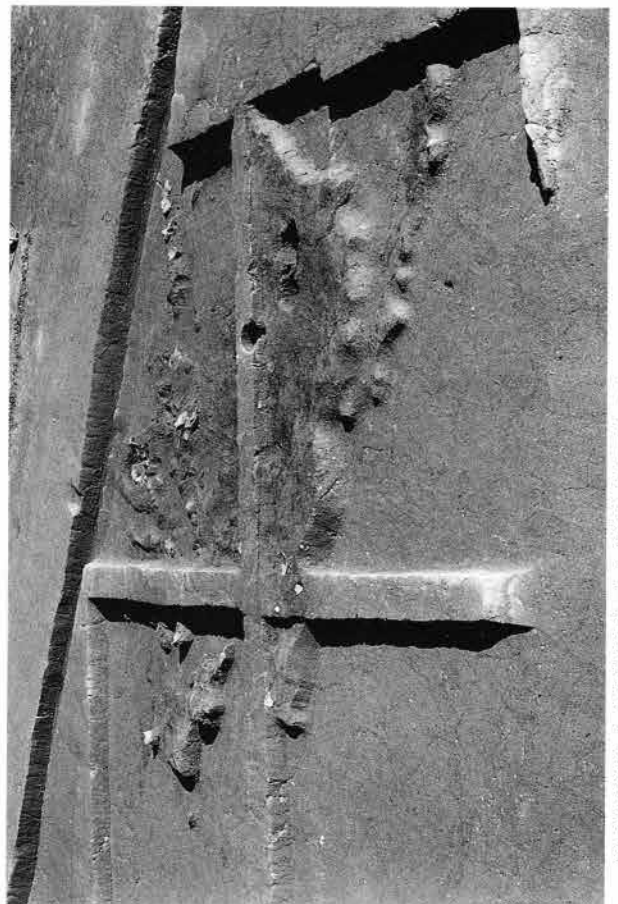
(3) S H04竈セクション (南東から)



(4) S H04床面勾玉出土状況 (北東から)



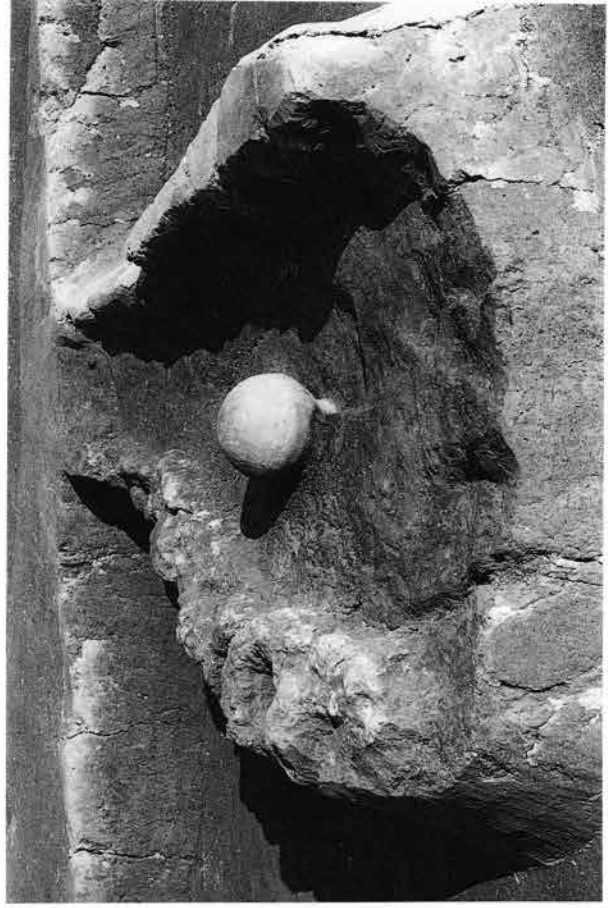
(1) S H04全景 (南西から)



(2) S H04埋土中間層遺物出土状況 (南西から)



(3) S H05竈セクション (南東から)



(4) S H05竈支脚 (南西から)



(1) S H05全景 (南西から)



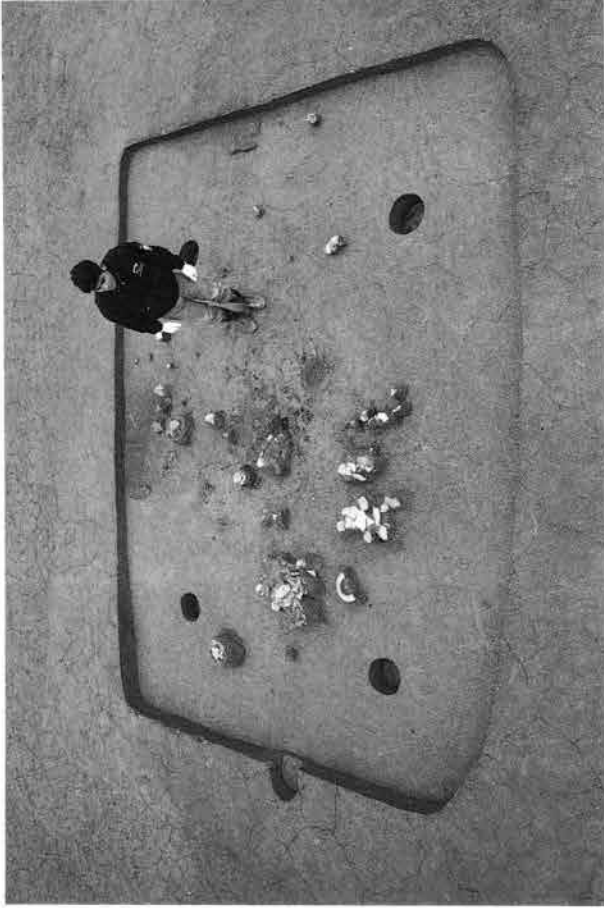
(2) S H05貯蔵穴 (北西から)



(1)第4遺構面全景(南から)



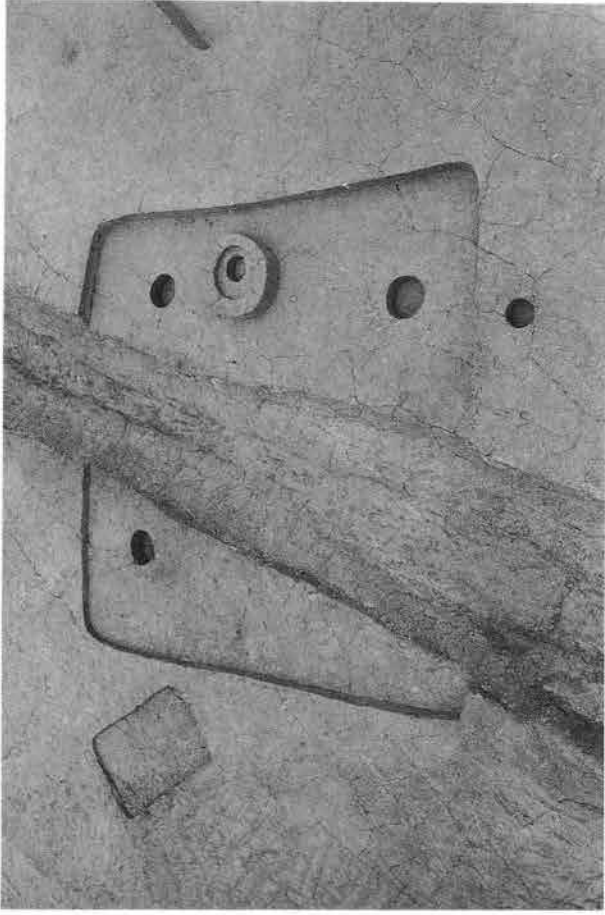
(2)第4遺構面全景(東から)



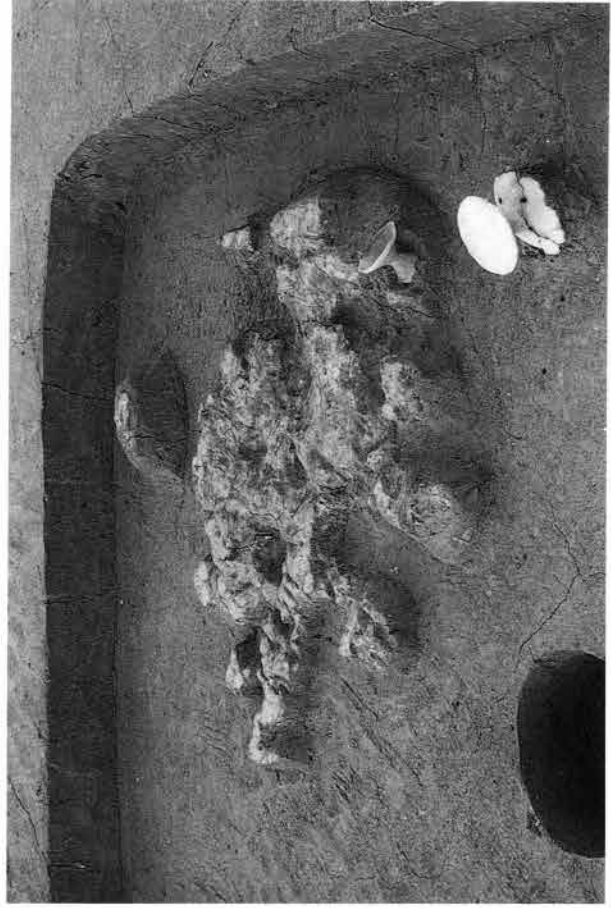
(3)S H 07全景(北西から)



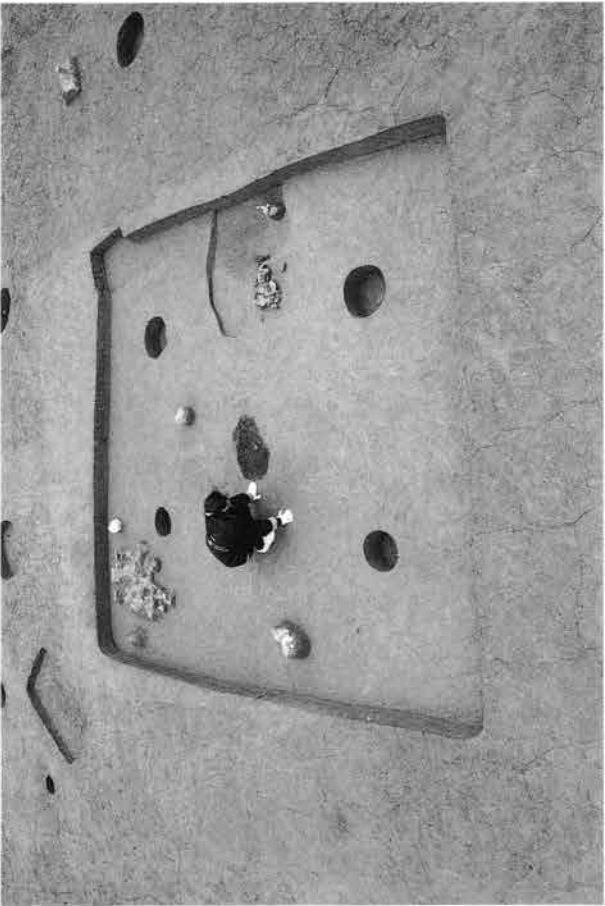
(4)S H 07貯蔵穴(北西から)



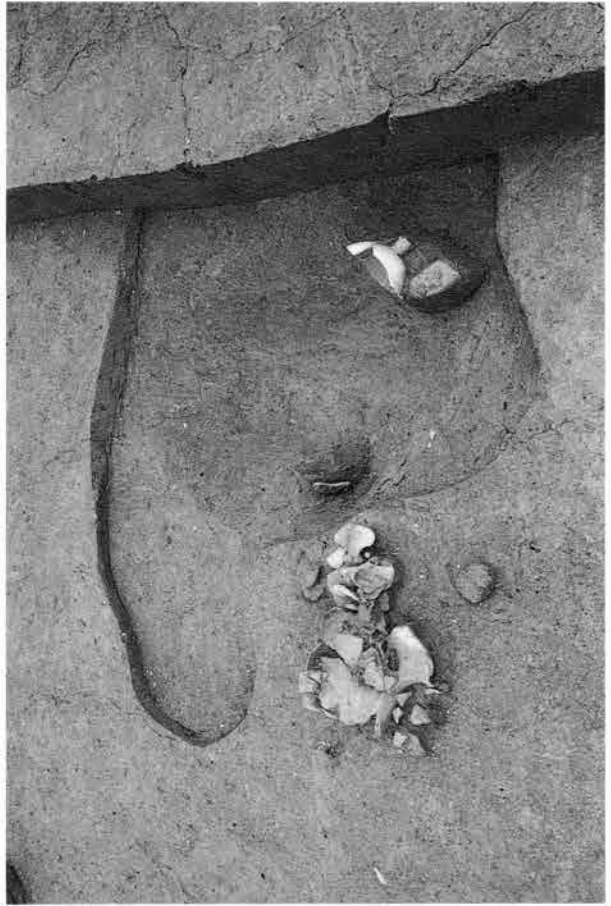
(3) S H09全景 (南から)



(4) S H08床面上の粘土塊 (南東から)

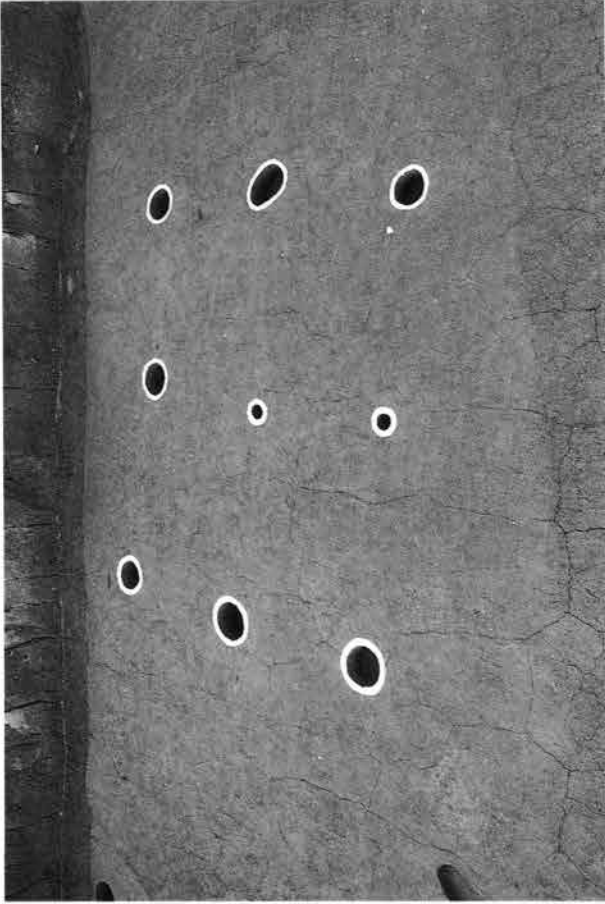


(1) S H08全景 (南西から)

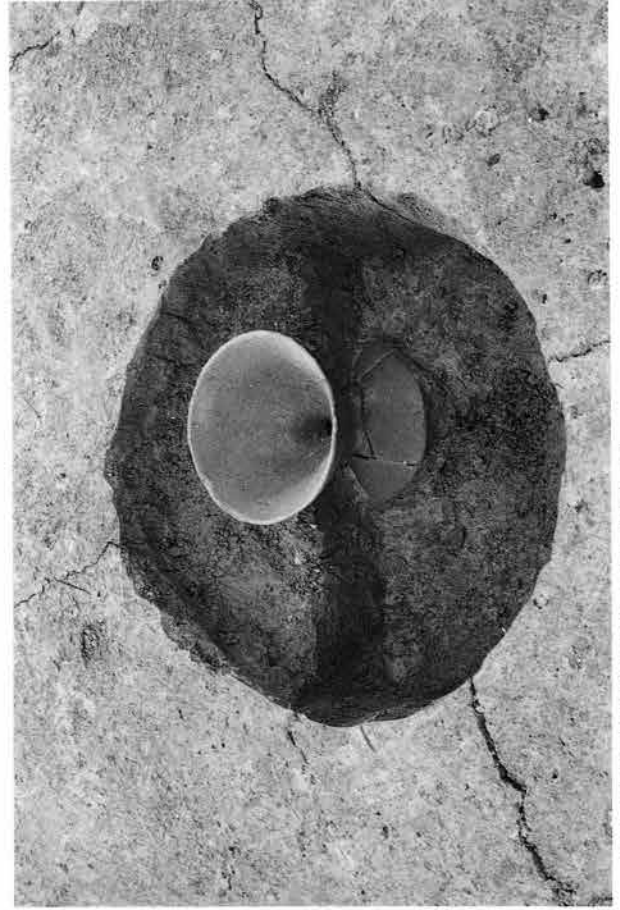


(2) S H08貯蔵穴 (南西から)





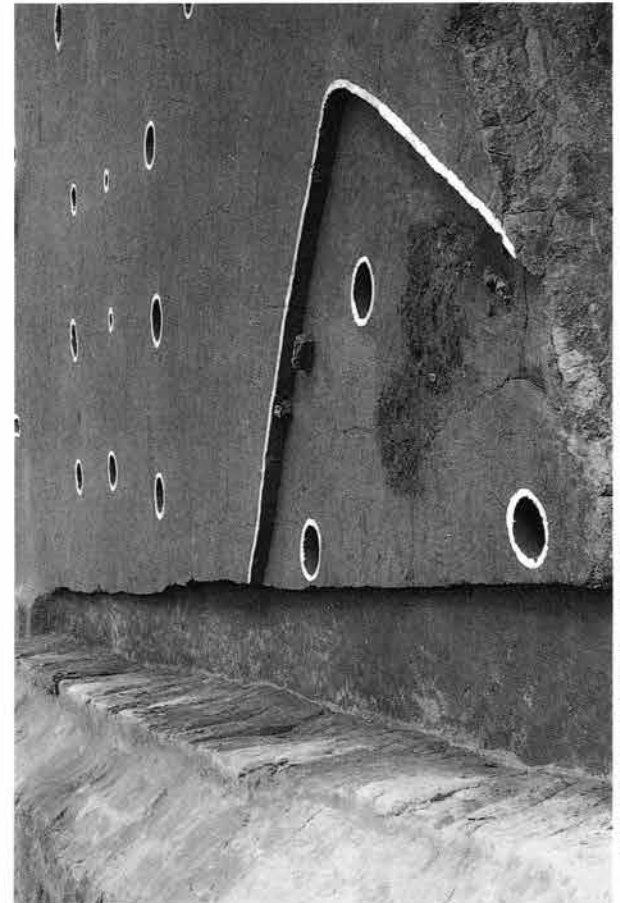
(3) S B 22 全景 (南から)



(4) S B 22 柱穴内器台出土状況 (東から)



(1) S H 10 全景 (南東から)



(2) S H 11 全景 (手前・西から)



(3) S D 90中層遺物出土状況 3 (南から)



(4) S D 90中層遺物出土状況 4 (南から)



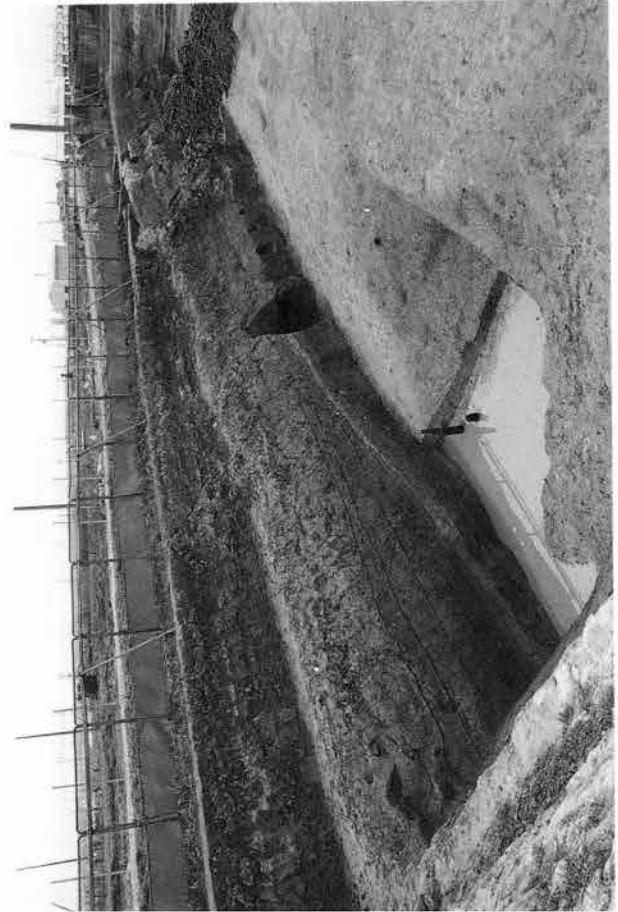
(1) S D 90中層遺物出土状況 1 (南から)



(2) S D 90中層遺物出土状況 2 (東から)



(3) S D90下層遺物出土状況 (北から)



(4) S D90セクション (北東から)



(1) S D90中層遺物出土状況 5 (北から)



(2) S D90中層遺物出土状況 6 (北から)



(1)第5遺構面全景(南から)



(3)徴高地東斜面断ち割り(西から)



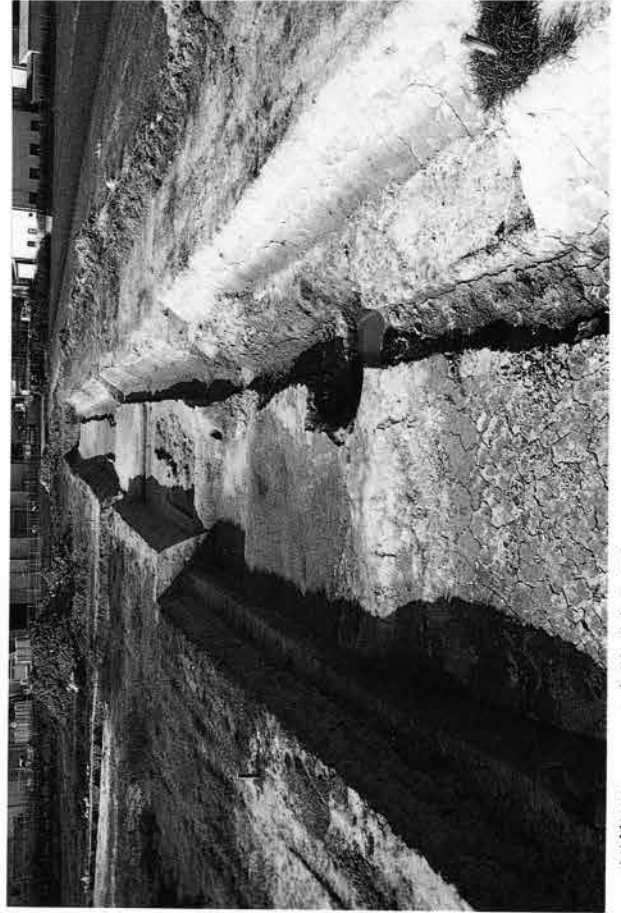
(2)D1地区北壁セクション(南から)



(4)東斜面断ち割りセクション(南から)



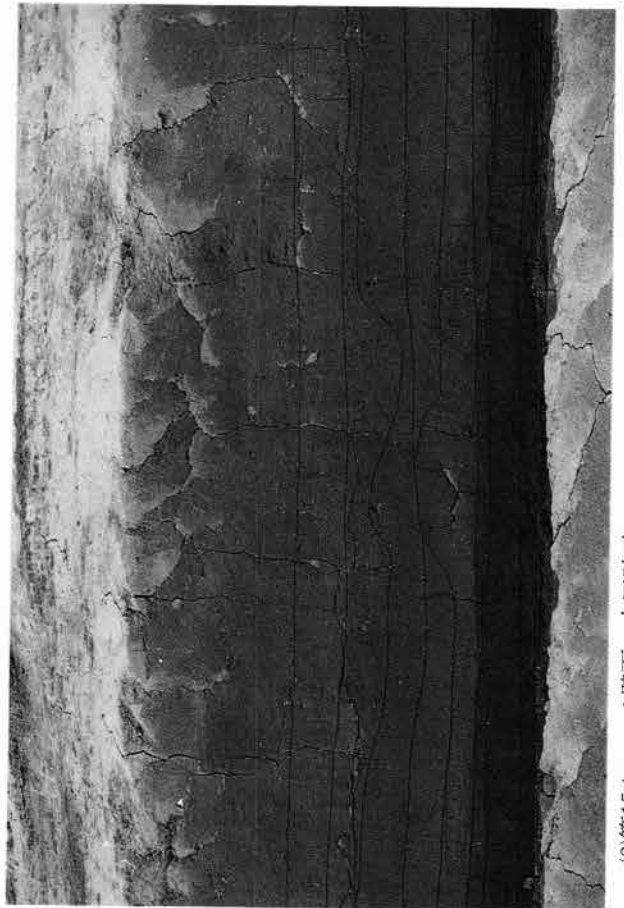
(3)現在の島畑 (第14トレンチの東)



(4)第19トレンチ全景 (南から)



(1)第15トレンチ全景 (東から)



(2)第15トレンチ壁面の水田畦畔



内里八丁遺跡出土遺物



(1)第2トレンチ全景(南から)



(2)第3トレンチ全景(北東から)

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第67冊							
編著者名	引原茂治・野々口陽子・伊野近富・尾崎昌之・黒坪一樹・大岩洋一・竹原一彦・岸岡貴英							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				TEL 075(933)3877			
発行年月日	西暦 1995 年		12 月		26 日			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
やまおこふん 山尾古墳	あやべしほうぐち ちょうやまお 綾部市坊口町山尾	203	99	32° 23' 11"	132° 46' 11"	19940418 ～ 19940913	700	道路建設
にしがいじん じゃいせき 西飼神社遺跡	まいづるしおおあ ざじとうこあざな かさこ 舞鶴市大字地頭小 字中迫	202	13	32° 25' 43"	132° 44' 16"	19940418 ～ 19940527	170	道路建設
りゅうびじあ と 龍尾寺跡	まいづるしおおあ ざおおまたこあざ べっしょう 舞鶴市大字大俣小 字別庄	202	10	32° 25' 51"	132° 44' 12"	19940509 ～ 19940512	30	道路建設
とうちゅうこ ふんぐん 洞中古墳群	まいづるしおおあ ざおおまたこあざ やはぎ 舞鶴市大字大俣小 字矢削	202	11	32° 25' 46"	132° 44' 6"	19940420 ～ 19940616	293	道路建設
おおまたじょ うあと 大俣城跡	まいづるしおおあ ざおおまた 舞鶴市大字大俣	202	12・265	32° 25' 51"	132° 44' 5"	19940418 ～ 19950127	2,600	道路建設
うちさとはっ ちょういせき 内里八丁遺跡	やわたしうちさと はっちょう、うち さとひゅうがどう ほか 八幡市内里八丁、 内里日向堂他	210	37	31° 51' 33"	133° 14' 51"	19940413 ～ 19950303	4,000	道路建設
こうづやいせ き 上津屋遺跡	やわたしこうづや 八幡市上津屋	210		31° 51' 51"	133° 15' 6"	19940513 ～ 19940524	450	道路建設



所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山尾古墳	古墳 中世墓	飛鳥 鎌倉	横穴式石室1基 中世墓1基	須恵器 瓦質土器、古銭	
西飼神社遺跡		なし	なし		
龍尾寺跡	寺院跡	中世	なし		
洞中古墳群	古墓	近世	土壙墓9基	古銭、陶磁器	古墳ではないことが判明。
大俣城跡	城館跡	中世～近世	堀切、土壙墓	古銭、陶磁器	
内里八丁遺跡	集落跡	古墳、奈良、平安 鎌倉	竪穴住居、掘立柱建物、 溝、井戸、池状遺構、 暗渠、鳥畑	古式土師器、須恵器 土師器、黒色土器、 輸入陶磁器、瓦器、 銭貨、銚帯、木器、 ミニチュア土器	
上津屋遺跡	散布地		噴砂		遺跡範囲外

## 京都府遺跡調査概報 第67冊

平成7年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961 (代)